西山・小和田・永宗

国道183号線改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

1982

広島県教育委員会

(財) 広島県埋蔵文化財調査センター

西山・小和田・永宗

国道183号線改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

1982

広島県教育委員会
(財) 広島県埋蔵文化財調査センター

例　　言

1．本書は昭和56年４月から８月まで実施した庄原市新庄町の国道183号線改良工事に係る埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告である。

2．調査は広島県教育委員会が広島県土木部から配当替を受け、(財)広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。

3．本文は小都隆（Ⅰ），沢元保夫（Ⅱ・Ⅴ），桑原隆博（Ⅲ・Ⅳ・Ⅴの出土遺物），佐々木直彦（Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ－５，付編)が分担して執筆し，佐々木が編集した。

4．出土遺物・遺構の整理・実測・写真撮影・整図等は，高倉浩一，佐々木，沢元，松井和幸，青山透が行なった。

5．出土遺物のうち断面黒ヌリは須恵器・白ヌキは土師器・斜線は石器である。遺構中のアミ目は焼土である。

6．第１図は，国土地理院発行の1/50,000の地形図（庄原・上布野・上下・三次）を使用した。

目　次

Ⅰ．はじめに …… 1
Ⅱ．位置と環境 …… 2
　1．庄原市周辺の地理的環境 …… 2
　2．庄原市周辺の歴史的環境 …… 5
Ⅲ．西山遺跡 …… 9
　1．はじめに …… 11
　2．弥生時代の遺構と遺物 …… 13
　3．古墳時代の遺構と遺物 …… 18
　4．おわりに …… 29
Ⅳ．小和田遺跡 …… 31
　1．はじめに …… 33
　2．住居跡 …… 35
　3．土坑 …… 48
　4．その他の遺物 …… 49
　5．おわりに …… 50
Ⅴ．永宗遺跡 …… 51
　1．はじめに …… 53
　2．住居跡 …… 55
　3．建物跡 …… 65
　4．その他の遺構・遺物 …… 68
　5．おわりに …… 69
付編
2本柱の古代復元住居 …… 73
　1．はじめに …… 73
　2．復元過程 …… 73
　3．まとめ …… 76

I. はじめに

一般国道183号線は，庄原市街地をぬけ比婆郡西城町に至るが，近年のいちじるしい交通量の増大により，市街地に渋滞，騒音などの影響が大きくなってきた。

このため広島県庄原土木事務所では，庄原市新庄町一高町間1900mについて，市街地を迂回するバイパスの建設を計画し広島県教育委員会（以下県教委）あて，文化財の有無ならびに取扱いについて協議した。県教委ではこれをうけて分布調査ならびに試掘調査を実施し，路線内で永宗・西山・小和田の3か所の遺跡を確認した。このためこの取扱いについて協議を重ねたがいずれも設計変更は困難なことから，事前に記録保存のための発掘調査を行うこととなった。

広島県庄原土木事務所は，昭和56年4月6日文化庁長官あて埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の実施について通知し，調査の依頼をうけた県教委は（財）広島県埋蔵文化財調査センターに委託して発掘調査を実施することになった。

発掘調査は昭和56年4月13日から8月28日まで約5か月間，（財）広島県埋蔵文化財調査センターの高倉浩一，佐々木直彦，沢元保夫が主としてあたった。

この調査は庄原地域では初の大規模調査であり各方面から注目されていたが，永宗遺跡で古墳時代の竪穴住居跡4軒と掘立柱建物跡3棟，西山遺跡で弥生時代，古墳時代の竪穴住居跡各1軒，掘立柱建物跡1棟，小和田遺跡で古墳時代の竪穴住居跡7軒を検出し，出土遺物でも古墳時代前半期の一括遺物を検出するなど，庄原地域における弥生～古墳時代にかけての調査研究に大きな成果をあげることとなった。

またこうした成果について地元の方々に知っていただくため8月22日には西山遺跡で遺跡見学会を開催したが，約200名の参加を得，盛会となった。この見学会では古代集落の実態を現地でふれ，また竪穴住居の上屋の復原も行って大きな反響があり，地域学習に大きな成果をあげることができた。

なお本調査にあたっては広島県文化財保護審議会委員松崎寿和（(財)広島県埋蔵文化財調査センター常務理事），潮見浩（広島大学教授）氏の教示を得たほか，広島県庄原土木事務所，庄原市教育委員会の協力をえた。記して謝意を表したい。

Ⅱ．位置と環境

1．庄原市周辺の地理的環境

西山遺跡，小和田遺跡，永宗遺跡の3遺跡は，いずれも庄原市新庄町に所在し，市街地南東の標高300m程度の低い丘陵上に位置する。

庄原市は，庄原町を中心に隣接した6か村が合併して昭和29年3月に市制を施した県北第2の都市である。広島県の北東部に位置し，東西22km，南北18km，総面積245㎢の市域をもつ。

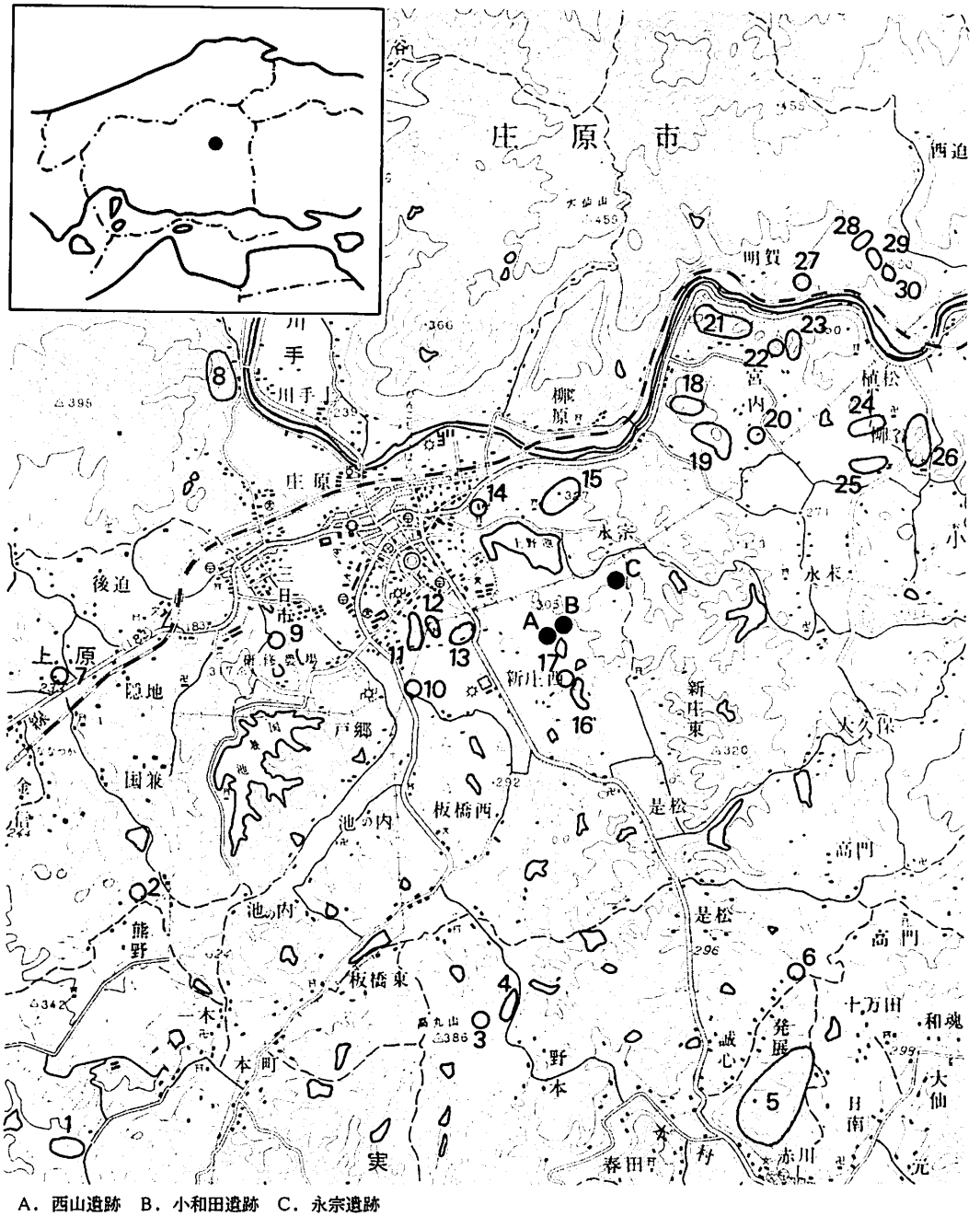
広島県の地形区は大きく，(1)比較的平坦で広い山地とその山間部の盆地群，(2)瀬戸内海沿岸の狭小な低地，(3)瀬戸内海に浮かぶ島嶼群に三分される。庄原市の中心となる庄原盆地は，このうちの(1)に属し標高400～600mの吉備高原に刻み込まれた広義の三次盆地の一部にあたる。庄原盆地の北側には，標高1000～1350mの中国脊梁山脈が連なり，南側では神石高原に接している。気候の特色は，まず盆地特有の気温の較差が大きくて低温であることがあげられる。降水量は年間1600mm程度で，積雪日数は約2か月，最深積雪量は30cmを測る。その気候条件の下で，植生は赤松林を主として，落葉広葉樹のコナラ等が分布している。地質学的にみると，庄原盆地には広く備北層群が分布していることがわかる。備北層群は第三紀の頃，このあたりが第一瀬戸内海の一部であった時に堆積した海成層で約100mの厚さがあり，これらの層から化石が産出されることが知られている。盆地の南北には断層があり，北側では高田流紋岩類が備北層群の上に衡上し，南側では吉舎安山岩類が備北層群の上に衡上する。いずれも白亜紀に形成された酸性火成岩であるが，この白亜紀の火成岩類には庄原北部の勝光山でみられるようにロウ鉱床を伴う場合がある。

Fig.3の地形分類図は，『土地分類基本調査書　庄原』を基に，加筆修正して作成した。以下にその地形の特色を述べる。

庄原山地　庄原盆地の沖積面の北側で，西城川と川北川に狭まれる位置にある大仙山などがこれに相当する。この山地の南部分は標高450m程度の小起伏の山地で，古墳群などが分布している。北側は標高550～600mとやや高くなり起伏量が増大する。いづれも流紋岩質凝灰岩等で山容が形づくられている。

庄原丘陵　主に盆地南部に分布する備北層群地域に形成される。標高は300m程度で丘陵を刻んで谷底平野が発達し，長い尾根が形成される。この尾根上に，群をなして古墳が造営されている。

庄原台地(段丘)　西城川・川北川は，その流域に比較的広い三段の河岸段丘を形成している。庄原市街地はこの内の中位の段丘上に立地している。三日市では段丘礫層の露頭があり，その層厚は3mを測る。礫層の上には三瓶山火山灰層が観察できる。



A．西山遺跡　B．小和田遺跡　C．永宗遺跡

1．山神古墳群　2．熊野遺跡　3．大風呂古墳　4．御堂古墳群　5．千ケ寺古墳群　6．発展古墳群　7．亀井尻古窯跡
8．旧寺古墳群　9．大成遺跡　10．須久母塚古墳　11．西原古墳群　12．狐谷古墳群　13．石塔上古墳群
14．宝蔵寺宝篋印塔　15．ひさご山古墳群　16．新庄帝王古墳群　17．和田古墳　18．帝王古墳群　19．陰地古墳群
20．神福寺跡　21．大年古墳群　22．山根古墳群　23．寄藤古墳群　24．鐘鋳原古墳群　25．広政古墳群　26．柳谷古墳群
27．明賀古墳　28．境ケ谷北古墳群　29．境ケ谷遺跡　30．境ケ谷南古墳群

Fig. 1　庄原市周辺地形図(1：50,000)

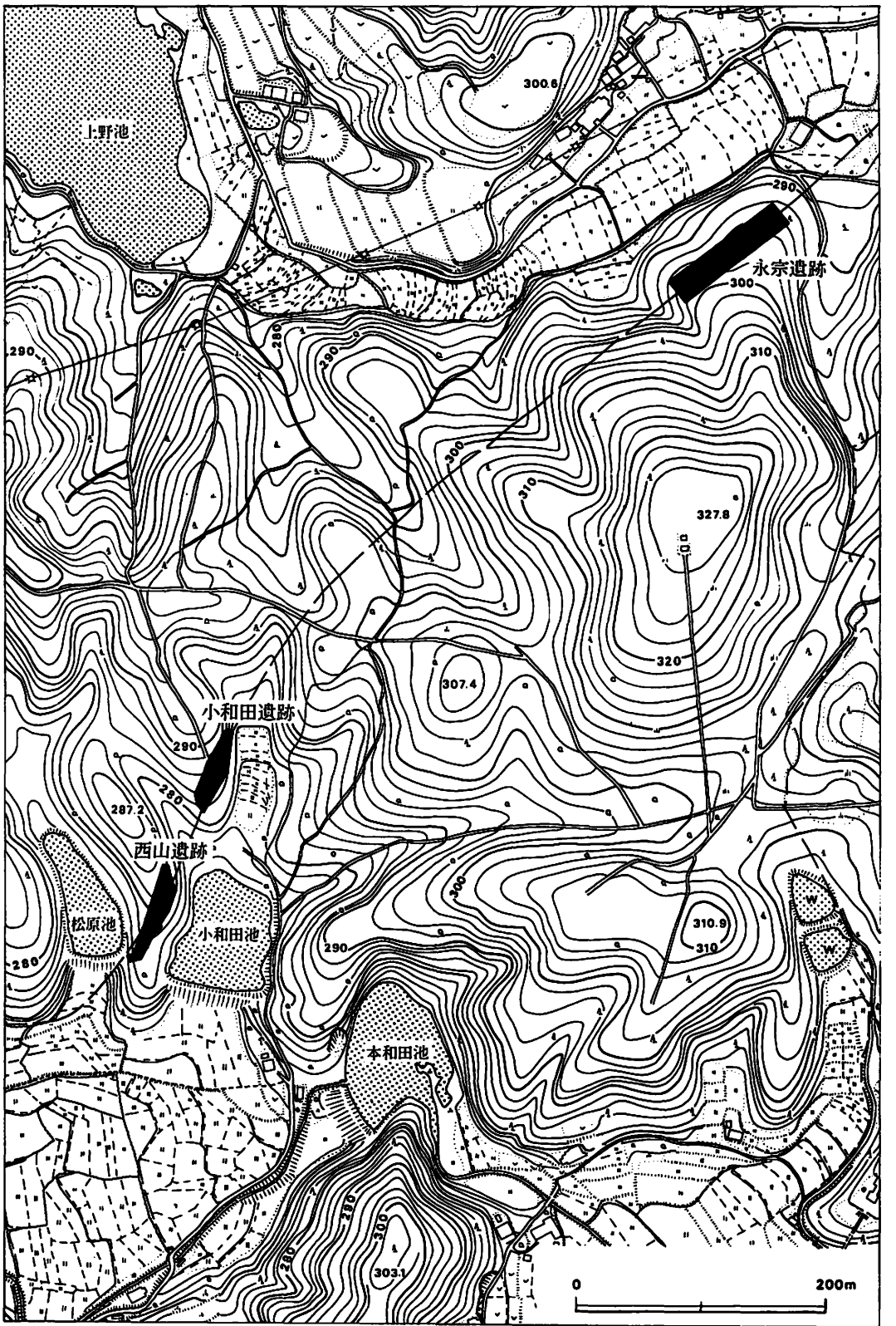


Fig. 2　西山・小和田・永宗遺跡周辺地形図

庄原低地　河川流域には氾濫原が形成されており，西城川流域では旧河道が識別できる。また谷底平野が丘陵深く延びており，その谷頭には数多くの溜池が作られている。これらの溜池のうちで最大のものは国兼池で県下最大の規模を持つ。次いで上野公園の上野池となっている。

三遺跡の立地する地形面は，低平な庄原丘陵に区分される。西山遺跡・小和田遺跡は低地部を望む南向きの尾根上にあり，一本の谷で隔てられている。谷底に湧水点を持ち，小和田池・松原池が造られている。永宗遺跡は丘陵頂部から北へ広がった平坦面で，黒ボクが厚く堆積する。東西にある谷には湧水がみられ，いずれの遺跡も低地を望む高所にあり湧水を持つ。これらの条件は，生活・経済の基盤となる稲作に有利であったろう。

2．庄原市周辺の歴史的環境

庄原市は古くより山陽と山陰を結ぶ交通路であるとともに，中国山地の山砂鉄を利用した鉄の生産地としても知られ，隣接する三次市と同様，遺跡が数多く密集する地域である。

旧石器時代・縄文時代の遺跡は隣接する東城町の帝釈峡遺跡群が著名であるが，この周辺ではほとんどその存在が知られていない。旧石器時代では今回の調査で小和田遺跡より単独出土した槍先型尖頭器が初例であり，縄文時代では大原１号遺跡より中期から後期の土器片が出土したのと，門田町の笹渕遺跡で早期の山形押型文土器が採集されているくらいである。

弥生時代にはやや遺跡数が増加する。大原１号遺跡・七塚町大唱山遺跡では，中期あるいは後期の住居跡が発見され，七塚町蜂原遺跡・山内町田尻山遺跡でも弥生土器の出土が知られている。今回の調査でも西山遺跡から後期の住居跡が検出されたほか，底部に籾圧痕のある土器も発見されている。

古墳時代になると遺跡数は爆発的に増加する。その多くは古墳であるが，集落跡もある。大成遺跡は道路建設のため消滅したが，５～６軒の住居跡が確認され，本村町で昭和31年に調査された鍬寄遺跡でも住居跡の存在が知られている。上原町の熊野遺跡では多くの土師器が採集されており，住居跡の存在が予想される。また牛乗遺跡では13軒もの住居跡が検出され，鍛冶関係の遺構もみられる。鍛冶炉状の遺構が確認された遺跡としては，斜面上にコの字形の住居跡が数多く検出された川西町の境ケ谷遺跡がある。これらの鍛冶関係の遺跡は鉄生産ともつながり，文献や木簡に記載される事実といかにかかわるか今後の成果に期待が持たれる。

古墳は見晴らしの良い丘陵上や山地尾根部に立地する。地図上にプロットしてみると，水系ごとにある程度のまとまりを持って分布している。西城川水系では小用町，宮内町一帯の丘陵に，全長50m の前方後円墳を中心として９基の前方後円墳が集まっている広政古墳群をはじめとして，大年古墳群・山根古墳群・寄藤山古墳群・鐘鋳原古墳群などが所在する。本町には県史跡に指定されている瓢山古墳があり，全長36m を測る。また掛田町では，全長62m で埴輪も出土する前方後円墳を主墳として，陪塚と思われる８基の円墳が従う旧寺古墳群が知られてい

る。国兼池を水源とする国兼川の流域では，各古墳群が２～３kmの間隔を置いて分布する傾向がみられる。発掘調査のおこなわれた大唱山古墳群・田尻山古墳のほか，大原北古墳群・狐塚古墳群が七塚原に形成されている。本村川の周囲にも多くの古墳群があり，式内郷社の蘇羅彦神社が鎮座する月貞寺古墳群は31基の円墳と１基の方墳で構成され５群に分けられる。また，鉄剣を出土した発展古墳群や大原古墳群・国重古墳群・鍬寄古墳群などが主に本村川右岸丘陵上に占地している。春田町の千ケ寺古墳群は三支群に分けられるが，中には県下でもめずらしい前方後方墳が造営されており，周囲にある方墳と併せてそのあり方に興味が持たれる。川北川が西城川に入るあたりの左岸尾根上には，平等寺谷古墳群・久井田山古墳群・富田古墳群などが見られる。

時期別にみていくと，弥生時代後期に墳丘をもち列石・貼石により区画された墳墓として知られる田尻山第16号古墳下の方形墓がある。内部主体は木棺，裾に箱式石棺が検出され，墳丘形態からは山陰の四隅突出型方墳との共通性が認められている。これに後出する前半期の古墳としては瓢山古墳や竪穴式石室を持つと考えられる旧寺古墳群・須久毋塚古墳がある。横穴式石室の採用されるまでの内部主体は，発展古墳群・月貞寺古墳群の調査で明らかになったように土坑，粘土槨，小形竪穴式石室と多様であり，大風呂古墳・御堂古墳群などもこの時期のものであろう。横穴式石室のみられる古墳は明賀古墳や鍬寄第６号古墳などで，巨石を用いた立派なものである。後期に属するものは投石古墳群・大原古墳群・篠津原古墳群などがあり，国重第１号古墳・大原第４号古墳など終末期の古墳も存在する。

歴史時代には，亀井尻瓦窯や神福寺が存在した。県史跡の亀井尻瓦窯は庄原市街の入口，上原町にある。瓦を焼いた平窯で，窯体は長さ３m，幅２mの規模で燃焼室と焼成室に分けられている。出土した瓦は複弁蓮華文の軒丸瓦や平瓦・丸瓦で，軒平瓦らしきものもあり，奈良前期頃のものである。神福寺跡は亀井尻瓦窯より2.5km離れた宮内町に所在し，複弁蓮華文の軒丸瓦などが出土することから，亀井尻で焼かれた瓦が運びこまれたと考えられる。同寺の礎石は，近接する宮内八幡神社の本殿礎石や手水鉢に利用されるなど，神社境内に散在している。

引用・参考文献

潮見浩「広島県庄原市鍬寄遺跡の調査」　『私たちの考古学』17　1958
潮見浩「庄原市域の遺跡・古墳」　『広島県文化財ニュース』第24号　1964
武永健一郎「広島県の地形の特色」　『鈴ケ峯女子短期大学自然科学研究集報』13　1967
武永健一郎「広島県の地形区分類（第２集）」　『鈴ケ峯女子短期大学自然科学研究集報』13　1967
庄原市文化財保護委員会『庄原市の文化財』　1971
向田裕始「庄原市上原町熊野遺跡出土の土師器」　『芸備』第２集所収　1974

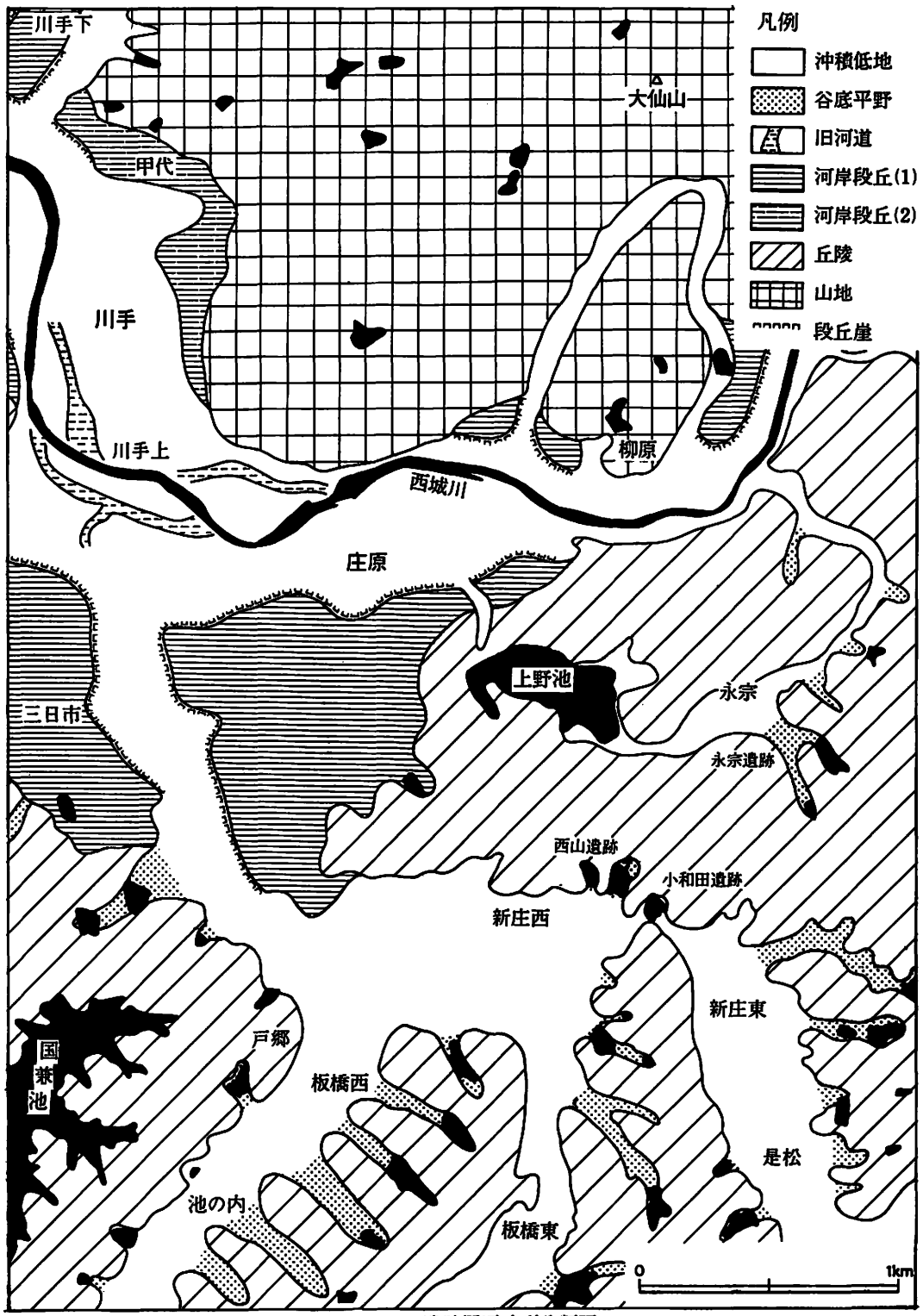


Fig. 3 遺跡周辺地形分類図

広島県教育委員会『大風呂古墳発掘調査概報』　1976
広島県『広島県史』地誌編，考古編　1977，1979
広島県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1)　1978
広島県『土地分類基本調査　庄原』　1978
原田隆雄・服部宜昭「庄原市における考古学的遺物・遺跡（弥生・古墳・古瓦）見てあるき」
『格物致知』第5号所収　1979
松崎寿和『広島県の考古学』吉川弘文堂　1981
芸備友の会『広島県の主要古墳』　1979

Ⅲ. 西 山 遺 跡

Fig. 4　西山遺跡遠景（西から）

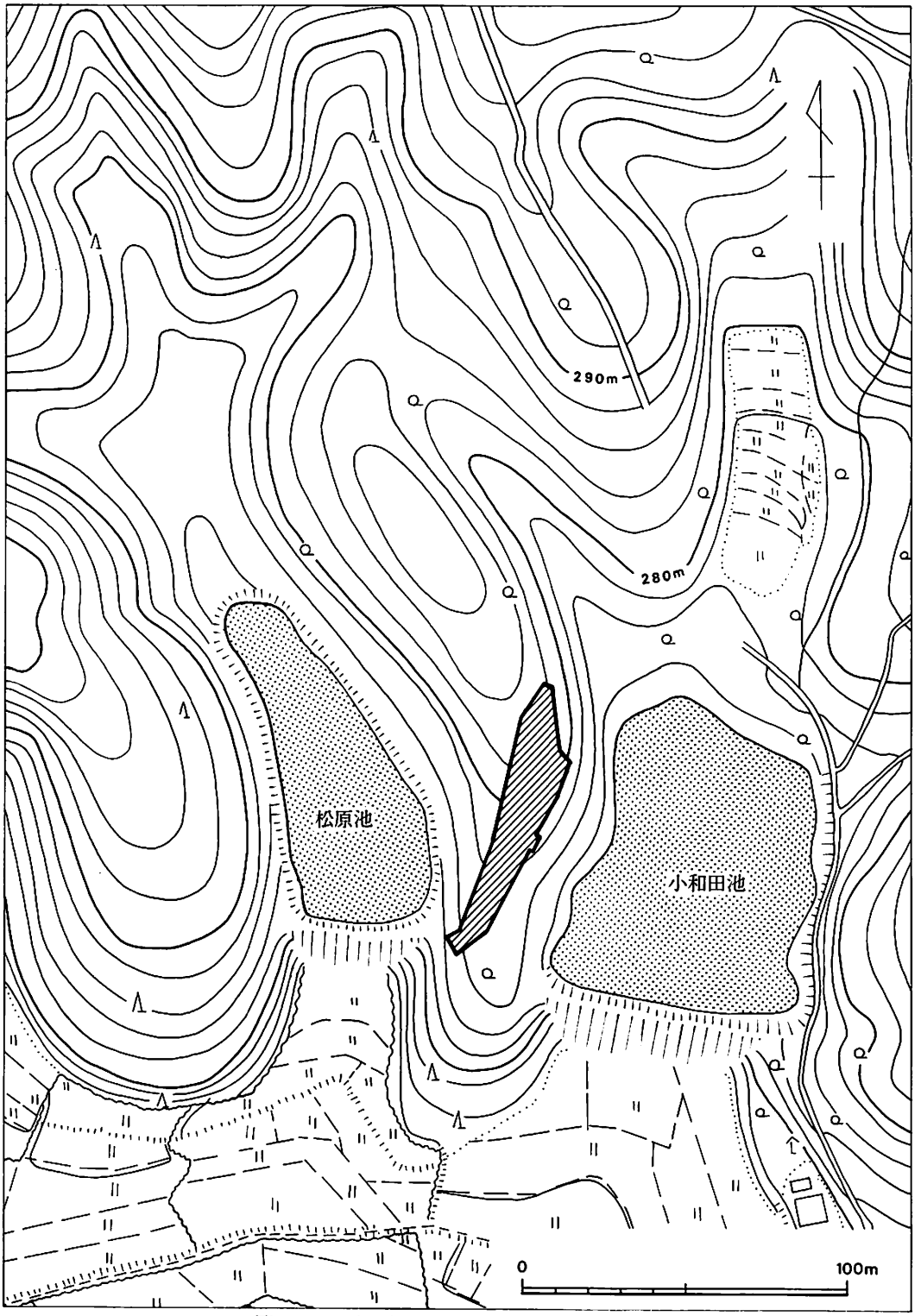


Fig. 5　西山遺跡周辺地形図

1．はじめに

西山遺跡は，新庄町字柿内・松原に所在する。調査は６月１日から７月19日まで。路線予定地のうち谷部分を除く約1100㎡について全面発掘を行なった。

本遺跡は新庄町の市街地平野部を望む丘陵先端のなだらかな南向き傾斜地に立地し，標高は発掘区北側最高部で 282.5ｍ，同南側最低部で 275.0ｍである。水田面との比高差は15ｍ前後である。尾根頂部の平坦面幅は狭く，両側は急斜面となり，東西には農業用水池である松原池，小和田池がある。遺構は現地表下10～35cmの吉備土の地山面で検出した。検出された遺構は，住居跡２軒，掘立柱の建物跡１棟，土坑７基，ピット列，溝各１本である。

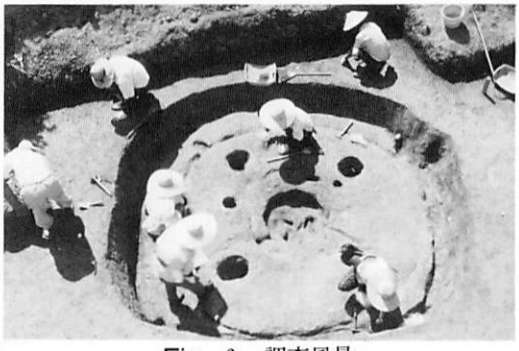


Fig. 6　調査風景

Fig. 7　西山遺跡完掘後（北東から）

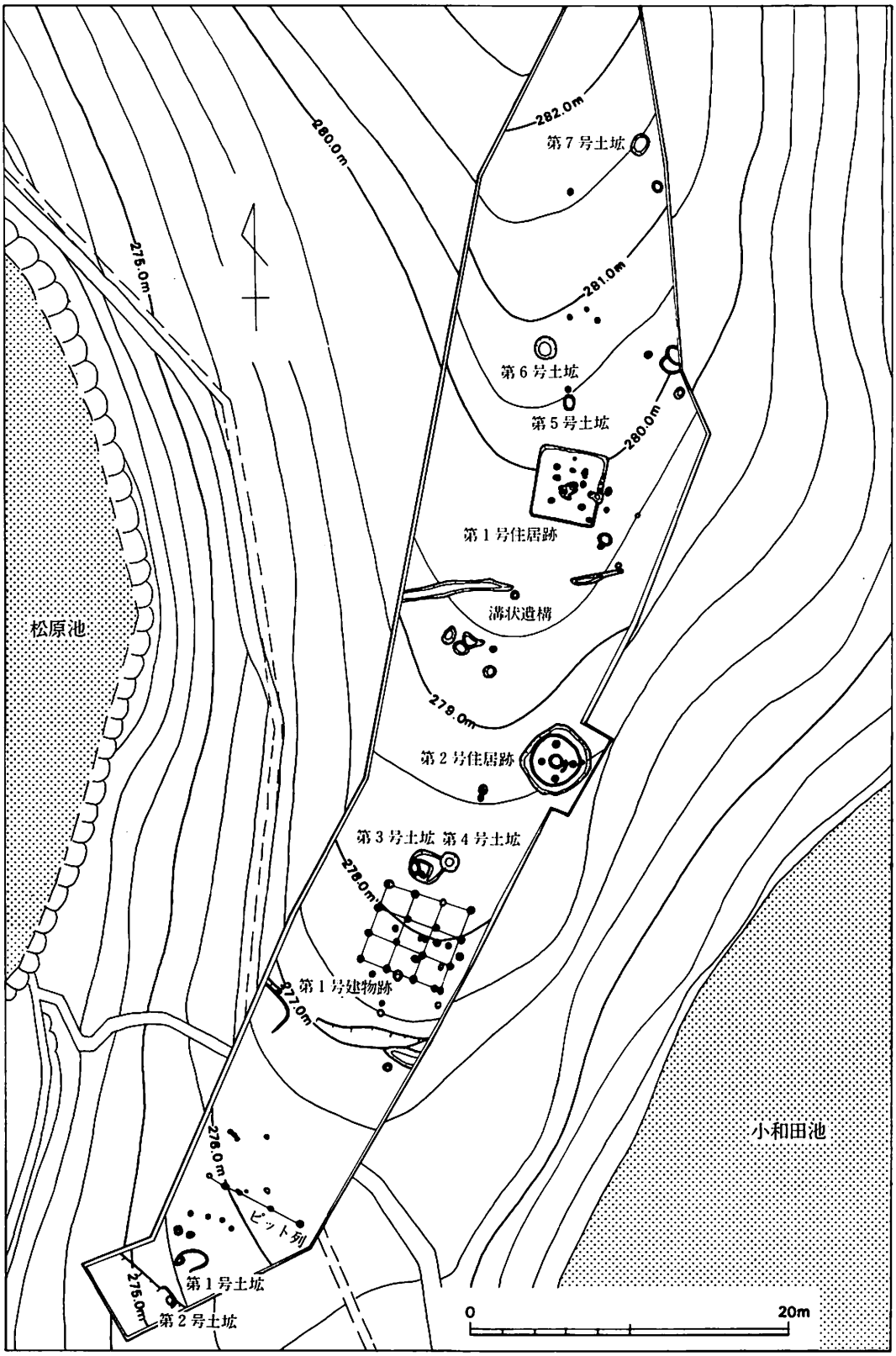


Fig. 8　西山遺跡遺構配置図

2．弥生時代の遺構と遺物

第２号住居跡

発掘区のほぼ中央に位置し，尾根頂部からはやや低まった部分に位置する。住居の東側，壁より約２ｍで小和田池へ向かって急斜面となっている。

長軸 415 cm，短軸 390 cmを測り，平面形はやや胴の張る隅丸方形を呈す。南コーナー壁は若干内側へせり出している。長軸はＮ48°Ｅをとる。壁高は北東壁56cm，南東壁30cm，南西壁62cm，北西壁62cmとかなり深く掘込まれており，遺存状態は極めて良好であった。壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁面には水平方向に幾筋もの条痕が残されており，住居構築時の工具痕と思われる。床面上20～30cmで既に岩盤に達しており，床は非常に堅緻である。壁溝は深さ10cm前後で

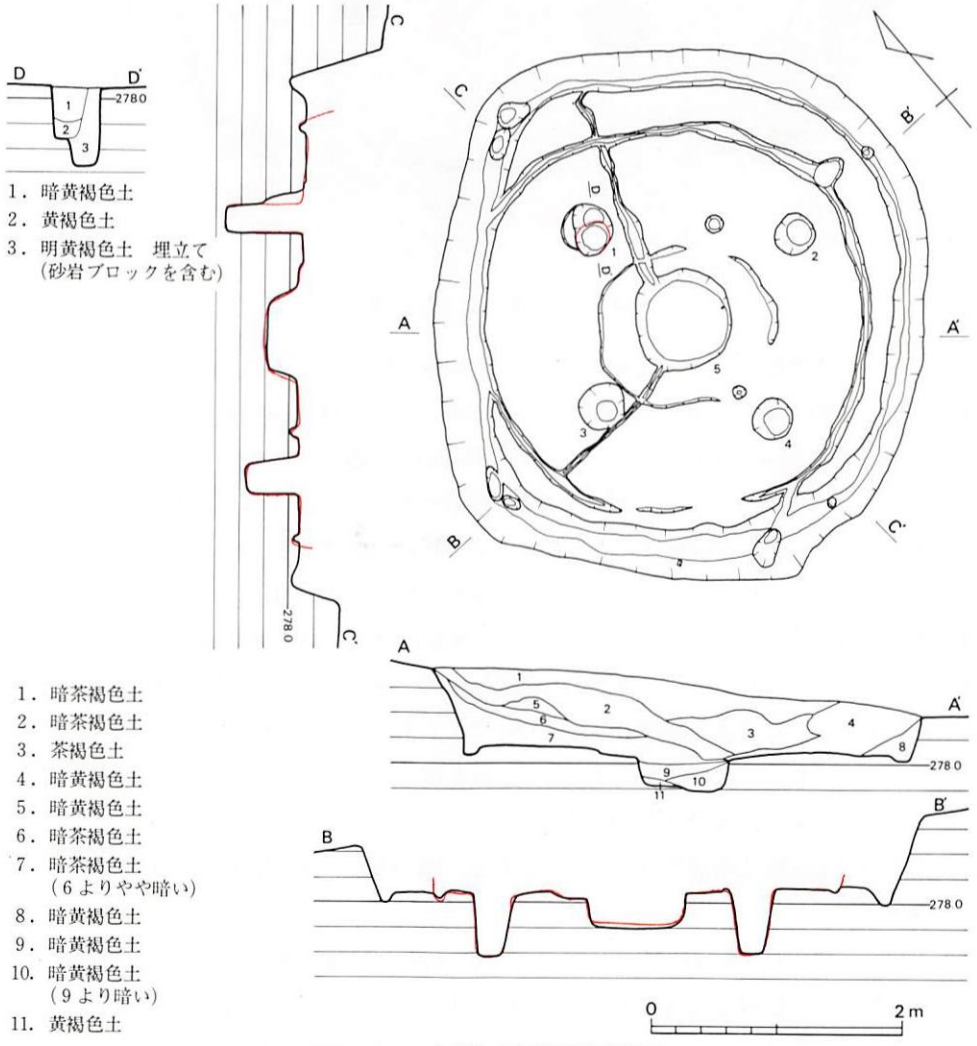


Fig. 9　西山第２号住居跡実測図

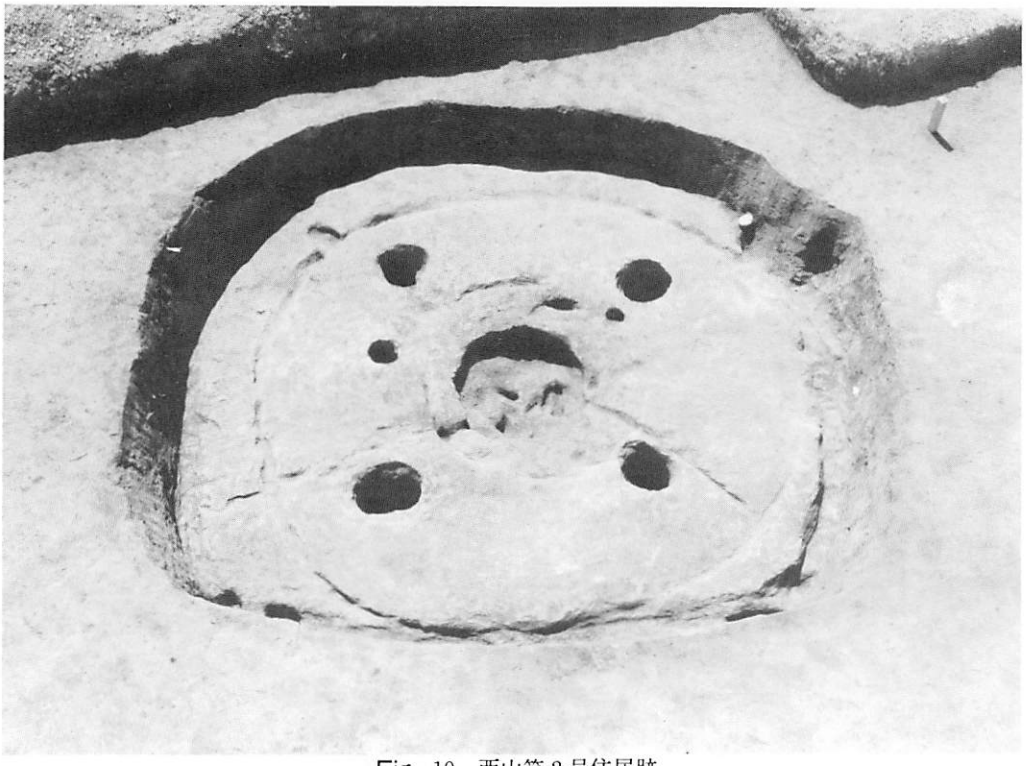


Fig. 10　西山第２号住居跡

全周しており，その各コーナー部分には深さ５～10cmの小ピットがあるが，性格は不明である。主柱穴は１～４の４本で，１：径30～40cm・深さ62cm，２：径33cm・深さ50cm，３：径35cm・深さ52cm，４：径32cm・深さ42cmを測る。柱穴中心間の距離は１～２：165 cm，２～４：150 cm，３～４：135 cm，３～１：145 cmである。中央のピット５は径80cm，深さ24cmを測る。ピット周辺及び内部に焼けた痕跡は認められないが、炉穴と思われる。ピット５の周辺約30cmの床は２～６cmの段差を持ち低くなっている。ピット５からは北・西各コーナーへ深さ３cm前後の浅い溝が走る。床面積は11.5㎡である。また、床面には径 300～330 cmの円形を呈する溝がほぼ全周している。深さは２～５cmで北西辺では壁溝と接している。本住居は使用中に拡張が行なわれたもので，この溝は拡張前の壁溝のなごりであろうと思われる。拡張は北東・南東・南西方向へ行なわれ，それに伴ないピット１のみ北側へ若干移動させ，他の３本はそのまま使用されている。拡張前の床面積は８㎡である。

床面直上の出土遺物は南壁際の敲石のみである。覆土中からは弥生土器片が出土している。

出土遺物

弥生土器　甕(1～3･5･6)は胴部が張り「く」字状に折れて口縁部となる。口縁部は断面Ｔ字状に上下に肥厚する。口縁部は内傾するものと直立するものとがあり，共に３～４本の凹線をもつ。頸部にヘラ状工具による列点文をめぐらすものもある。2・5は頸部までヘラ削りである。

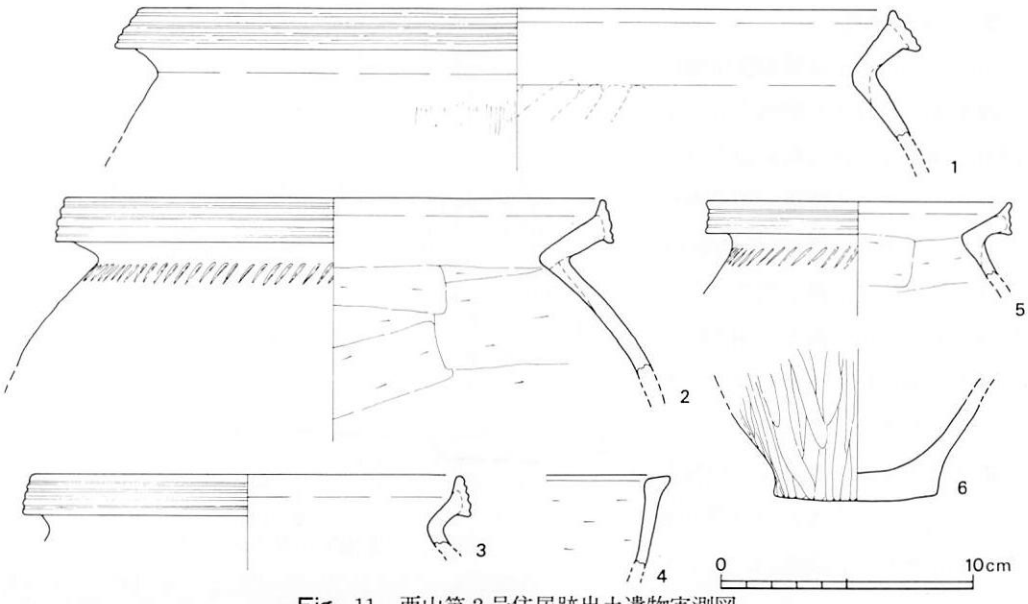


Fig. 11　西山第２号住居跡出土遺物実測図

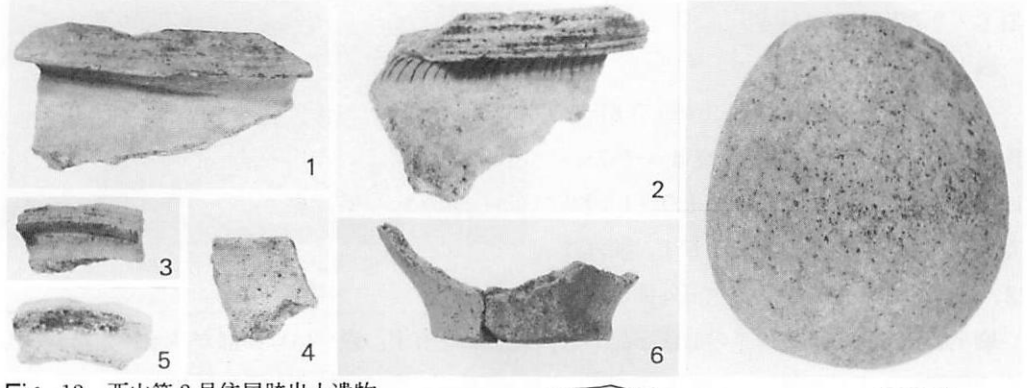


Fig. 12　西山第２号住居跡出土遺物

6は底部で平底を呈し，内外面ともヘラナデである。4は坏，又は小形の鉢と考えられる。口縁端部で肥厚し，内面ヘラ削りである。これらはともに胎土・焼成ともに堅緻であり，淡褐色～黄褐色を呈する。

敲石　流紋岩系あるいは凝灰岩系の敲石で，上下両端に敲打痕を残す。

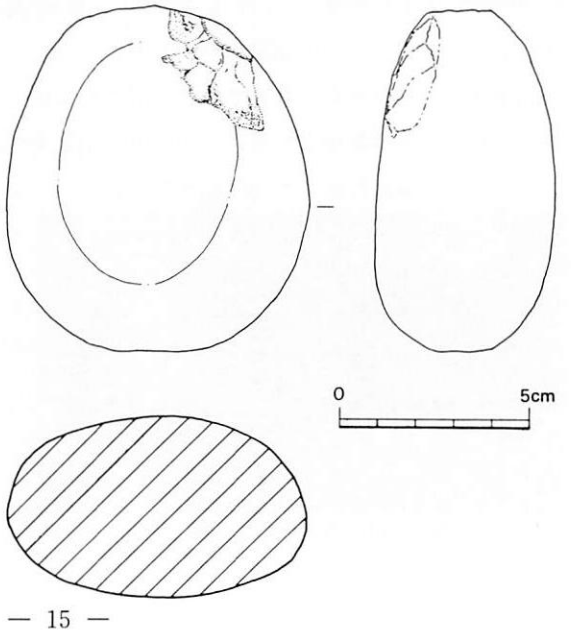


Fig. 13　西山第２号住居跡出土石器実測図 ▶

第１・２号土坑

第１・２号土坑は発掘区南端に位置する。これより南西２ｍで平野部へ向かって急な傾斜面となっている。このため遺構上部はかなり流失しており，遺存状態は悪い。

第１号土坑は，最も残りのよい北側で深さ５㎝を測る。南西隅には深さ５㎝のピットを有する。土器４・７が出土している。

第２号土坑は，深さ10㎝で第１号土坑同様，やや歪んだ方形を呈すると思われる。土坑内のピットは樹根による攪乱と思われる。土器１・２が出土している。

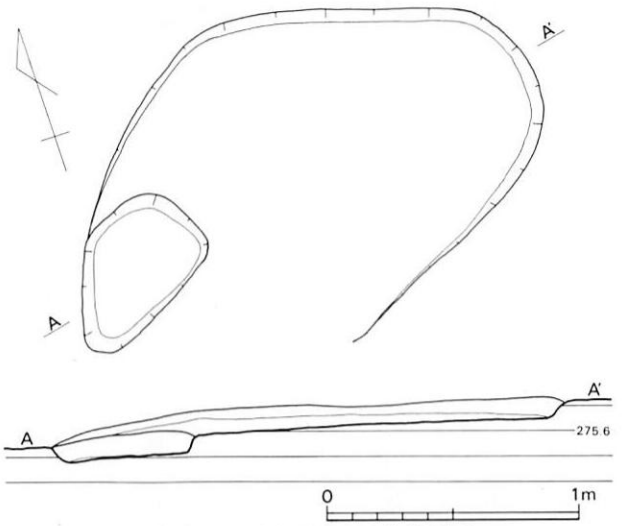


Fig. 14　西山第１号土坑実測図

Fig. 15　西山第１号土坑

出土遺物

弥生土器　前期のもの(1･2･4･5･7･8) と後期のもの(3･6)とがある。甕(1･4･5･7･8)は胴部の張りは少なく長胴であり，口縁部が外反し端部に刻み目をめぐらす。頸部に２～６条の沈線を有する。胴部外面は細かい刷毛調整である。２は１の底部と思われ，籾圧痕を有する。壺(３)は頸部がゆるやかに外反し，やや内傾し上下に肥厚した口縁を有する。口縁外面に２本の凹線をもち，頸部にヘラによるノ字状文をめぐらす。６は高坏の脚部と考えられ，端部が立ち上がりをもつものである。裾外面にはタテ方向に４本の条線をもち，その両側に小孔を穿っている。端部外面に退化凹線がみられる。

Fig. 16　西山第２号土坑

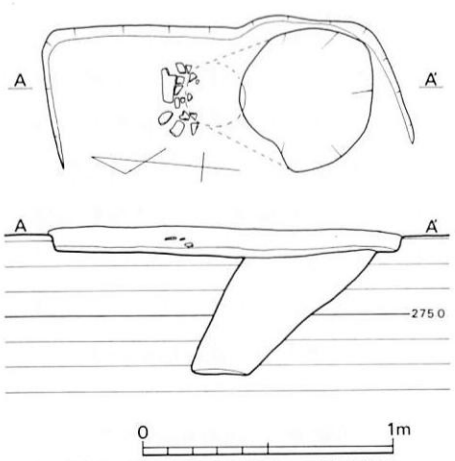


Fig. 17　西山第２号土坑実測図

第１号土坑の北側約８ｍで５本のピットが一直線に並ぶピット列が検出された（Fig. 8）。いずれも径30cm前後，深さは15～40cmである。ピット列方向はN62°Wをとる。西から２番目のピットを除けば柱穴中心間の距離はいずれも 220 cmである。また，本ピット列からさらに北４ｍには径20cm，深さ30cmのピットが単独で検出され，土器３が出土した。

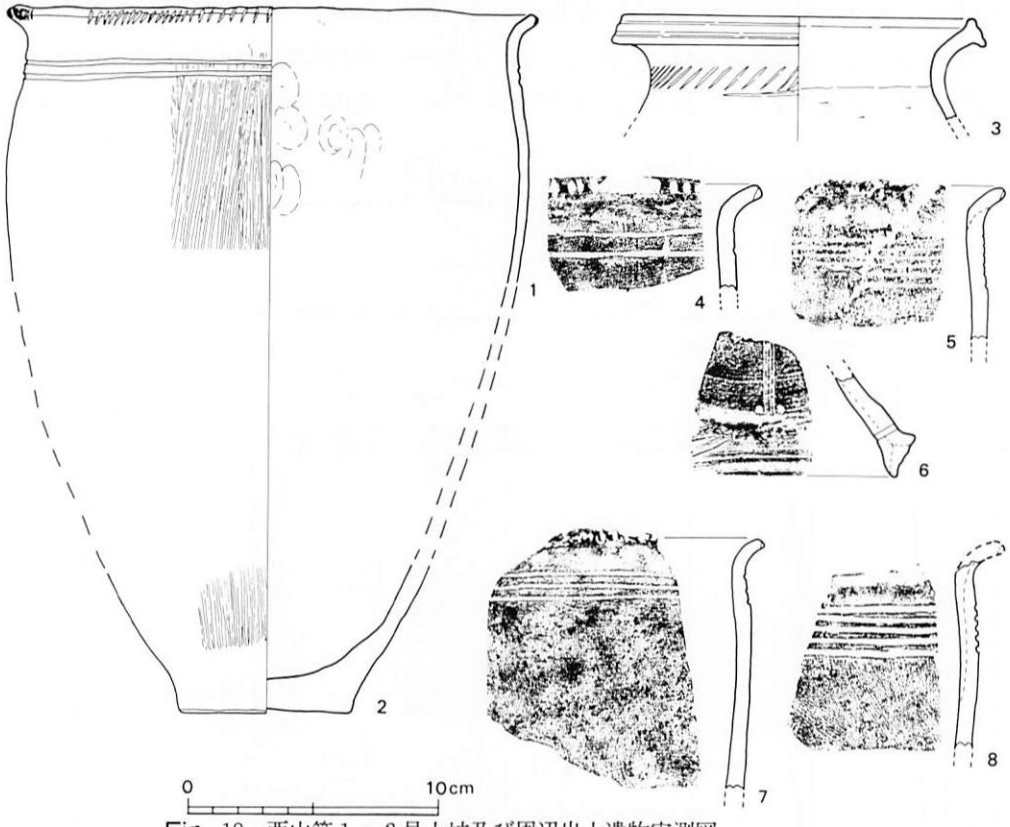


Fig. 18　西山第１・２号土坑及び周辺出土遺物実測図

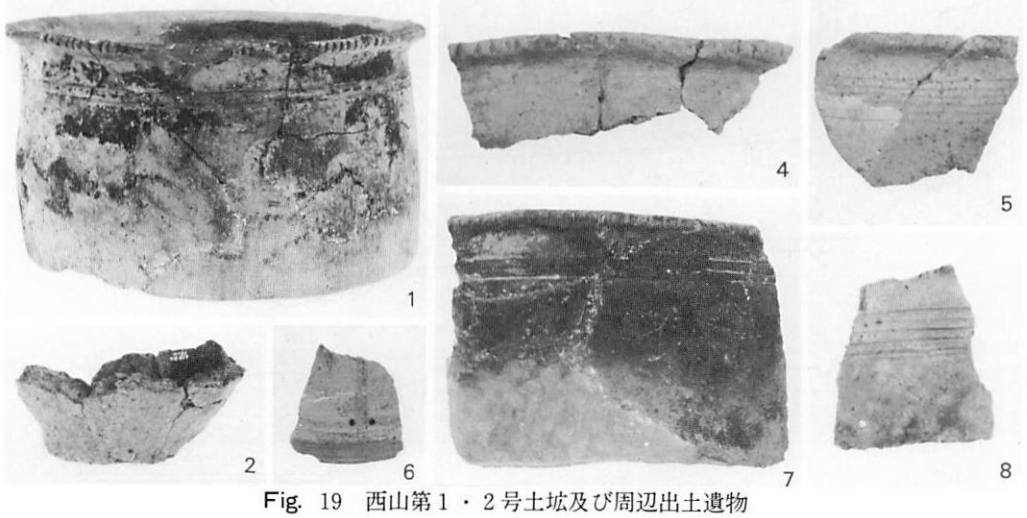


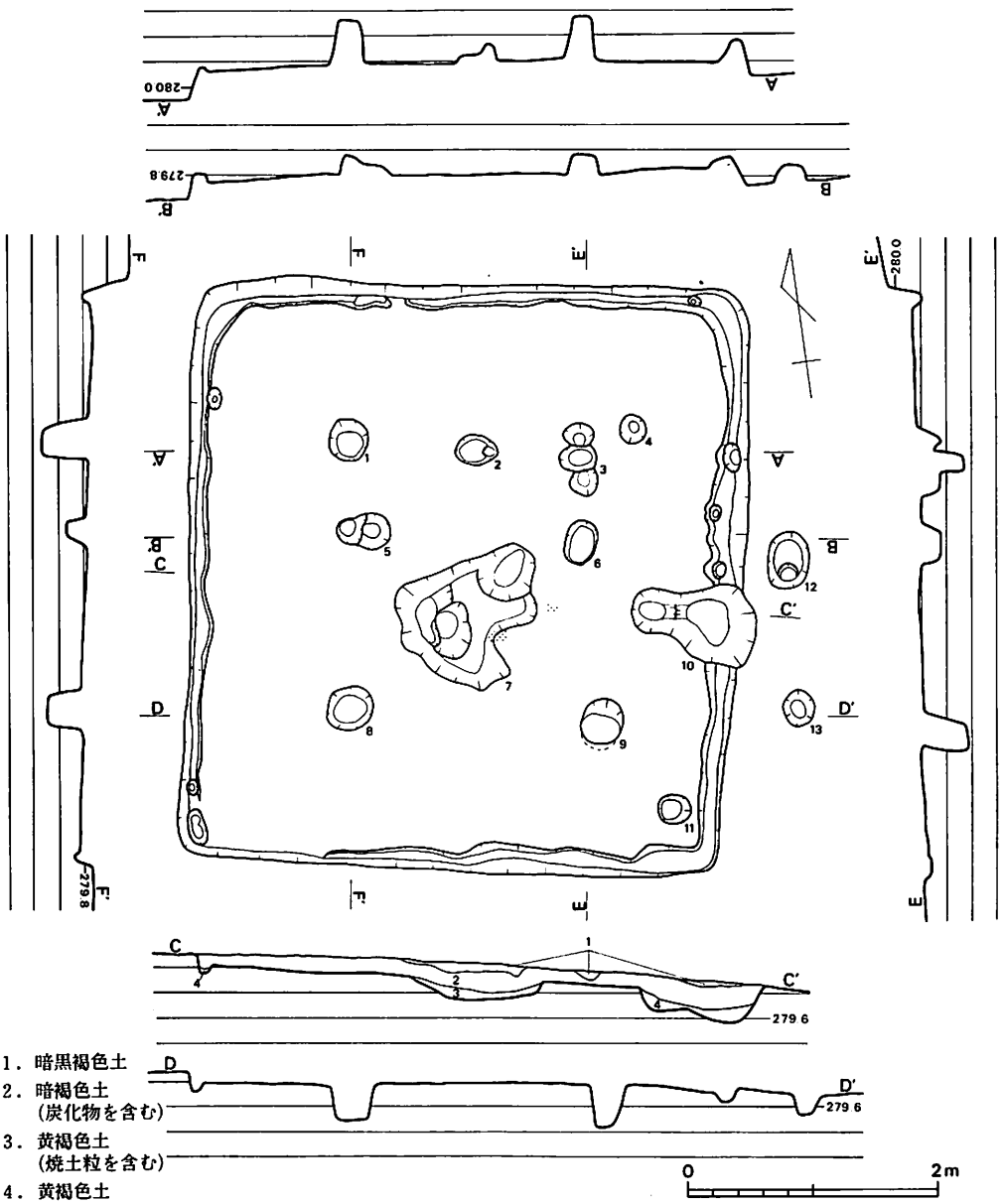
Fig. 19　西山第１・２号土坑及び周辺出土遺物

3．古墳時代の遺構と遺物

第1号住居跡

発掘区中央部北寄りに位置し，尾根頂部の平坦面に構築されている。

各辺長は北壁 425 cm，東壁 450 cm，南壁 423 cm，西壁 445 cmを測り，平面形は南北にやや長い方形を呈する。現壁高は北壁20～35cm，南壁1～10cmで遺構上部はかなり流失しているものと思われる。壁溝は深さ3～10cmで，ほぼ全周している。主柱穴は1，3，8，9の4本と思



1．暗黒褐色土
2．暗褐色土
(炭化物を含む)
3．黄褐色土
(焼土粒を含む)
4．黄褐色土

Fig. 20　西山第1号住居跡実測図

われる。1：径32cm・深さ37cm，3：径25～30cm・深さ38cm，8：径35cm・深さ27cm，9：径33～37cm・深さ36cm。柱穴中心間距離は1～3：185cm，3～9：210cm，9～8：200cm，8～1：212cmである。東壁中央には深さ20cm前後のピット10があり，外側には12，13がある。これらのピットはその位置からみて，おそらく出入口に関連する施設痕であろうと思われる。中央の不整形なピット7は深さ20cmを測る。一部熱による赤変がみられ，また埋土中に焼土粒，炭化物が含まれることから炉穴であろう。ピット7，10を結ぶ線に中軸をとるならば，主軸方位はN81°Wである。床面積は17.8㎡を有する。床面は北半部で地山岩盤に達しており，概ね堅緻であった。特に4主柱穴の内側は強固に踏みしめられており，炉周辺では一部に貼り床がみられた。

遺物の遺存状態は良好で，出土量も豊富であった。遺物の分布状況は西壁・東壁沿いが特に濃密で，床面から数cm浮いたものが多かった。3の甑はピット1の底面にほぼ正立して出土した。完形で，しかも底に正立している状況からみて，住居廃絶に伴なう柱材抜き取りの後に置かれたものと推測される。須恵器は4・5と試掘時に出土した坏蓋6のみである。他にスラグが数点出土している。

出土遺物

土師器　甕は壺状の形態をなすものと甕とに大別することができる。以下頸部・口縁部を中

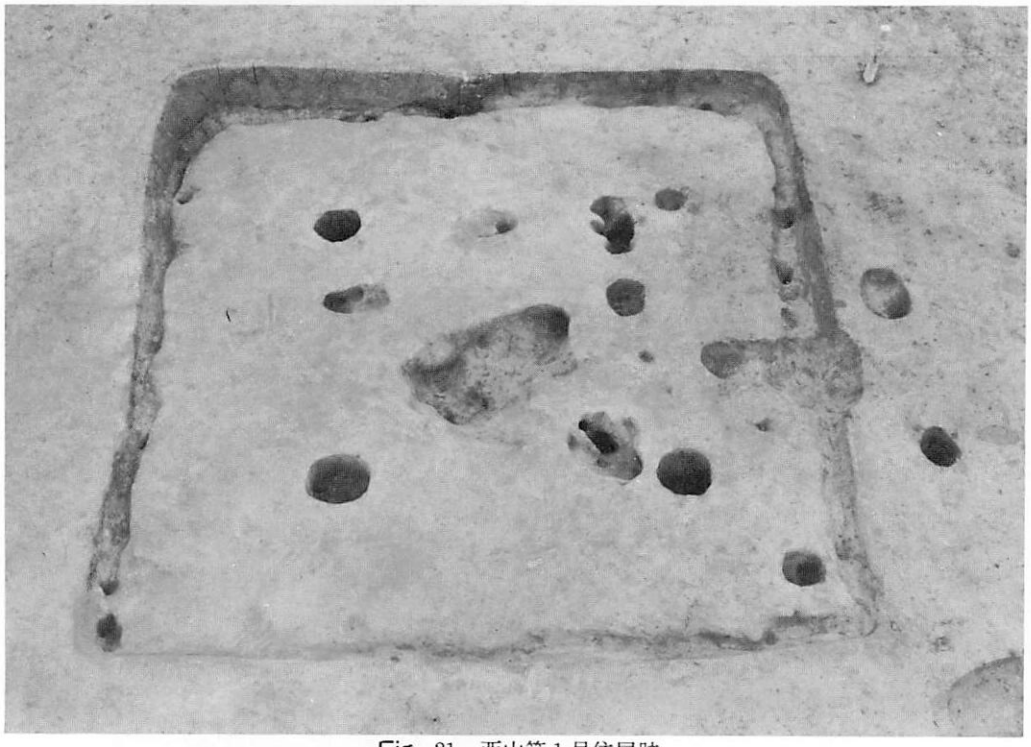


Fig. 21　西山第1号住居跡

心に分類する。7·8·9·14·15·16·17·20·23·24は頸部が長く壺状を呈するが，頸部が直線状に立つものとカーブをなして長くなるものとがある。また口縁部を折り曲げて外反させるものと外彎するものとがある。胴部は張らずに長胴のもの(7·14)と肩が張り球状を呈するもの(8·9·22·24)とがあるが，前者は頸部が直線状のもので後者は頸部がカーブするものである。12・13は球形の胴部にわずかに外反する口縁部がつくものである。これらは内面ヘラ削り又は指頭による整形であり，粗いつくりである。甑(1～3)は胴部がやや外傾し直線的にのび，1・2にはやや外開きでL字状の把手が一対つく。3は把手のついていない小形品である。

埦はわずかに平底状を呈し，胴部へ折れ曲り上方にのびるもの(10)と丸底をなし胴部へ内彎するもの(11)とがある。前者は内面ヘラ削り，後者は指頭による整形である。

須恵器　坏蓋(6)は天井部がやや平坦面を呈するが全体に丸みをもち稜線も不明瞭であり，短く折れ曲り口縁部となる。端部は丸みをもつ。坏身(5)は受部が外方にのびるが小さく，立ち上がりも内傾し短い。端部は丸くおわる。埦(4)と考えられ，胴部はほぼ上方にのび端部は丸くおわる。

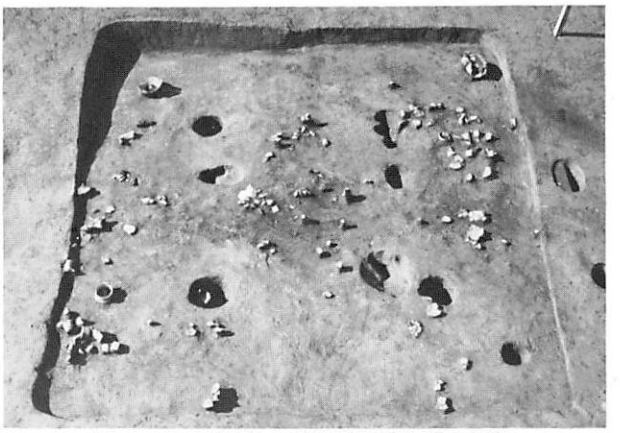


Fig. 22　西山第1号住居跡遺物出土状態

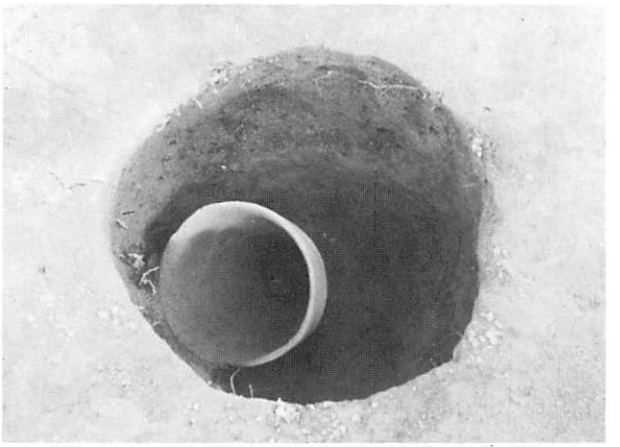


Fig. 23　西山第1号住居跡柱穴内遺物出土状態

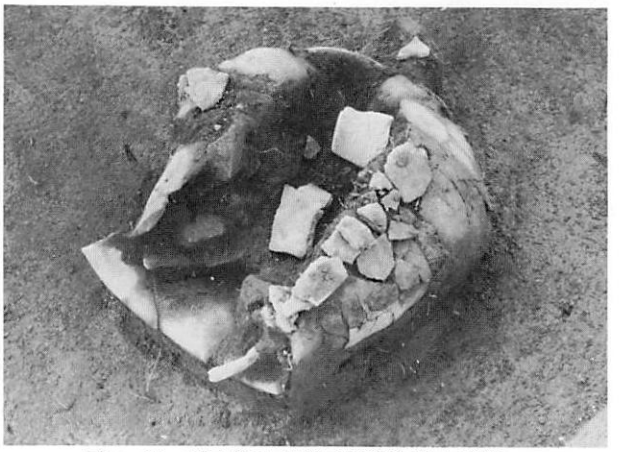


Fig. 24　西山第1号住居跡遺物出土状態

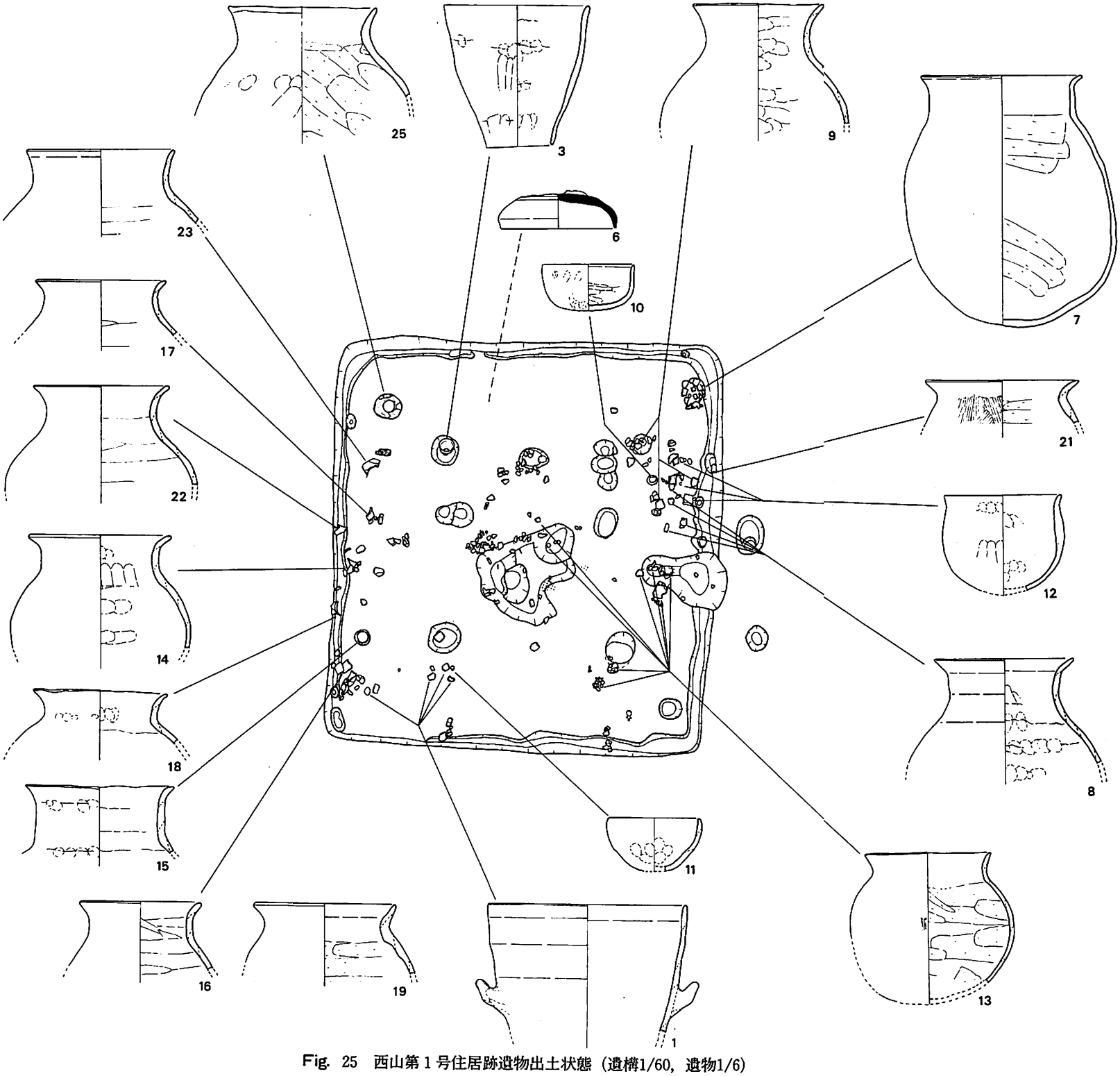


Fig. 25　西山第1号住居跡遺物出土状態（遺構1/60，遺物1/6）

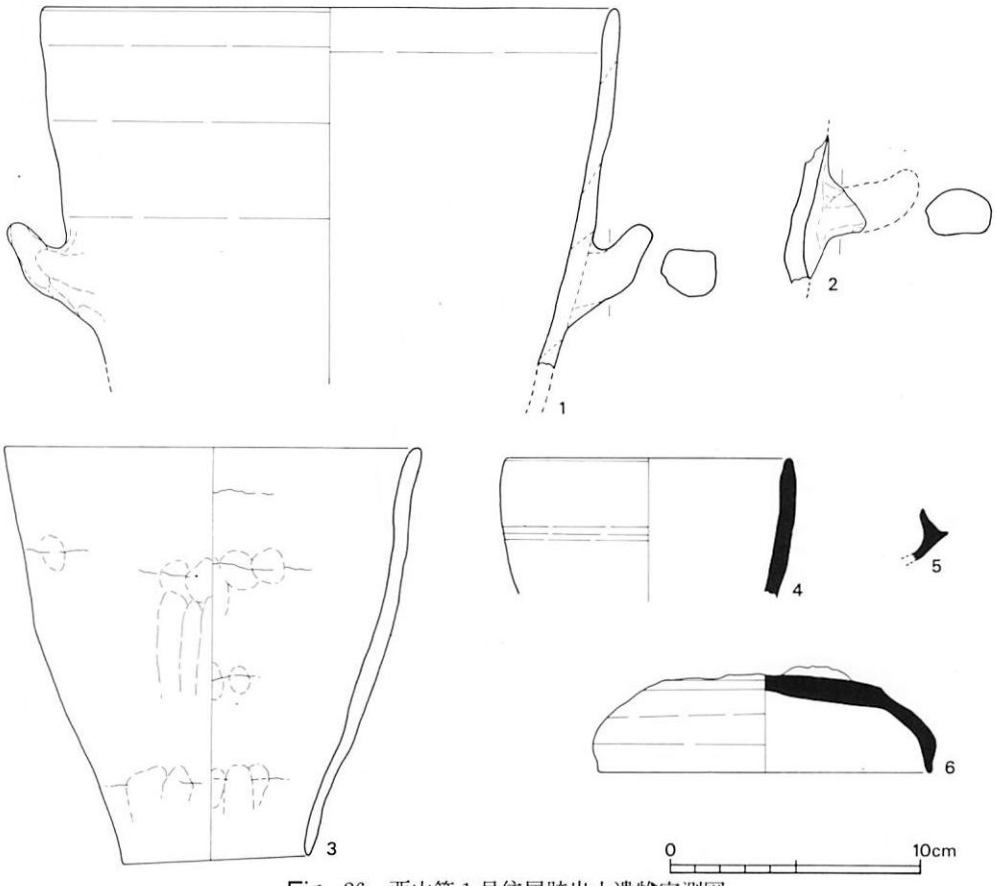


Fig. 26　西山第1号住居跡出土遺物実測図

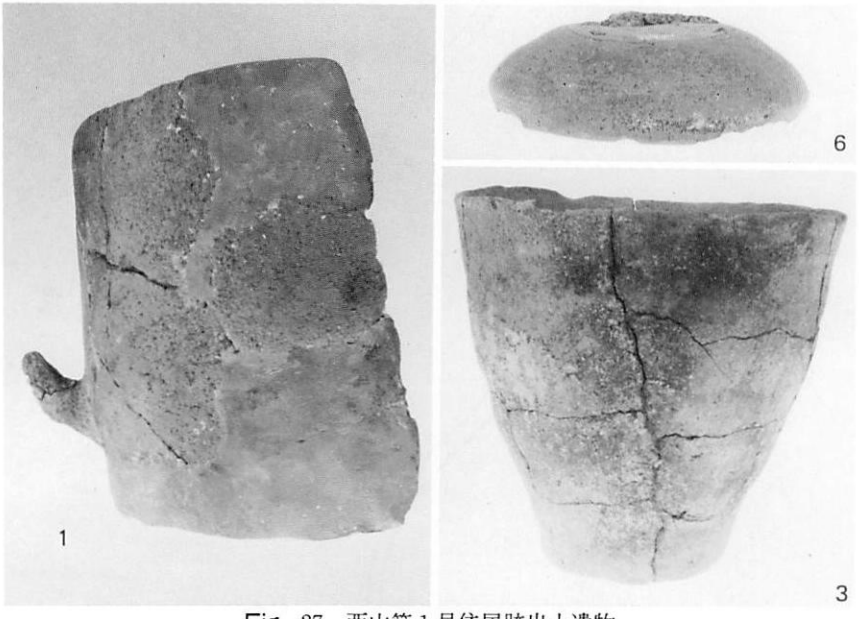


Fig. 27　西山第1号住居跡出土遺物

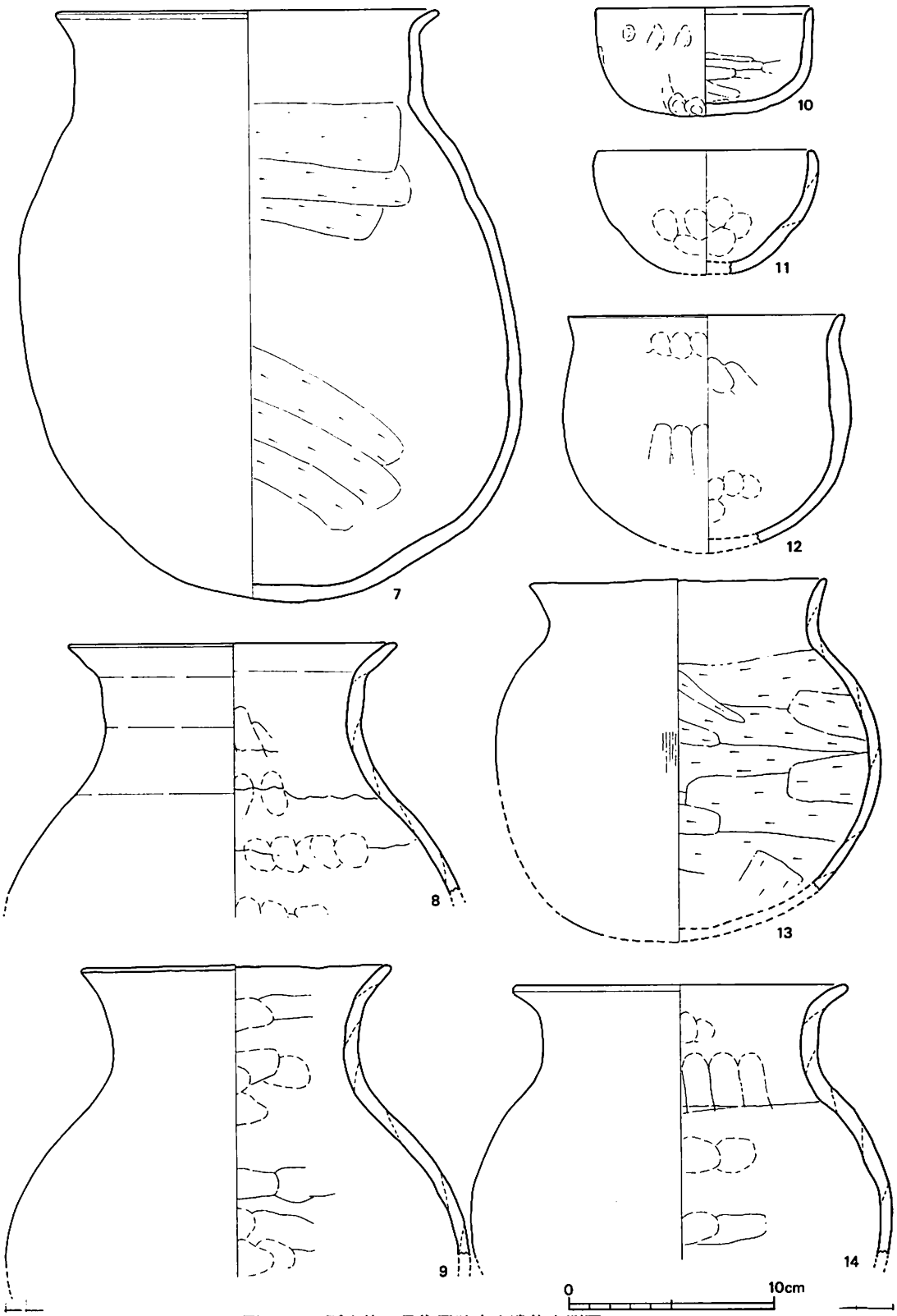


Fig. 28　西山第1号住居跡出土遺物実測図

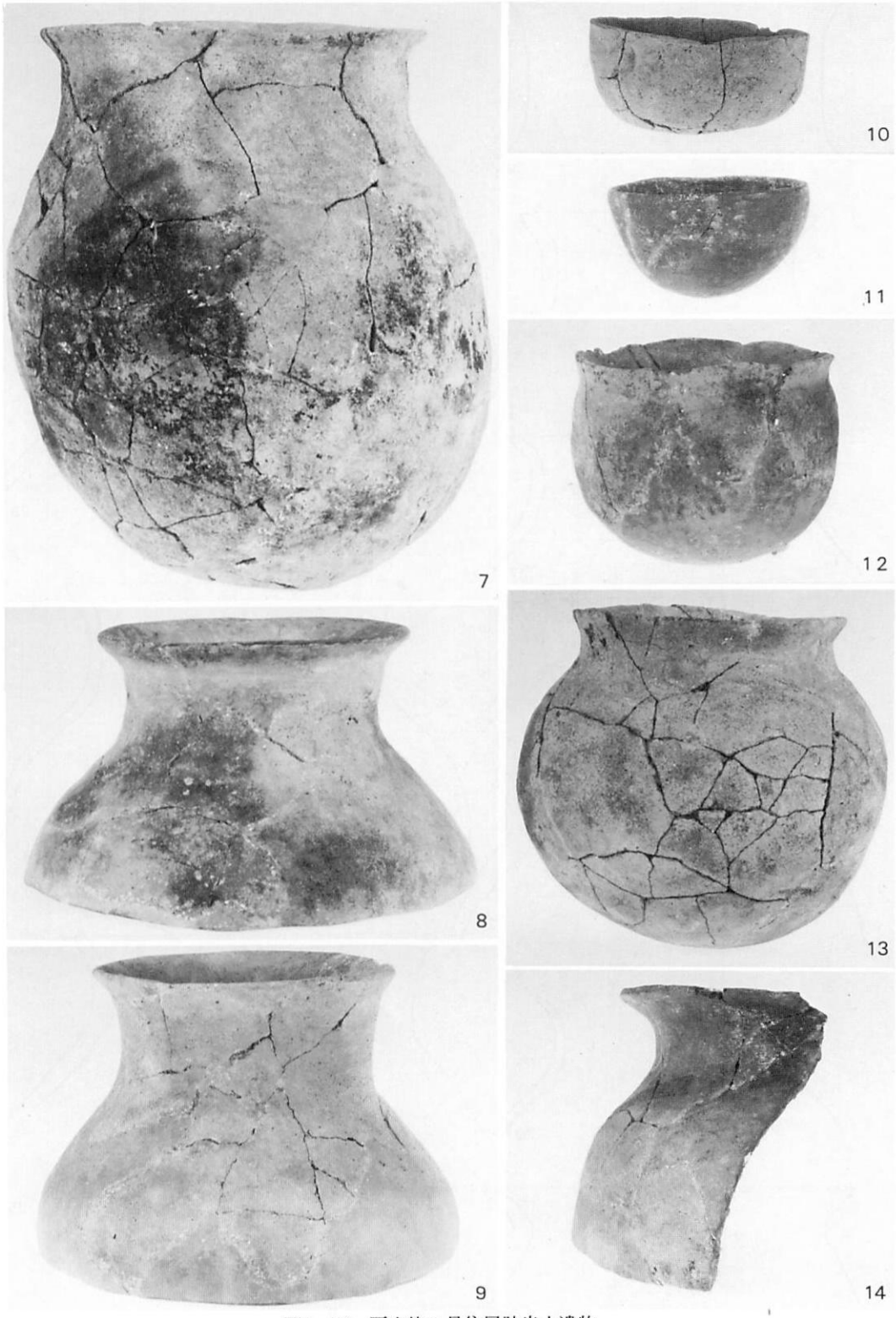


Fig. 29　西山第1号住居跡出土遺物

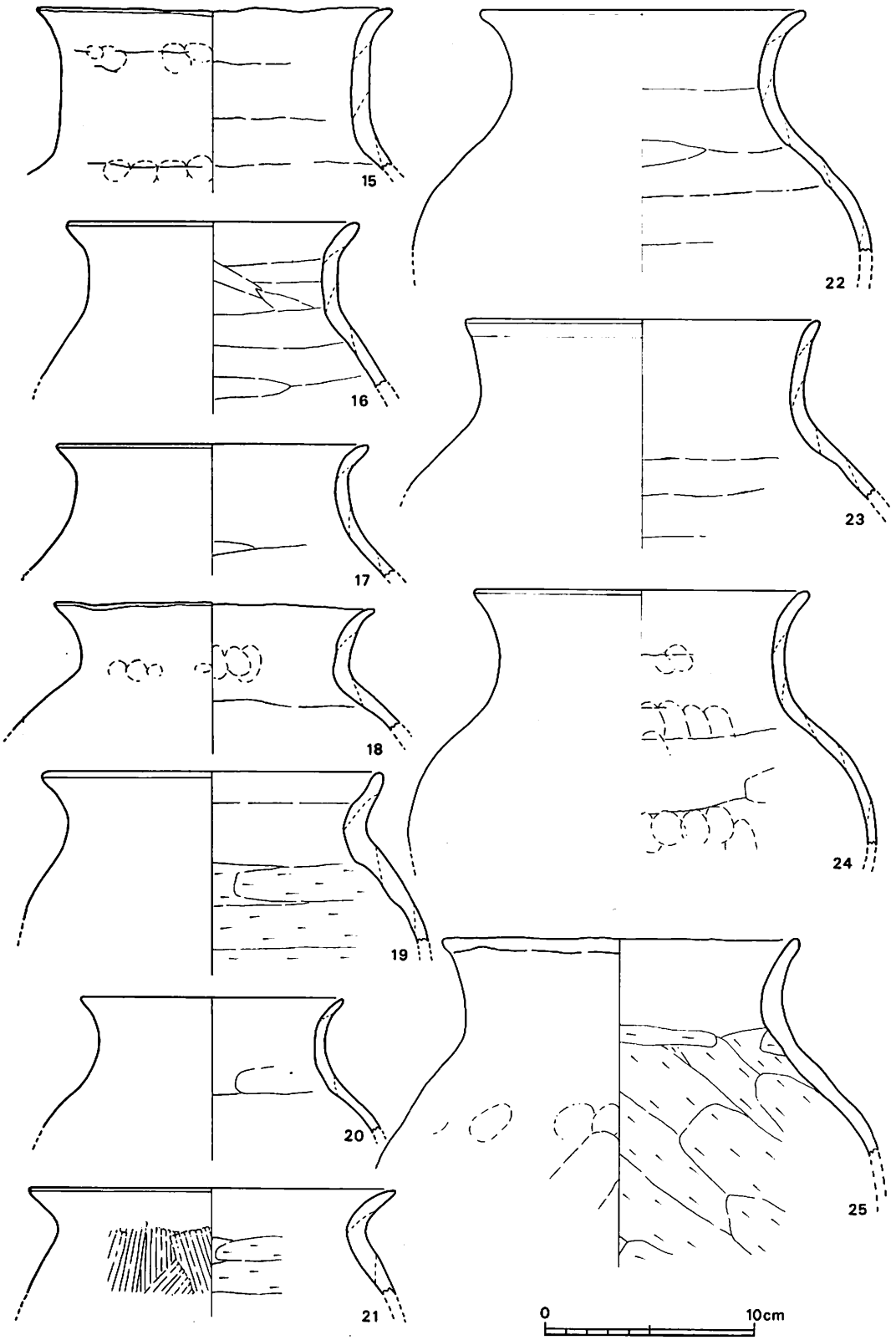


Fig. 30　西山第1号住居跡出土遺物実測図

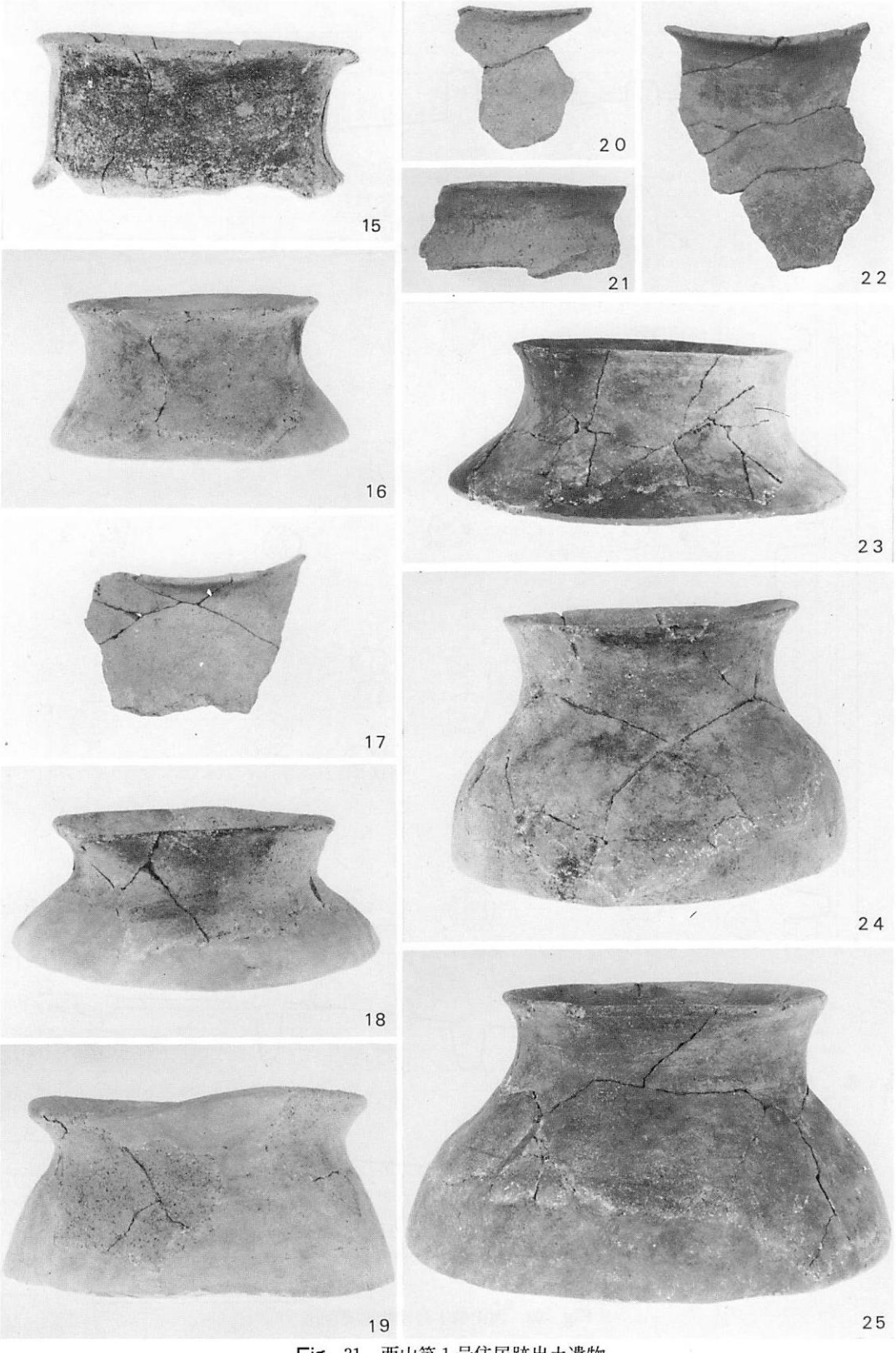


Fig. 31　西山第1号住居跡出土遺物

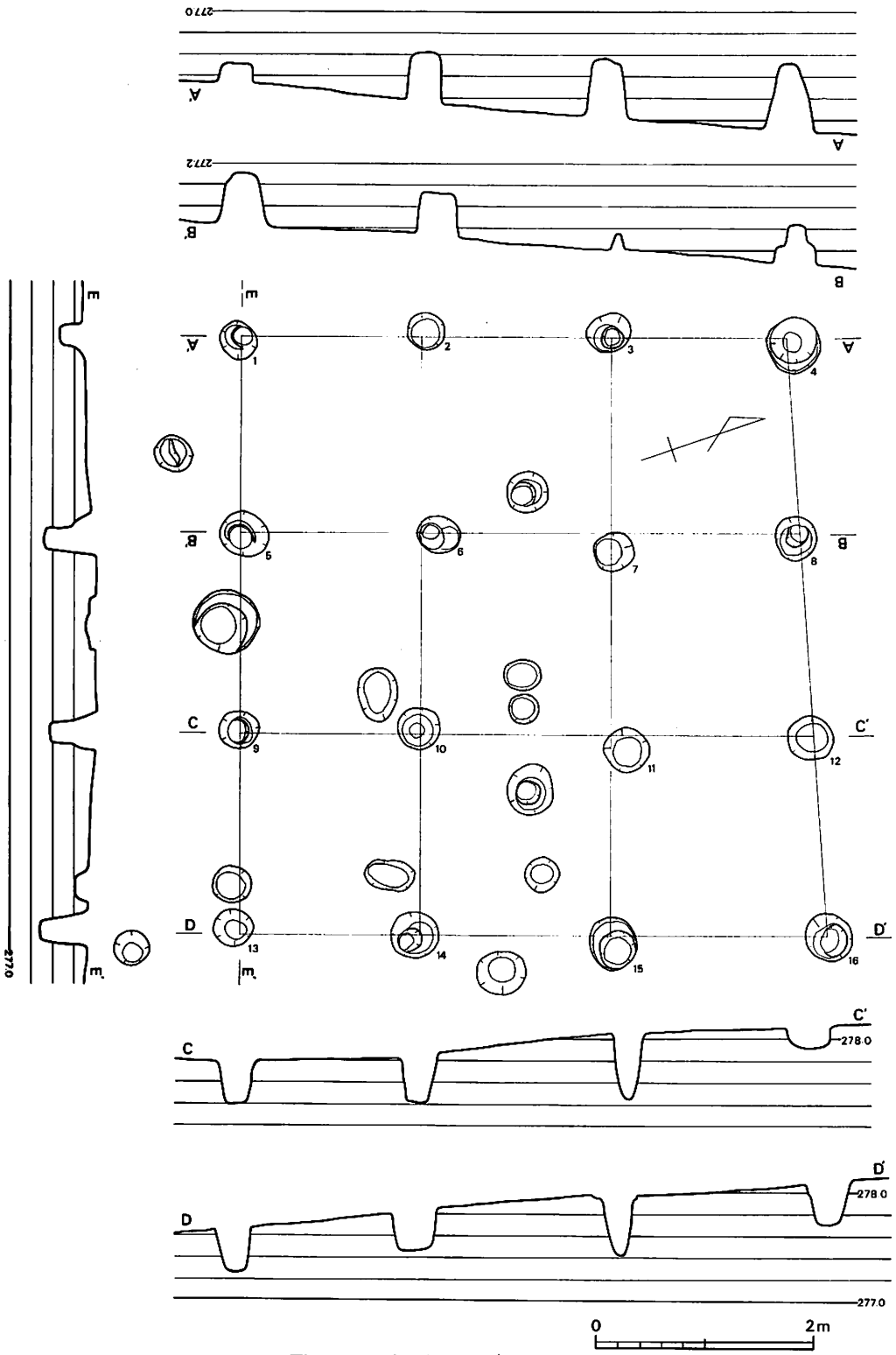


Fig. 32　西山第1号建物跡実測図

第1号建物跡

第2号住居跡の南西に位置する。北側には第3･4号土坑がある。3間×3間の総柱建物跡である。南北辺と東西辺を比べると，わずかに東西辺が長く，これを桁行とする。桁行方向の柱穴中心間距離の平均は185cm，梁行方向のそれは175cmである。桁方方向はN72°Wをとる。床面積は30㎡である。遺物は14で土師器片が出土したのみである。掘方は円形を呈し，径34～50cmで平均39cm，深さは（確認面下）14～65cm，平均48cmである。掘方埋土は茶褐色・黄褐色土が主で，柱痕は暗褐色土として認められた。

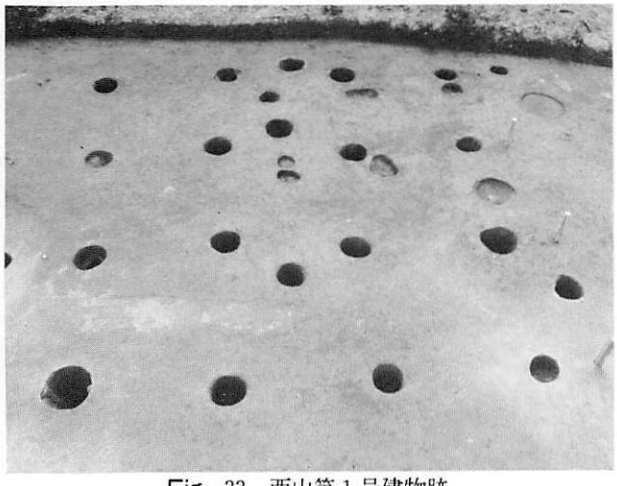


Fig. 33　西山第1号建物跡

第3・4号土坑

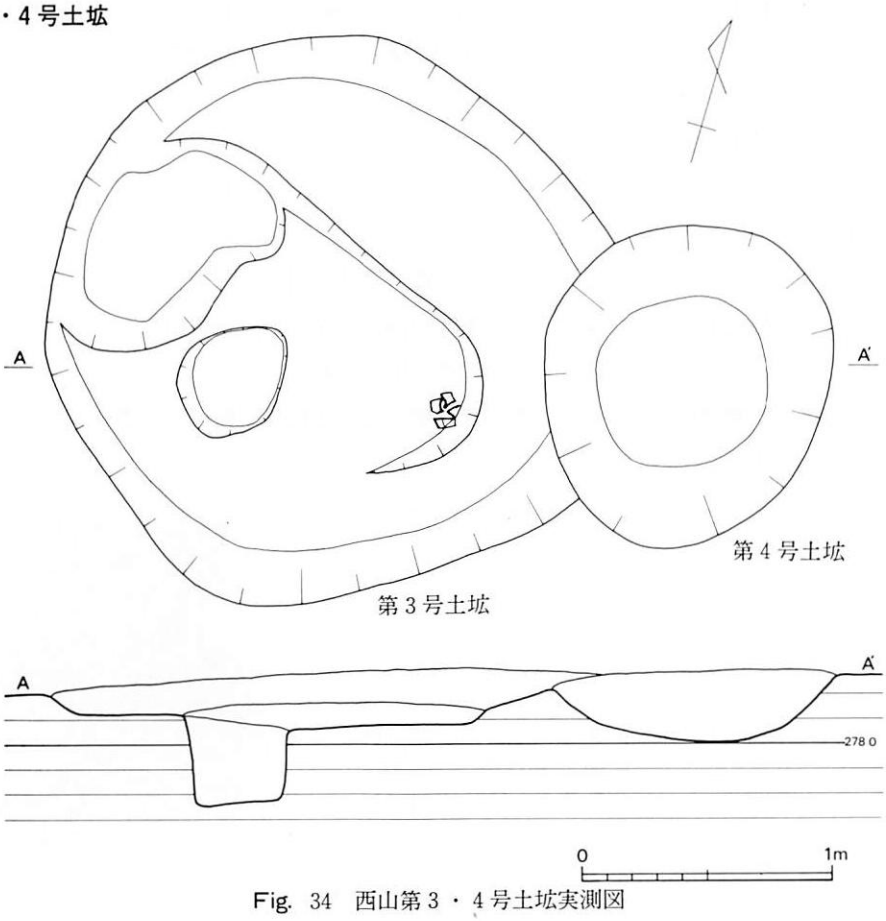


Fig. 34　西山第3・4号土坑実測図

第1号建物跡の北側に隣接する。

第3号土坑は径230cmの不整円形を呈し，深さは10cm前後で，土坑内には径40～50cm，深さ36cmのピットを有する。遺物は壺(1)のほか，土師器片数点が出土した。

第4号土坑は径115～127cmの円形で，中央部で深さ30cmを測り，断面形は皿状を呈す。埋土下層は焼土粒，炭火物を多く含み，床面は熱による赤変が認められる。遺物は(2･3)のほか，土師器片数点が出土した。第4号土坑が第3号土坑を切っている。

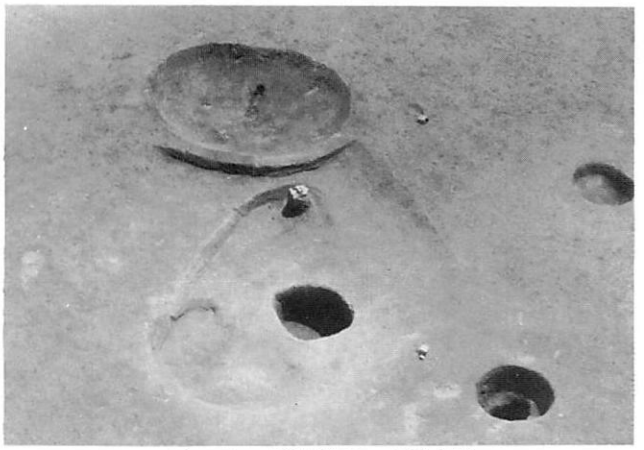


Fig. 35　西山第3・4号土坑

出土遺物

土師器　壺(1)は胴部がやや扁球形を呈し，ラッパ状に外反する口縁をもち，端部は面をなす。口径が胴部最大径より小さい。小型丸底壺(2)は胴部最大径に比して口径が大きいもので外上方に口縁がのびる。頸部のくびれは不明瞭である。3は甕の口縁部であろうか，く字状に外反し端部は丸くおわる。

第5・6・7号土坑 (Fig.8)

第5号土坑は第1号住居跡の北側に位置する。長軸94cm，短軸73cmの楕円形を呈し，深さは15cmを測る。

第6号土坑は径140cm，深さ35cmの円形で断面は皿状を呈す。埋土には多くの炭化物を含む。

第7号土坑は発掘区北端に位置する。長軸130cm，短軸100cmの楕円形を呈し，深さは35cmを測る。各土坑とも遺物は全く出土せず，性格は不明である。

第1号住居跡の南側約4mには，尾根筋と直交する深さ10cm前後の浅い溝がある。遺物は出土せず，時期・性格は不明である。

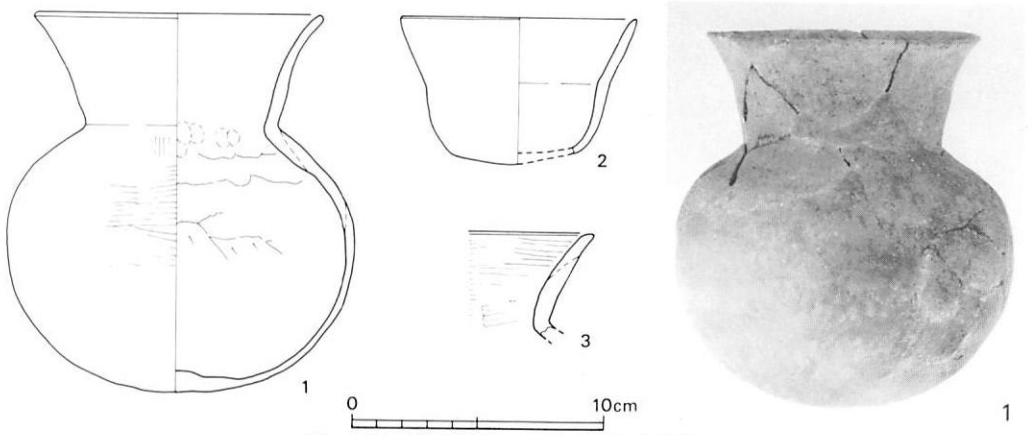


Fig. 36　西山第3・4号土坑出土遺物

4．おわりに

本遺跡は南面するなだらかな丘陵の先端に立地する。発掘区域での尾根幅は狭く，遺跡はこの丘陵基部へ広がりをみせると思われる。検出した遺構は，弥生時代の住居跡１軒，土坑２基，古墳時代の住居跡，掘立柱建物跡各１軒，土坑５基である。

このうち最も古いものは第1･2号土坑で，弥生時代前期の土器を出土した。甕(１)は胴の張りが小さく，頸部に２条の沈線をもつ。前期でもやや古そうな様相を示すものであるが，他の器種が伴出しておらず，これだけで時期決定をするのは困難である。むしろ3～6条の沈線をもつより新相の甕を伴なっていることや山間部という条件を考慮して，弥生時代前期後葉に比定されるべきであろう。県北東部での弥生前期の土器出土地としては，三次市，双三郡，比婆郡で数例が知られているが，庄原市域での出土は初めてであり注目される。第1･2号土坑は丘陵の最先端にあり，そのほとんどが流失していて旧状を知り得ないが，性格としては墓が考えられる。本土坑の南東調査区外には狭小な平坦部があり，またこれを区画するようにピット列が検出されており，同期の遺構の存在が想定される。

第２号住居跡は今回の調査で唯一の弥生時代住居跡である。壁高は30～60cmと遺存状態が極めて良好であった。反面，出土遺物は非常に少なかったが，甕口縁部が中心で時期を決定し得るものであった。口縁部は内傾するものと直立するものの差がみられるが，基本的には胴上半部が張り，頸部はく字状に短く屈曲し，口縁部が上下に肥厚し，３～４本の凹線をもつ。また，内面は頸部直下までヘラ削りのものもある。このような特徴を示す土器は，庄原市山内町田尻山第１号方形墓出土土器[(1)]に類例が求められ，これと同時期かあるいは凹線の手法からやや先行するものと思われ，後期初頭に比定される。本遺構は径約３ｍの円形から後に一辺４ｍ前後の隅丸方形に拡張されており，柱は４本のうち３本までをそのまま使用している。炉穴から放射状に延びる溝は排水溝と考えられ，拡張前・拡張後それぞれに設けている。大阪府東奈良遺跡，[(2)]兵庫県会下山遺跡[(3)]等の場合，炉穴からの排水溝の背後に出入口が設けられており，本遺構は南コーナーが斜面谷側になることを加味して，この付近に出入口が設けられていたと思われる。

第３号土坑出土の壺はラッパ状の口縁と球形の胴部をもち，胎土・焼成ともに良好である。古墳時代前期のもので，青木Ⅴ・Ⅵ期からⅦ期[(4)]にかけての所産である。本土坑，第４～７号土坑いずれも性格は不明である。

第１号住居跡は遺物の出土量が豊富であったが，土師器甕がその大半を占め，須恵器は３点のみであった。中でも甕は頸部が長く壺状を呈するものが多い。古墳時代後期の土器を出土した集落遺跡としては庄原市本村町牛乗遺跡[(5)]，三次市松ケ迫遺跡群[(6)]があるが，牛乗第７号住居跡出土の土師器にもこのような特徴がみられ，この地域特有のものと思われる。全体的には松ケ迫Ａ地点遺跡ＳＢ4･6･7･9･11出土土器と類似点が多く，またシャープさがなく丸味をもつ須恵器坏蓋(６)等から，６世紀中葉に比定される。東壁中央のピット10・12・13を出入口施設に関

するものとすると尾根筋と直交する東向きに開口することになる。主柱穴1の甑形土器出土状況からは，住居廃棄に伴なう何らかの祭祀的行為が想定され，興味深い。

第1号建物跡は3間×3間の総柱造りで束柱を伴なっている。わずかながら土師器片が出土しており，6世紀代の倉庫と思われる。

以上，本遺跡では弥生時代前期から古墳時代後期に至る遺構・遺物を検出したが，その分布状況は非常に疎であり，集落の南のはずれと思われる。生活基盤としては前面に平がる平野部での稲作が主たるものであったろう。

(註)

(1) 広島県教育委員会「田尻山古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（1） 1978

(2) 大阪府教育委員会『東山遺跡』 1979

(3) 村川行弘・石野博信『会下山』 1959

(4) 青木遺跡発掘調査団『青木遺跡発掘調査報告書』Ⅰ・Ⅲ 1976，1977

(5) 広島県教育委員会「牛乗遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（1） 1978

(6) 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター『松ケ迫遺跡群発掘調査報告』1981

Ⅳ．小和田遺跡

Fig. 37　小和田遺跡遠景（南西から）

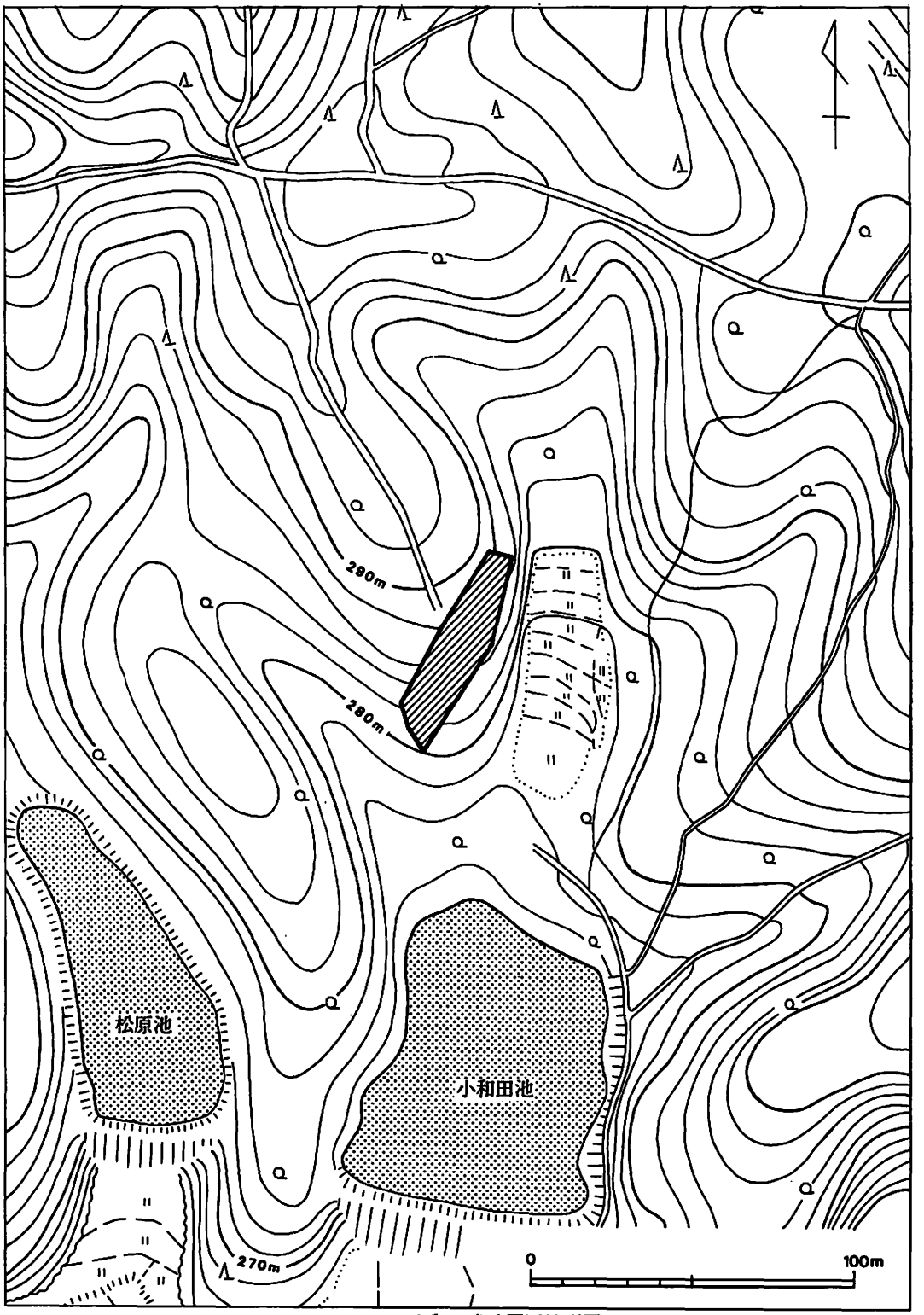


Fig. 38 小和田遺跡周辺地形図

1．はじめに

小和田遺跡は新庄町字小和田に所在する。南南東に延びる尾根先端部の南向き斜面に立地する。西山遺跡は南南西約50mにあり，谷をはさんでこれと対峙する。調査は7月20日から8月28日まで行なった。発掘面積は約1000㎡である。

遺構確認面は比較的浅く，特に発掘区北側の尾根頂部では現地表下約10cmである。斜面中位以下では黒ボクが20～30cm堆積している。遺構確認面は吉備土であるが，一部岩盤が露出している。標高は北側最高部289.5m，南側最底部で280.0mである。斜面は西山遺跡に比べ傾斜がきつく（約12°），遺構の遺存状態は良好とはいえない。小和田池東岸の谷部には湧水点があり，水利条件は良好と思われる。検出された遺構は住居跡7軒，土坑2基である。

Fig. 39　調査風景

Fig. 40　小和田遺跡完掘後（南西から）

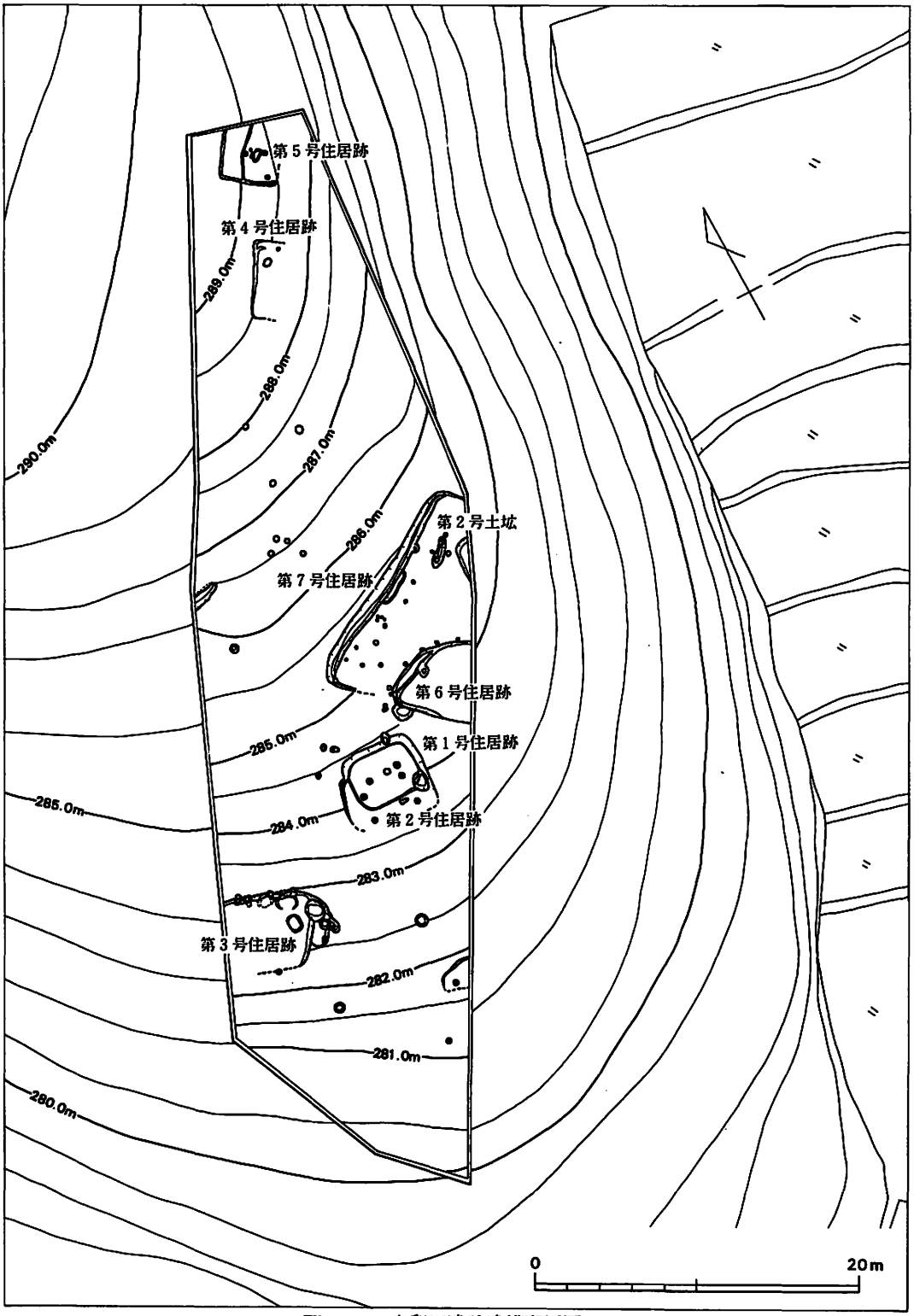


Fig. 41 小和田遺跡遺構配置図

2．住居跡

第1・2号住居跡

調査区中央南寄り斜面に位置し，北東には第6・7号住居跡があり，南西には第3号住居跡がある。第6号住居跡との最短距離は1.5m，第3号住居跡とのそれは5mである。

第1号住居跡は，断面の観察により第2号住居跡を切って構築されていることが判明したが，プラン確認段階でははっきりせず，西壁の一部，及び南壁を検出することができなかった。北壁長は425cm，他辺は壁溝，床面の状況等から推定すると，東壁350cm，南壁440cm，西壁320cmで，平面形は東西に長い長方形を呈すると思われる。壁高は北壁で63cm，東壁南端で30cmを測り，やや外傾気味に立ち上がる。南壁もわずかに5cm前後遺存していた。壁溝は南壁を除く各壁沿いに「コの字」状に廻っている。深さは2～10cmで東側が最も深い。主柱穴は1，3の2本である。1：径33cm・深さ63cm，3：径27～30cm・深さ64cm。柱穴中心間の距離は190cmを測る。2柱穴の中軸を主軸とすればN88°Eをとる。2は径35～40cm，深さ10cmで火を受けた痕跡はない。床面は炭化物・焼土粒を多量に含む土により全面貼り床が施されている。床面積は推定12.6㎡である。ピット4・5は貼り床を剝がした段階で検出され，第2号住居跡に伴うものである。

第2号住居跡は第1号住居跡に切られているため，西壁380cm以外は明確でないが，およそ北壁500cm，東壁380cm，南壁550cmで，南壁を下底とする台形を呈していると思われる。壁高は北西コーナーで52cmを測る。壁溝は検出されなかった。主柱穴は4・5・6・7の4本で

Fig. 42　小和田第1・2号住居跡

ある。4：径27～30cm・深さ39cm，5：径23～28cm・深さ58cm，6：径25～30cm・深さ62cm，7：径20～28cm・深さ60cm。距離は4～5：275cm，5～7：175cm，7～6：280cm，6～4：160cmである。長軸はN89°Wをとる。床面付近で多量の炭化材が検出されたが，床面は熱を受けた痕跡はない。床面積は推定15.6㎡である。

埋土より多数の土師器片が出土したが，どちらの住居に伴なうものか明確にし得るものはわずかである。

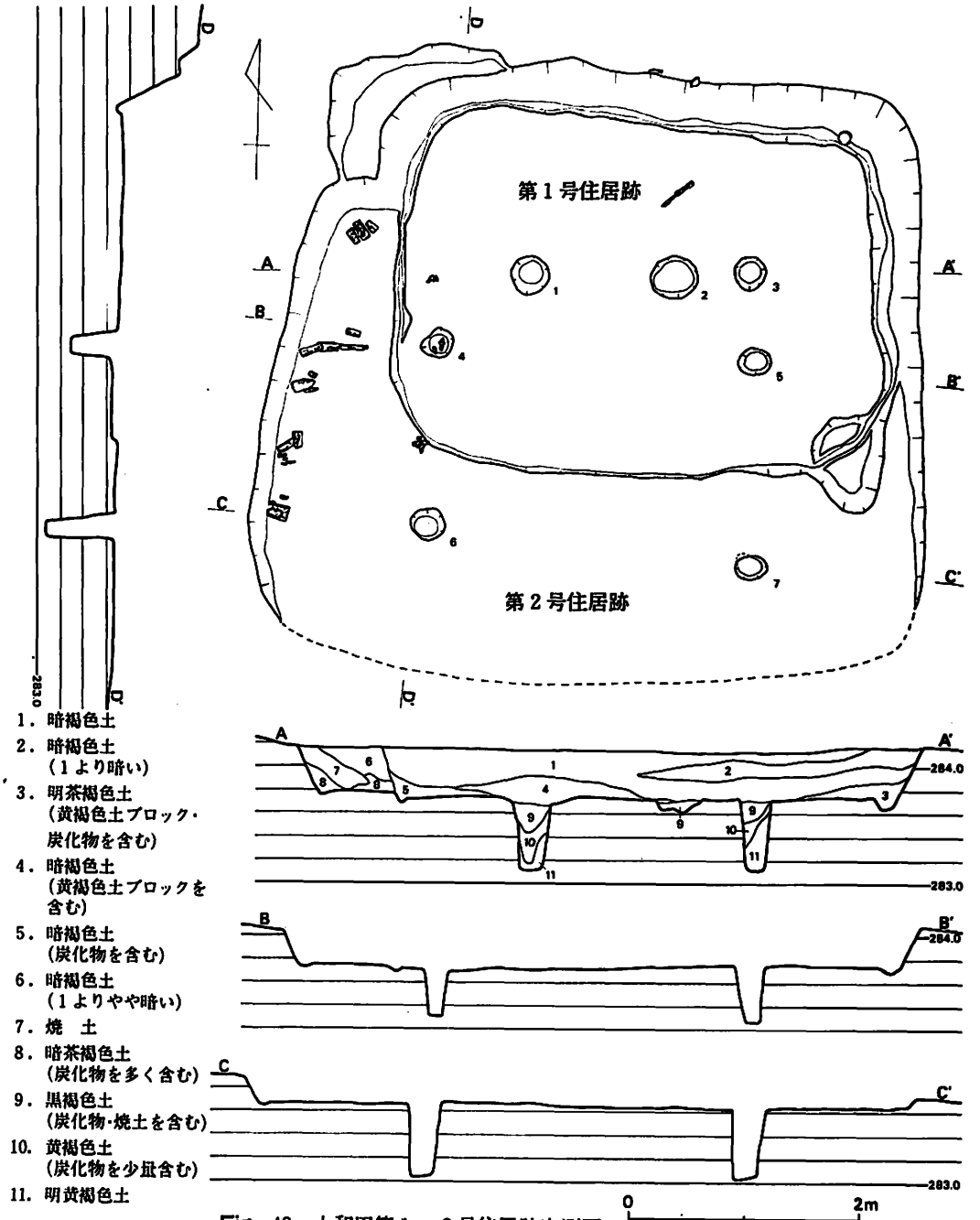


Fig. 43　小和田第1・2号住居跡実測図

出土遺物

土師器　壺(1)は直立する短頸がつき，球形の胴部をもつもので内外面共に指頭・ナデによる整形である。甕(9)はく字状に外反する口縁をもつものである。埦(2･3)は丸底を呈し内彎するものであるが，外面調整が2はヘラ削り，3は刷毛である。甑(7･8)は直線状にのびて口縁は丸くおわる。高坏(6)は脚部のみでラッパ状に開き端部が上方に肥厚するものである。接合は差込み式によるもので脚柱部内面に接合時の補強粘土がみられる。

Fig. 44　小和田第1号住居跡遺物出土状態

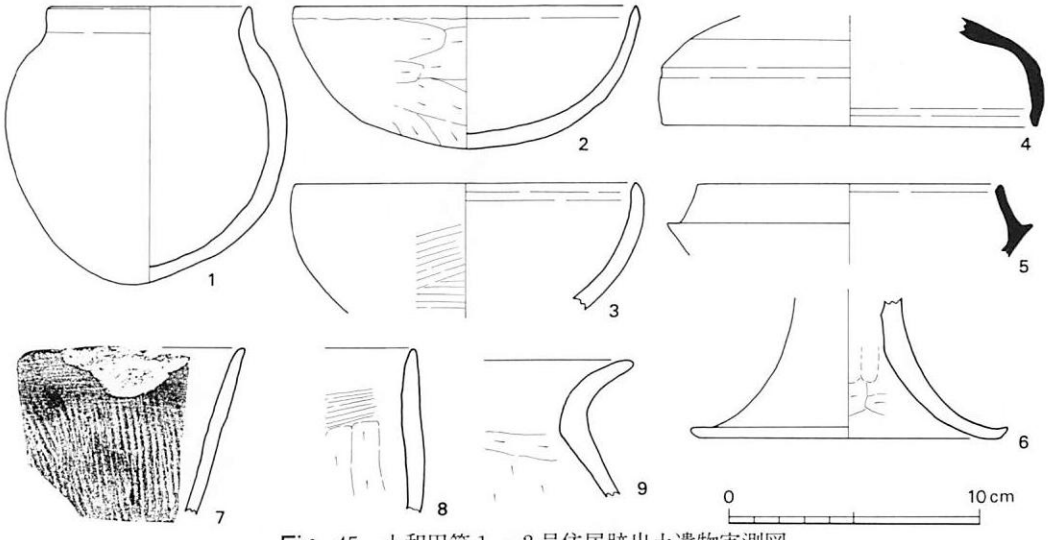


Fig. 45　小和田第1・2号住居跡出土遺物実測図

須恵器　坏蓋(4)は天井部が丸みをもち，稜線は不明瞭であるが沈線を界して体部・口縁部へと垂下する。端部内面にややあまいが面をもつ。坏身(5)は受部が外方にのび，立ち上がりは内傾して長く，端部内面に面を有する。

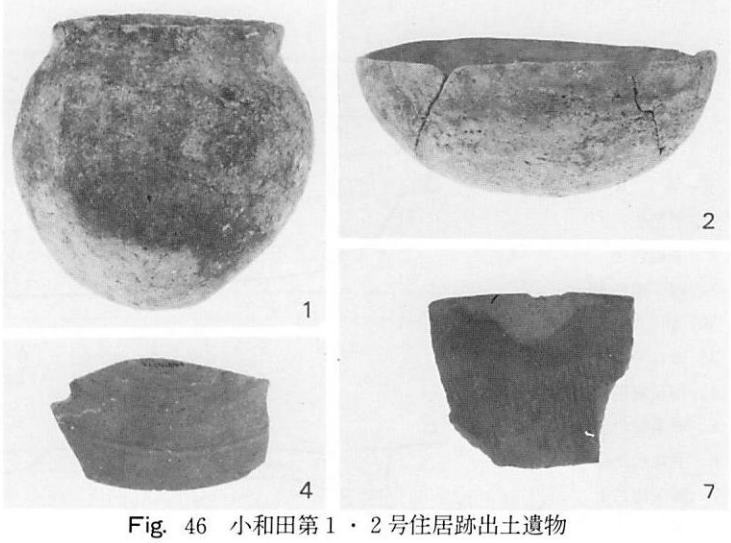


Fig. 46　小和田第1・2号住居跡出土遺物

第3号住居跡

本調査区では最も低く南に位置する。傾斜はこの部分が最もきつい。東側には第1・2号住居跡がある。遺構はさらに西へ続くと思われるが，調査区域外のため詳細は不明である。北壁北側では岩盤の角礫が露出している。床の平坦面は北壁より470cm付近までであるが，東壁の状況からみて，若干の流失はあるものの，ほぼ旧状に近いものと思われる。北壁は40～50cmを

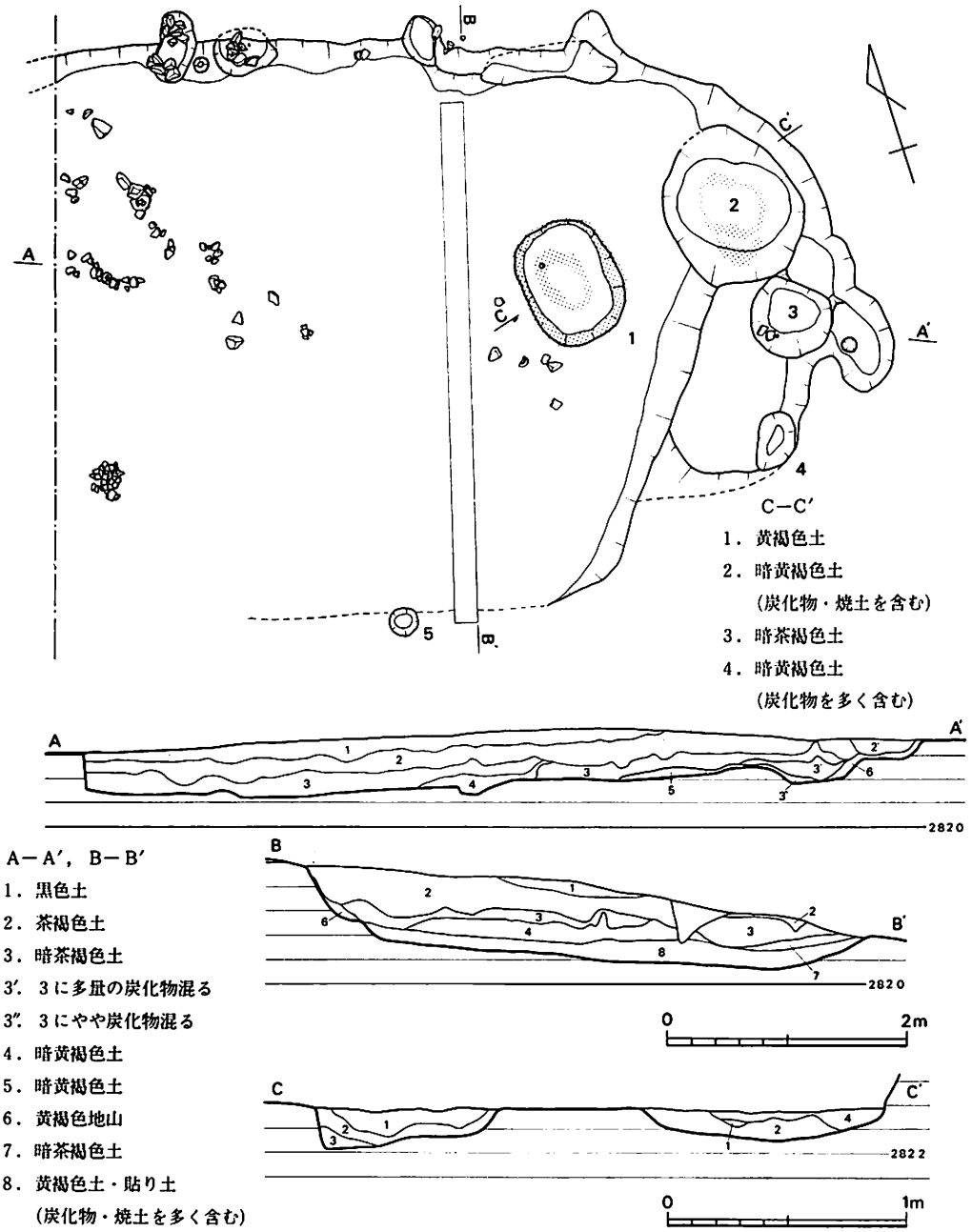


Fig. 47　小和田第3号住居跡実測図

測り外傾気味に立ち上がる。この北壁には横穴状に三か所の窪みがあり，一部で熱を受けた痕跡も認められた。床面は荒掘りの後，20cm前後の貼床を行っている。これには多量の炭化物片，焼土粒が含まれている。貼床は東半部では平坦であるが，

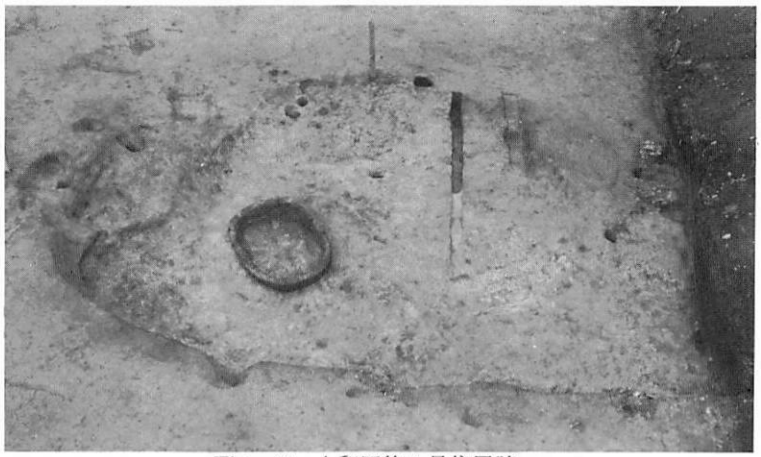


Fig. 48　小和田第3号住居跡

西側1/3では南北断面舟底状を呈している。北東コーナーでは土坑1・2が検出された。1は長径130cm，短径80cm，深さ16cmの楕円形を，2は径110～130cm，深さ15cmの円形を呈する。ともに断面形は皿状を呈し，内面は熱により赤変し，強固である。埋土は多量の炭化物・焼土粒を含んでいる。1・2は貼床面から掘り込まれている。東壁は東に張り出し，一段高くなっている。上屋構造を推定すべきピット等は検出されなかった。土師器・須恵器片の外に，スラグ2点が検出された。

出土遺物

土師器　甕(1～4)は口縁部が「く」字状に外反し端部に面をもつもの(1)とカーブをなして外反して口縁となり端部が丸くおわるもの(2～4)とがある。1は胴部最大径が下半にあり，外面は叩きの後に刷毛で調整している。2・3は胴部が張る形態をなすものであり，頸部がやや長い。甑(7)は胴部上半がほぼ垂直にのび口縁となり，下半はやや細くなる。把手は外上方にのびて断面楕円形である。基部に外面から2孔を穿っている。

須恵器　坏蓋(5)は天井部が丸く，あまい稜線をもってやや開きぎみに垂下し口縁となる。坏身(6)は胴部が丸く，受部が外上方にのび立ち上がりは垂直に短くのびる。

Fig. 49　小和田第3号住居跡遺物出土状態

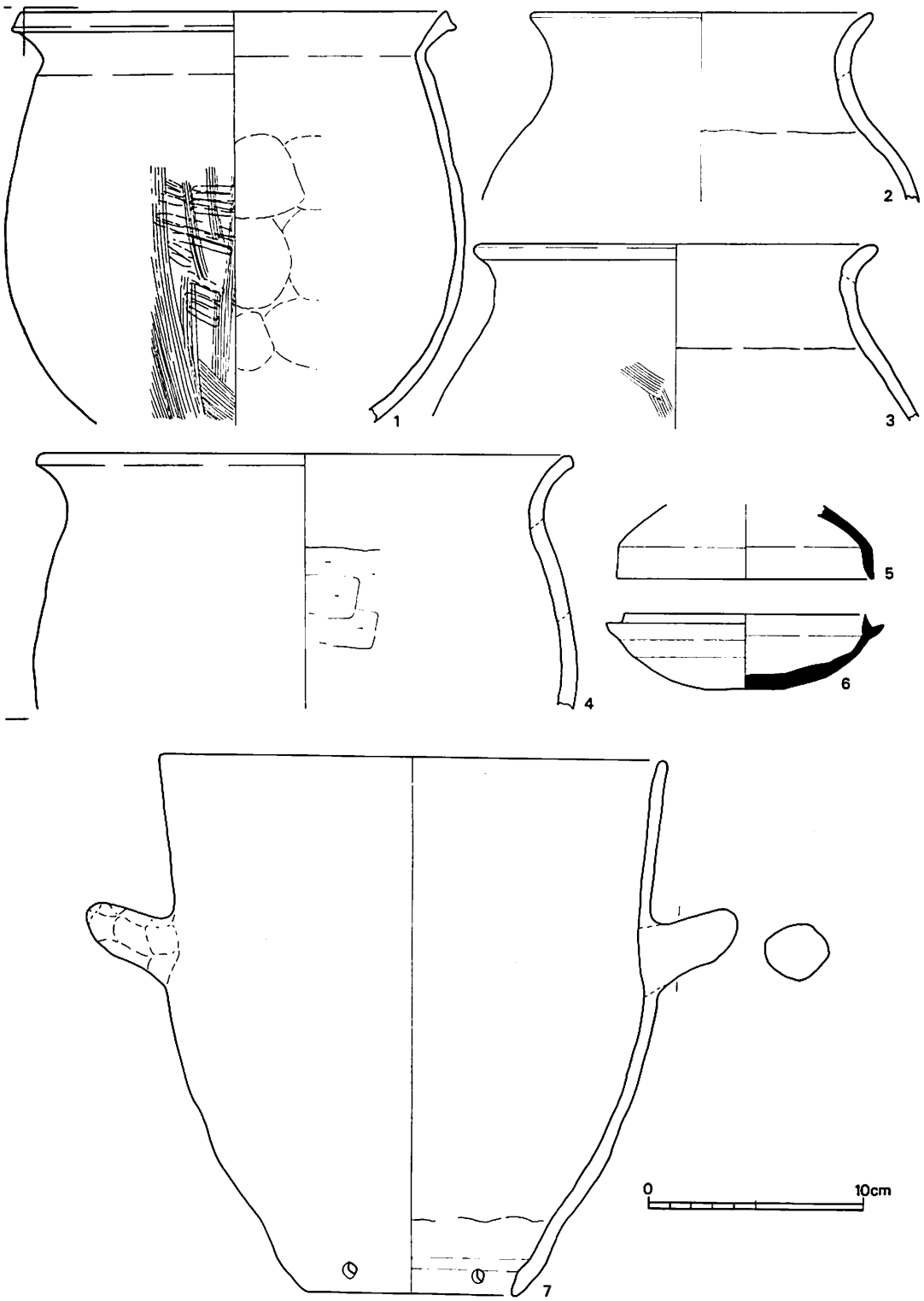


Fig. 50 小和田第3号住居跡出土遺物実測図

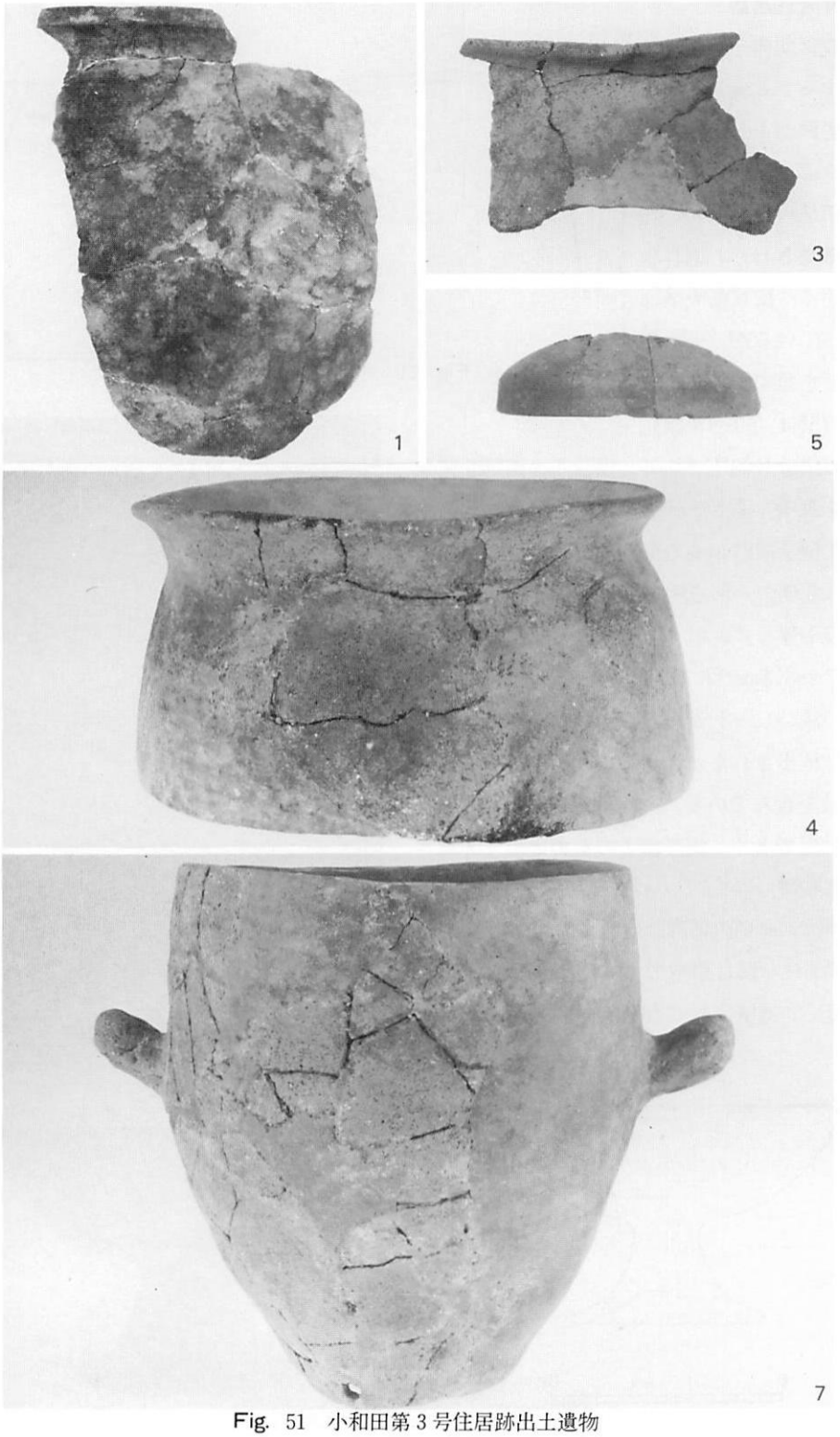


Fig. 51　小和田第3号住居跡出土遺物

第4号住居跡

調査区北側，最高部に位置する。北側には第5号住居跡があり，最短距離は3mである。

遺構は現地表下10～15cmで確認された。遺存状態が悪く，南東部大半は流失しているが，平面形は方形を呈すると思われる。西壁は460cmを測り，その方位はN28°Eをとる。現壁高は西壁北側で23cmを測る。深さ3cm前後，断面「U」字形の壁溝は北壁手前約40cmで東へ折れて途切れている。床面は北側の一部で熱による赤変がみられ，炭化物を若干伴っていた。床面標高は北側で288.5m，南側で288.4mである。北壁付近に径16cm，深さ10cmの浅いピットがあるが，主柱穴と思われるものは検出されなかった。埋土は多量の炭化物，焼土粒を含んでいる。遺物出土状況は，遺構確認面付近で多く，床面直上のものは少なかった。

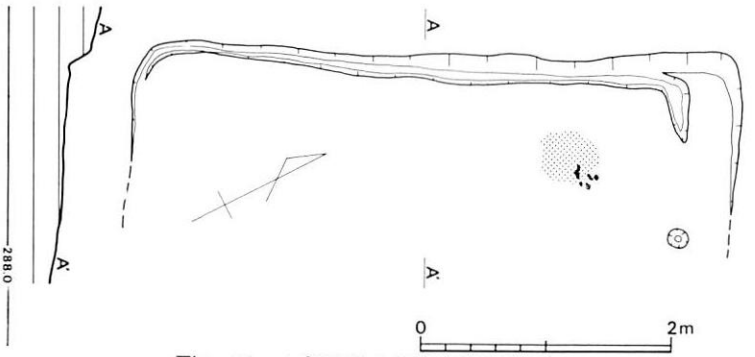


Fig. 52　小和田第4号住居跡実測図

Fig. 53　小和田第4号住居跡

出土遺物

土師器　高坏の坏部は埦状に内彎し口縁となる。脚部柱状部は中空であり裾はラッパ状に大きく開く。器壁は厚く赤褐色を呈する。

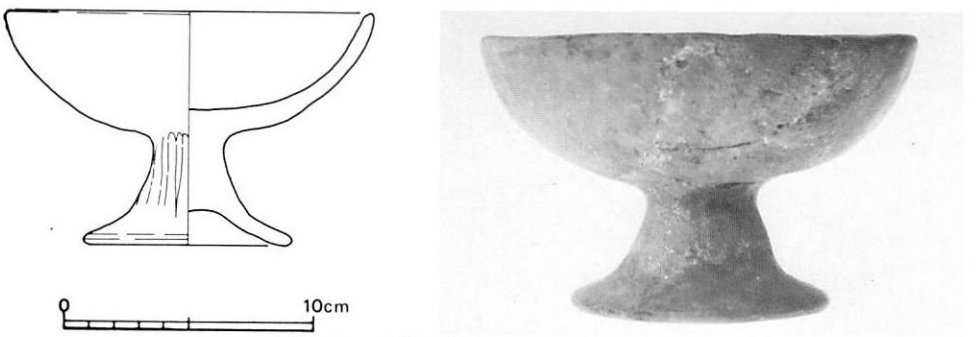


Fig. 54　小和田第4号住居跡出土遺物

第5号住居跡

調査区最北端，最高部に位置する。北側は調査区域外のため全容を明らかにし得なかったが，平面形は方形と思われる。南壁は360cm前後と思われる。壁高は西・南壁ともに30cmを測る。住居の西側1/3は厚さ7～15cmの貼土が施されており，ベッド状を呈している。床面はベッド状部分も含めて全体的に軟弱であった。壁溝はベッド状部分にはみられず，南壁の一段下がった部分から始まっている。深さは5～10cm，断面形は「U」字形を呈す。主柱穴は2・4と思われる。2：径27～30cm・深さ32cm，4：径20～23cm・深さ45cm。柱穴間の距離は125cmで，2—4を結ぶ線に主軸をとれば，N 67°Wで，壁方向とはズレを示す。3は主柱穴間にあり，深さ約6cmで皿状を呈す。一部熱による赤変がみられ，炉穴と思われる。埋土中より多量の土師器片，須恵器片が出土している。

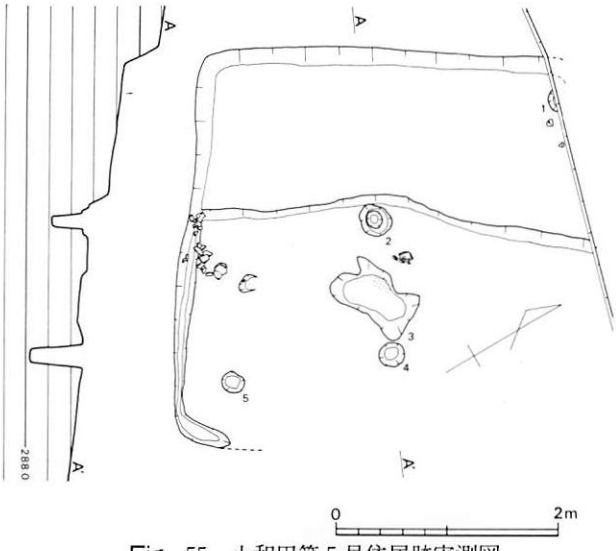


Fig. 55　小和田第5号住居跡実測図

出土遺物

土師器　壺(1)は小形で短く直立する口縁部をもつものである。甕(3)は胴部の肩が張り口径に比して大きく口縁部はカーブをなして外反する。椀(2)は丸底を呈し内彎するものである。

須恵器　坏蓋(4)は天井部が丸みをもち，ややあまい稜線を界して開き気味に口縁となり，端部は丸くおわる。坏身(5･6)は胴部が丸みをもち受部は外方にのびて立ち上がりは長く，内傾する。端部は5は丸く，6は内面に面をもっておわる。

土製紡錘車　断面台形を呈し，片面穿孔である。

砥石　凝灰岩質である。4面とも使用されており，著しく磨滅している。

Fig. 56　小和田第5号住居跡

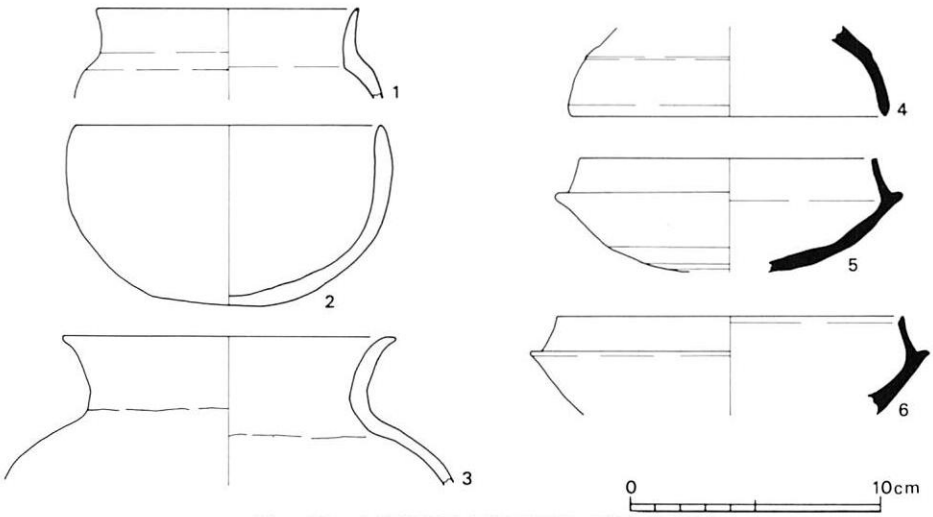


Fig. 57　小和田第5号住居跡出土遺物実測図

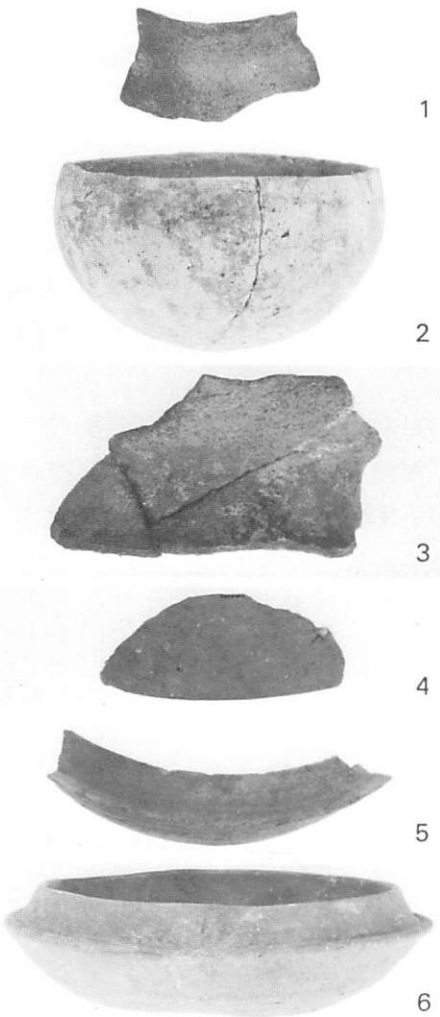


Fig. 58　小和田第5号住居跡出土遺物

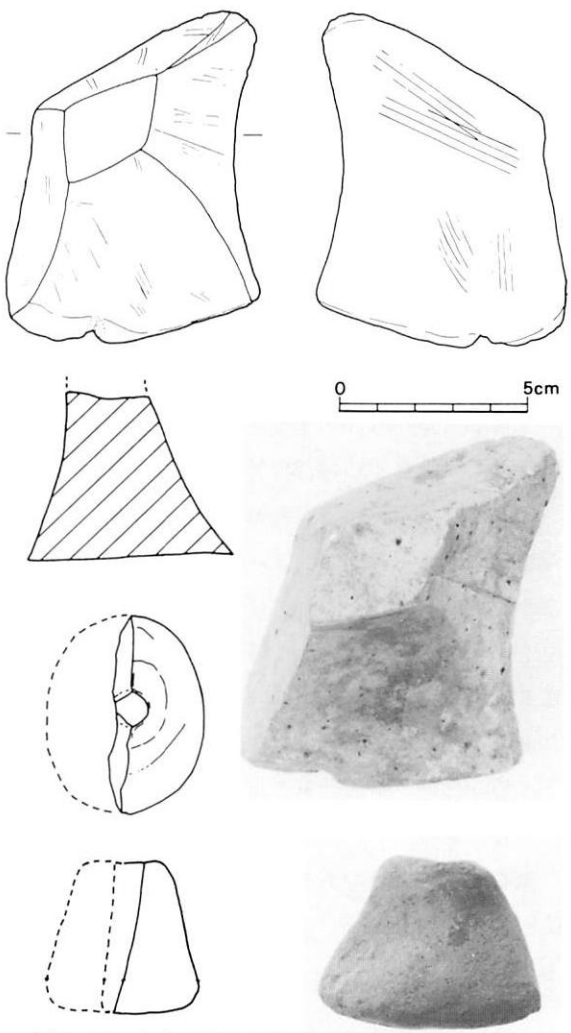


Fig. 59　小和田第5号住居跡出土砥石・土製品

第6・7号住居跡

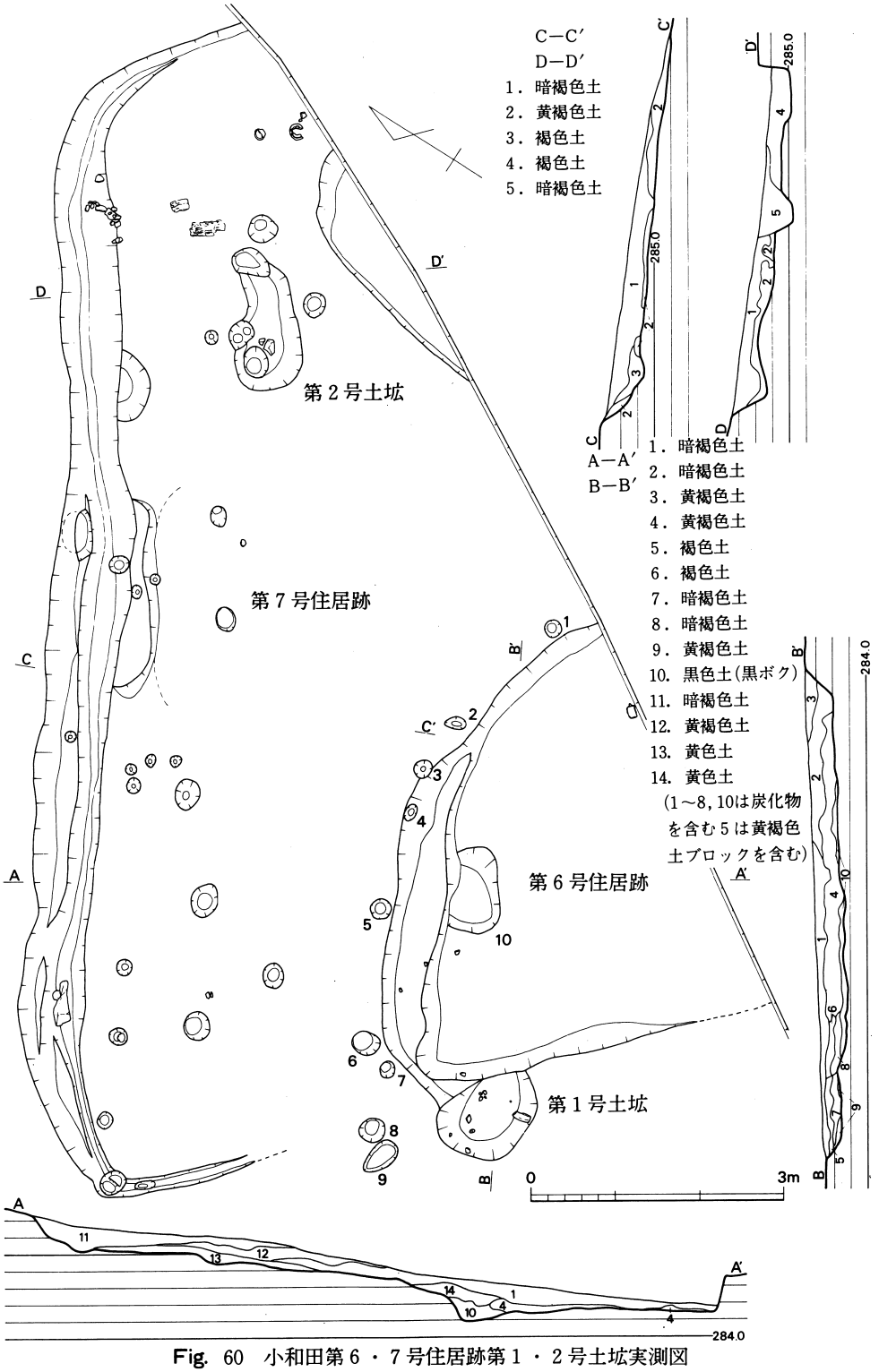


Fig. 60　小和田第6・7号住居跡第1・2号土坑実測図

調査区中央東側に位置する。これより東は谷に向かう急な斜面となっている。第6号住居跡の西コーナーには第1号土坑があり，切り合いを示す。南西1.5mには第1･2号住居跡がある。第6・7号住居跡ともに東に続くが調査区域外のため，全容を知り得なかった。おそらく，そのほとんどは流失しているものと思われる。

第6号住居跡は，北壁は大きな弧を描き，約60°の角度を界して南西壁に移行する。南西壁は直線的である。北壁西側はゆるやかに立ち上がり，一段のステップを有する。壁高は北壁東端・西端付近で26～29cm，同中央部で50cm前後，南西壁で25cmを測る。北壁に沿って外側にはピットが並ぶ。このうち2・4は深さ10cm以内と浅いが，1は径20cm・深さ40cm，3は径20cm・深さ43cm，5は径25cm・深さ15cm，6は28～32cm・深さ47cm，7は径17cm・深さ46cmを測る。8，9は本遺構に伴なうものかどうか不明である。床面は貼床が施され堅緻であるが，凹凸が著しい。10は長軸100cm，短軸55cm，深さ17cmで断面形は皿状を呈す。遺物は甕1が出土したが，非常に少なかった。

第7号住居跡は北西壁13mと長大なものである。北東壁・南西壁はともに一部を知るのみであるが，平面形は平行四辺形状である。壁高は北西壁で30～40cmを測り，概してゆるやかに立ち上がる。壁溝は北東壁下の一部を除き全体に検出されたが，深さに比べ幅が広く，断面形は皿状を呈する。ピットは北西壁に近い列（第1列）と遠い列（第2列）の概ね2つに分けることができる。第1列は径20cm以内の小さなもの，第2列は径30cm前後のものである。深さはともに20～50cmであるが，第1列が北東部にはみられないのに対し，第2列は全体に検出されてい

Fig. 61　小和田第6・7号住居跡，第1・2号土坑

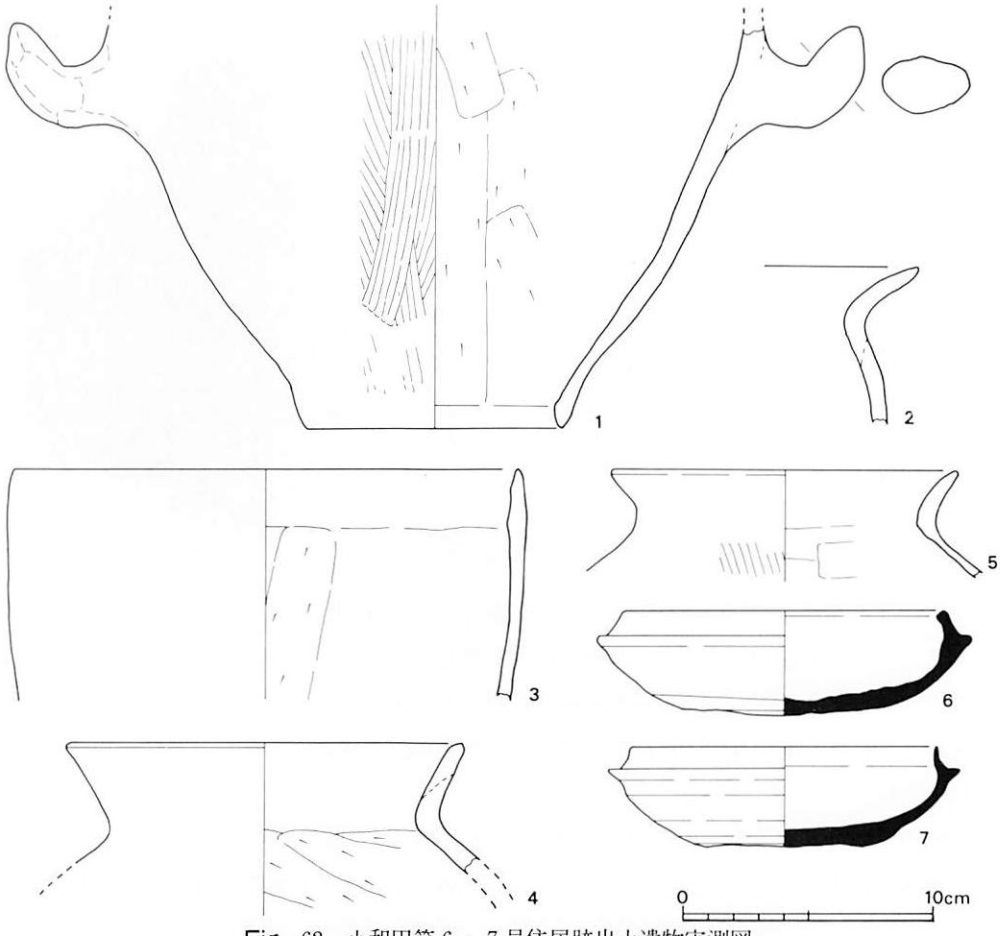


Fig. 62　小和田第 6 ・ 7 号住居跡出土遺物実測図

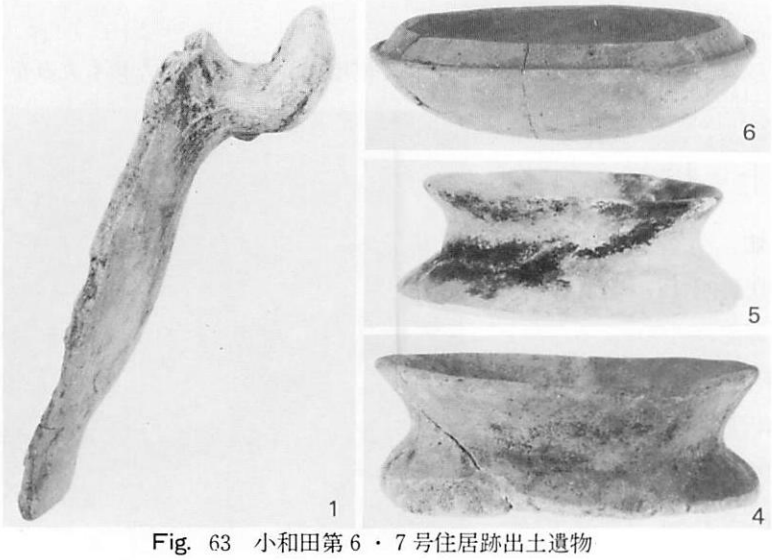


Fig. 63　小和田第 6 ・ 7 号住居跡出土遺物

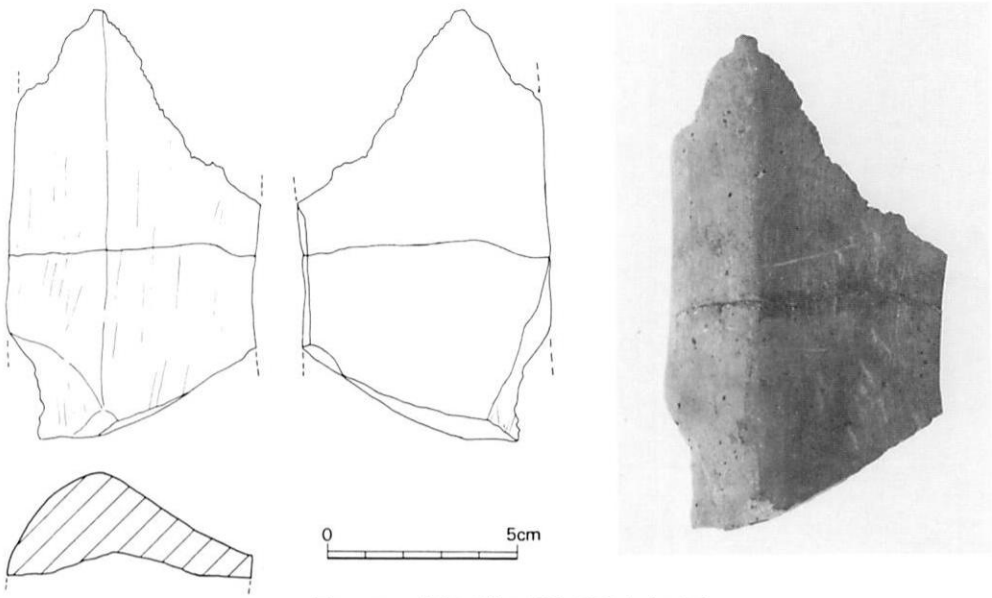


Fig. 64　小和田第７号住居跡出土砥石

る。埋土中より多量の土師器片・須恵器片が出土している。

断面Ａ－Ａ′によると，第６号住居跡壁際の埋土が，下から黒ボク，吉備土（地山土）ブロックとなっており，第７号住居跡構築の際に第６号住居跡を埋め立てたものと思われる。

出土遺物

土師器　甕(2･4.5)は胴部から「く」字状に外反する口縁で端部は丸くおわる。4･5は口径に比して胴部が張るものである。甑(1･3)は底部にむかってすぼまり基部で折れる。把手はＬ字状をなして上方にのびる。これらは黄褐色を呈し，外面粗い刷毛，内面ヘラ削り調整である。

須恵器　坏身(6･7)は器高がやや低く平底状を呈す。受部は外方にのび，立ち上がりは短く，内傾するが，６は厚く７は薄い。

砥石　凝灰岩製と考えられる。２面ともよく使用されており，また角も丸みをもつ。

３．土　坑

第１号土坑

第６号住居跡西コーナーと切り合っており，断面の観察によると本土坑のほうが古い。長径 120 cm，短径 100 cm の楕円形，深さ30cmで断面形は皿状を呈す。底面より小量の灰白色粘土が検出された。手捏土器のほ

Fig. 65　小和田第１号土坑

かに，カマド形土器の焚口ヒサシ部破片が出土した。

出土遺物

土師器　小形の手捏土器であり，指頭による整形である。

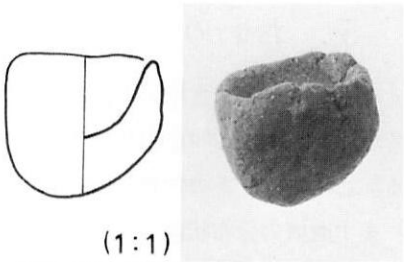


Fig. 66　小和田第1号土坑出土遺物

第2号土坑

第7号住居跡北東部にあり，埋土上部より掘り込まれている。土師器片が出土している。土坑内にはピットがあるが，南西隅のものは第7号住居跡第2列のものと思われる。

4．その他の遺物

槍先型尖頭器　表土剝ぎ中に第4・7号住居跡の中間付近で単独出土したもので，その際先端部を欠損した。石質は安山岩で，横長剝片を素材としている。復元長で11.7cmを測り，最大幅は下半部中央にあり4.3cm，厚さ1.6cm，重さ59g である。表裏両面に加工がほどこされているが，比較的雑であり一部で旧剝離面を残す。旧石器時代終末頃の所産と思われる。

土師器　高坏(4)の坏部であろうか，外面に稜をもち折れて口縁部となる。端部は平坦面をもつ。師楽式土器(5)で外面に粗い叩きがみられる。

須恵器　坏蓋(1･2)は天井部がやや平坦面を呈し，丸みをもって口縁へ垂下するが，2はやや開く。ともに沈線をもつ。端部は1がやや開き内面に沈線をもち，2は内面に面をもつ。3は甕の胴部であろうか，外面は叩きの上をカキ目で消しており，内面も叩きの上をナデている。

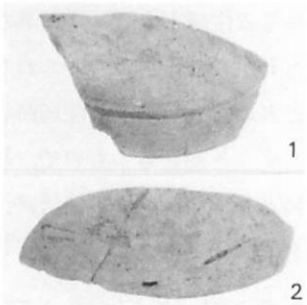


Fig. 67　小和田遺跡出土遺物

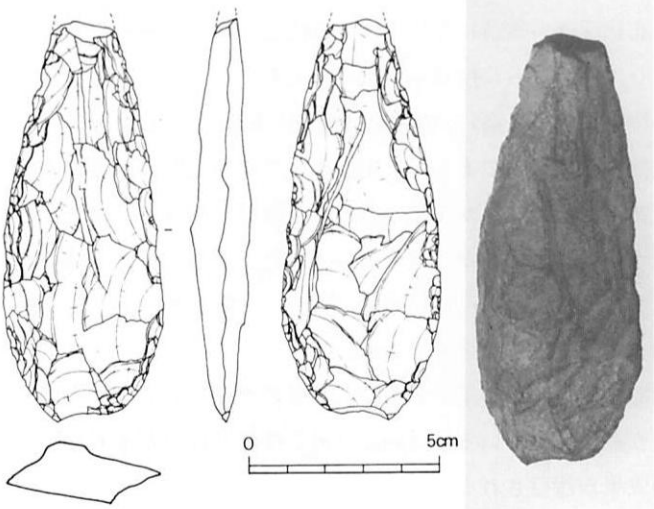


Fig. 68　小和田遺跡出土石器

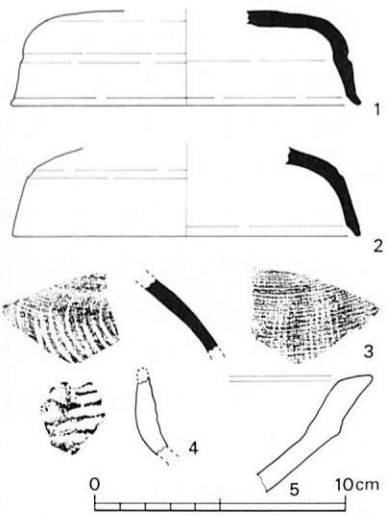


Fig. 69　小和田遺跡出土遺物実測図

5．おわりに

小和田遺跡では古墳時代後期の住居跡７軒を検出した。いずれも等高線に平行して構築されているが，平均12°の斜面に立地するため，遺構はその下半を流失しており，コ字形を呈している。ここでは，その形態について若干述べてみたい。

まず遺構の分布状態からみると，およそ２群に分けることができる。標高282.5～285.5mにある斜面下位のⅠ群と，標高288.5m付近のⅡ群とである。周囲の地形からみて，おそらくⅠ群は等高線に沿って西方へ，Ⅱ群は同じく北・西方へ広がりをみせるものと思われる。また，各住居跡をその形態から分類すると２類に分けられる。これをＡ類，Ｂ類とすると，Ａ類は一辺320～460cmの方形あるいは長方形を呈するごく一般的な住居跡（第1・2・4・5号住居跡）で，Ｂ類は等高線に沿う長大な壁をもつ住居跡（第3・7号住居跡）である。調査面積が狭く，遺構数も少ない現段階で明言は避けるが，Ａ類は斜面上位のⅡ群に，Ｂ類はⅠ群に分布するという傾向がみられる。Ａ類はプランは方形，長方形，柱穴は０，２，４本，壁高の有無，ベッド状遺構等とその内容は様々である。Ｂ類の第３号住居跡は一辺６ｍ以上の規模をもち，内部には熱で赤変した楕円形ピットを有する。また壁には一部熱変した横穴状の窪みをもつ。このように単なる住居とするには特異なものであり，当初，鍛冶関係の遺構かとも考えられたが，スラグもわずかで，羽口もみられないことから，ここでは何らかの作業場的性格をもつものとするにとどめたい。第７号住居跡は13m もの長大な壁をもつ遺構である。幅広で浅い壁溝と壁に沿ったピット列をもつもので，斜面に立地する遺跡においてしばしばみられるものである。その性格としては長屋状の住居跡，建物跡，下方にある住居のための防護施設等が考えられている。本遺構の場合，下方に住居の存在は考えられず，また構築の際には第６号住居跡を埋め立てていること，柱穴が大きくしっかりしていること等から長屋状の住居跡あるいは建物跡と考えられる。ただ，この柱穴は壁際のものだけであり，その上部構造を考える上でなお問題が残される。このような住居形態の違いと分布状況は，集落において個々の住居がいかに機能していたかにも関わり，興味深いところであり，今後さらに検討されるべきである。

遺物は槍先型尖頭器，土師器壺・甕・甑・埦・高坏，須恵器坏身・坏蓋，砥石が出土している。最も古い槍先型尖頭器は旧石器時代終末頃のものであるが，庄原市域での旧石器時代遺物の出土は初めてであり，今後同時代の遺物，遺跡の発見が予想される。土師器，須恵器は流失，流入により，遺構に伴なうものの判別が困難であったが，近年報告された三次市松ケ迫遺跡群[(1)]での資料等をもとに概ね（第１号・第２号），第５号→（第６号・第７号），第４号→第３号という流れで，６世紀中葉から６世紀末までをあてることができる。

以上，本遺跡は６世紀後半の短期間に営まれた集落である。同時期の遺跡として庄原市川西町境ケ谷遺跡で大規模な集落の調査が進められている。時期，立地条件等共通点が多く，鍛冶関係の遺構も検出されており，その成果が注目される。

（註）

(1) 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター『松ケ迫遺跡群発掘調査報告』1981

V. 永宗遺跡

Fig. 70　永宗遺跡遠景（北西から）

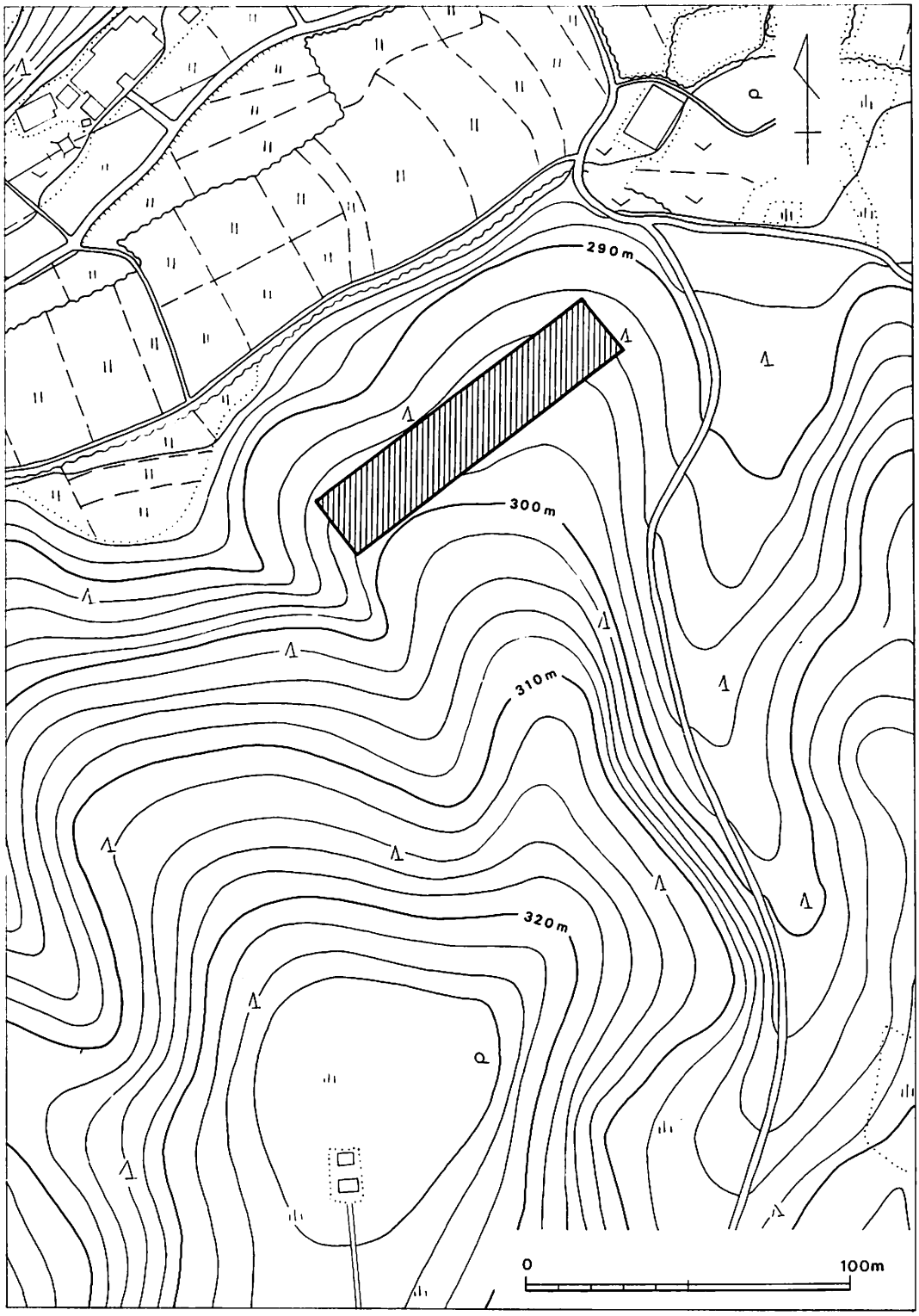


Fig. 71　永宗遊跡周辺地形図

1．はじめに

永宗遺跡は新庄町字永宗に所在する。調査は4月13日～6月1日までの約2か月間行い，発掘面積は約2000㎡である。小和田遺跡から北東へ500m離れた丘陵平坦面上に立地し，標高293～300mを測る。北側の水田面との比高差は10mである。この平坦面は東西を谷で刻まれ，北側に緩く傾斜する。二つの谷には湧水点があり現在でも利用できる。付近には黒ボクが厚く堆積し，層位は表土・黒ボク・漸移層（黒ボクと吉備土の）・吉備土の順となっている。遺構確認面は吉備土上面であるが，本来の掘込み面は漸移層にあったと考えられる。検出された遺構は，住居跡3軒・住居跡状遺構1軒・建物跡3棟・土坑2基・溝状遺構1条であった。

Fig. 72　調査風景

Fig. 73　永宗遺跡完掘後（南西から）

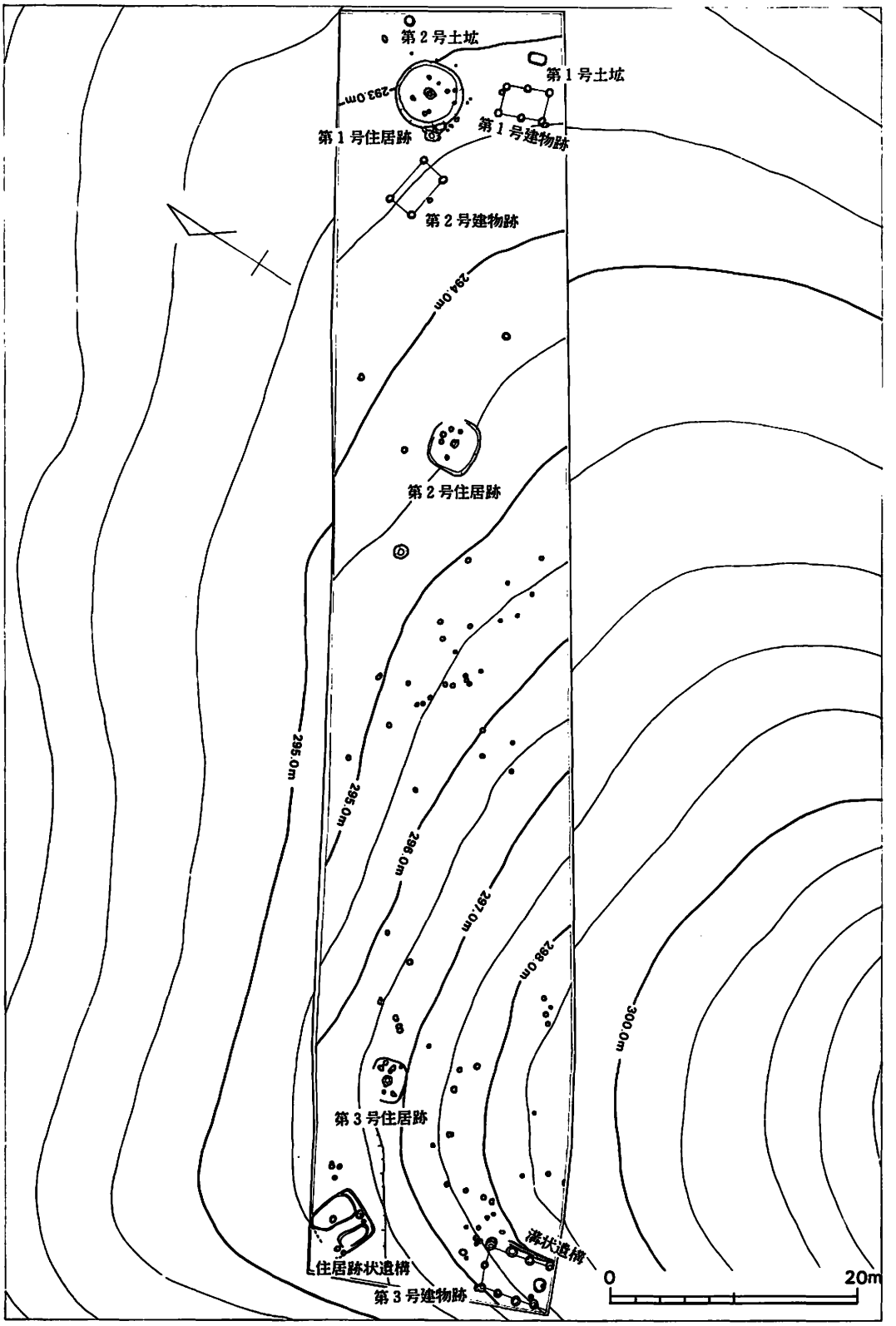
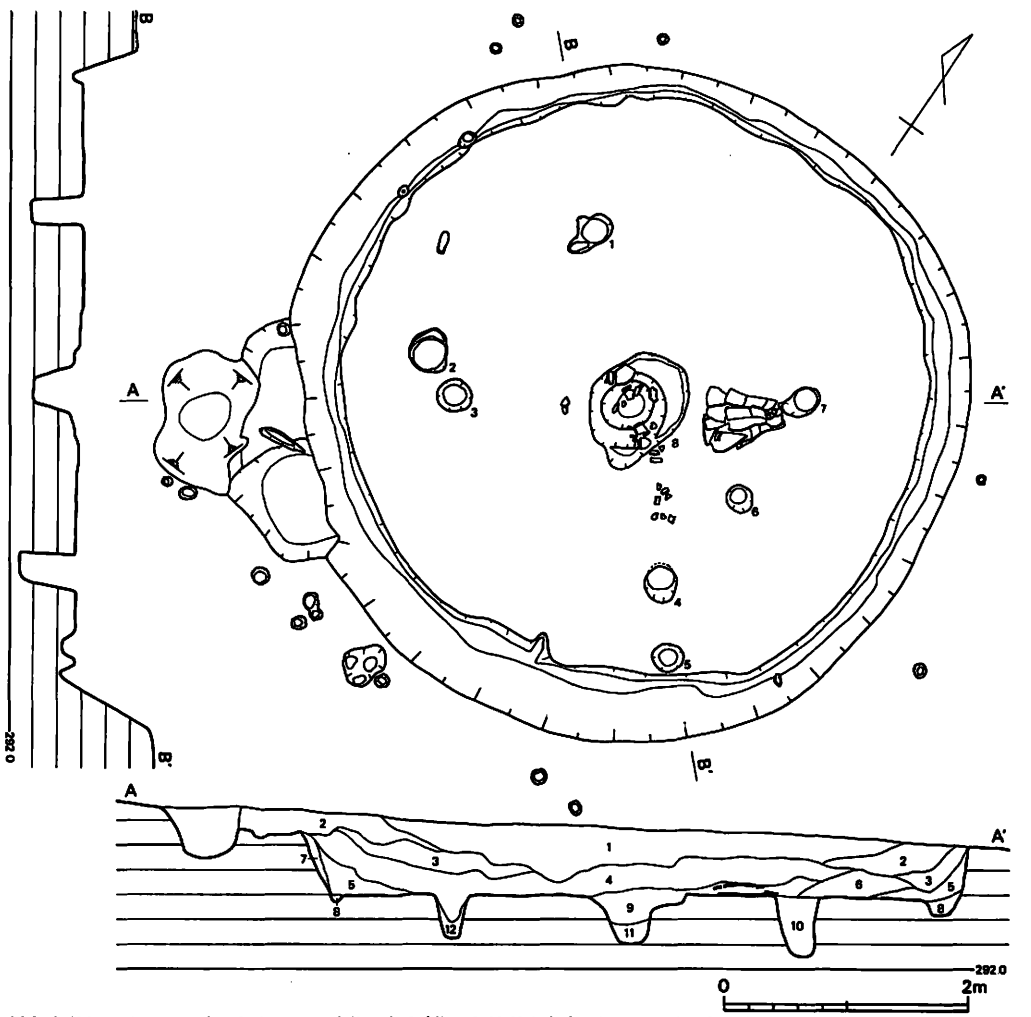


Fig. 74　永宗遺跡遺構配置図

2．住居跡

第1号住居跡

調査区の北東端に位置し，本遺跡中最大の住居跡である。その平面形はほぼ正円形を呈し，南西部に階段状の張り出しをもつ。主軸方向をピット1,7を結ぶ線にとるとN84°Wをさす。径550cmで床面積は約23.7㎡となっている。黒ボクが厚く堆積しているため遺存状態は良好で，地山が北へ向かって緩く傾くのにしたがい，壁高は最大の南側で80cm，最小の北側で33cmを測る。壁面は北東側で直線的に立ち上がるが，ほぼ65°の傾きを持っている。壁面に沿って幅10～20cm，深さ10cm程度の壁溝が廻っており，西側の溝内に2つ，東側に1つの小ピットがみられる。吉



1．黒色土(黒ボク)　2．暗褐色土　3．暗黄褐色土(黄褐色粘質土を含む)　4．暗褐色土(2よりやや暗い)
5．暗褐色土(黄褐色粘質土を含む)　6．暗褐色土(黄褐色土粒を含む)　7．暗黄褐色土　8．明黄褐色土
9．黒褐色土(黄褐色土粒・炭化物を含む)　10．暗黄褐色土(炭化物を含む)　11．暗黄褐色土(炭化物を含む)　12．暗黄褐色土

Fig. 75　永宗第1号住居跡実測図

備土を掘り込んで床面が形成されるが，本来の掘り込み面は吉備土上層の漸移層にあったと考えられる。床面は固くよくしまり，８つのピットを検出した。主柱穴は１，３，４，７の４本で，１：径30cm・深さ45cm，３：径35cm・深さ35cm，４：径30cm・深さ45cm，７：径20～30

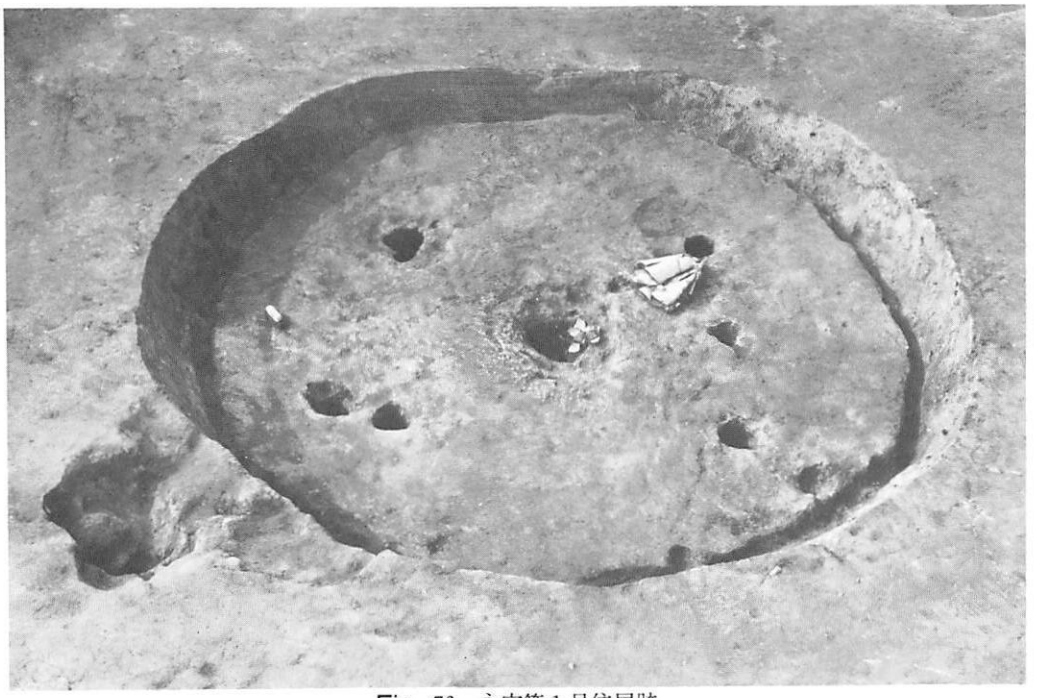


Fig. 76　永宗第１号住居跡

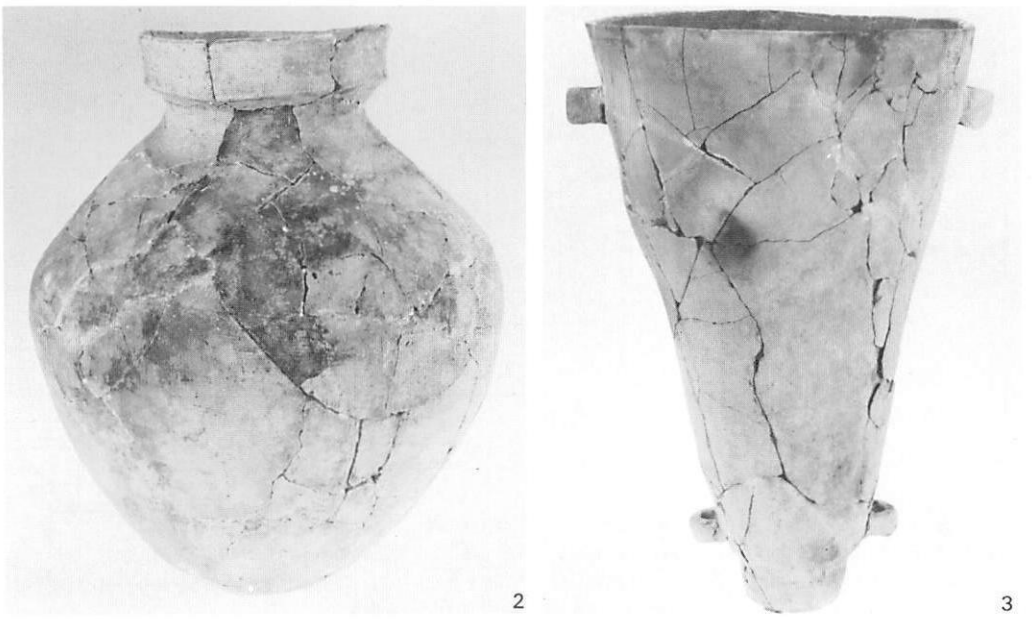


Fig. 77　永宗第１号住居跡出土遺物

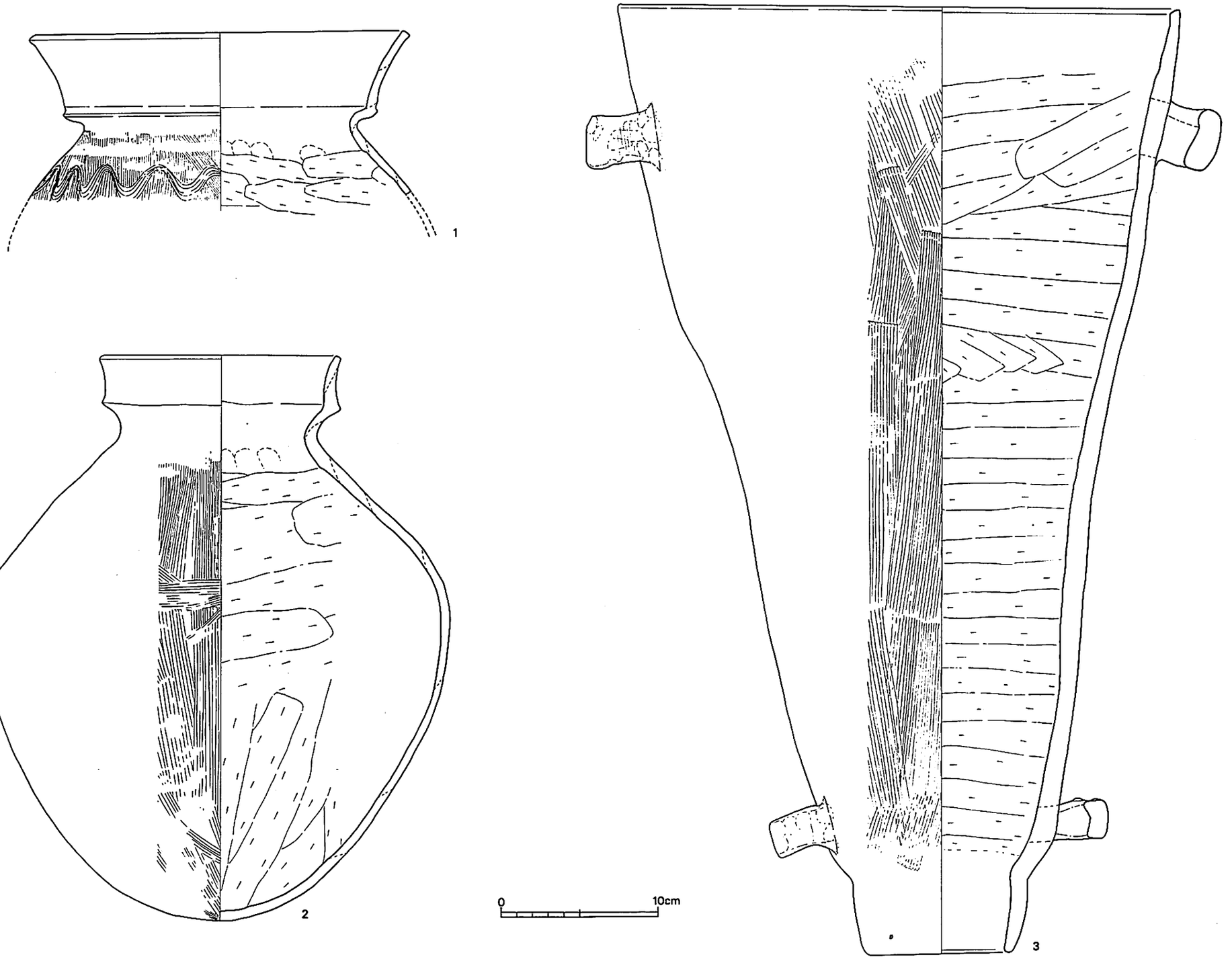


Fig. 78　永宗第Ⅰ号住居跡出土遺物実測図

cm・深さ50cmを測る。柱穴中心間の距離は，1—3：175cm，3—4：225cm，4—7：190cm，7—1：170cmである。主柱穴の埋土はほぼ暗褐色土で一様であった。床面中央には炉穴と思われるピット8が存在する。楕円形を呈し北側に一段のテラスを有する。長径70cm，短径50cmを測り，40cmの深さをもつ。中央ピット内では焼けた痕跡が顕著でないが，埋土の黒褐色土と暗褐色土中にはいずれも炭化物を含んでいる。他の4つのピットについては性格不明である。南西端には階段状のテラスが一部で攪乱を受けているものの，壁にそって2段見つかった。床面と下段との段差は40cm，下段と上段との差は10cm，上段と検出面との差は15cmであった。このあたりでは壁高が80cmもあるので出入が不便で，出入口の階段として設けられた可能性が考えられる。しかし主柱穴との位置関係に若干の問題を残している。住居の周囲には他に小さなピットが10数個検出されている。これらのピットの内いくつかはこの住居に関係するものであったろう。

Fig. 79　永宗第1号住居跡遺物出土状態

遺物の出土量は本遺跡中で最高である。その多くは土師器片で，石器類は床面より少し浮いたところで砥石を出土したのみである。土器の多くは床面より浮いた埋土中にみられたが、大形の甑形土器などは床面で押しつぶされた状態で出土している。また炉内にも土器片が比較的多くつまっていた。

出土遺物

土師器　壺は2形態に区分できる。2は複合口縁をなし，頸部は短く，胴部が倒卵形を呈するが上半は直線状をし丸底である。胴部に比して口縁部が小さくやや特異な形態を呈する。調整は内面ヘラ削り，外面ハケ目で，口縁部はヨコナデである。5・12はやや扁球形の胴部に直線状に外反する口縁のつくものである。胴部は非常に薄い。甕も2形態に区分できる。一つは複合口縁をなすもの(1·4·7～10·14～16)，いま一つはく字形の単純口縁をなすもの（11・13・17）である。前者は口縁端部が平坦面を有するものであり，また稜線がややあまいものもある。1は胴部上半に櫛状工具による波状文がみられる。後者は前者に比べ胴部の球形化が著しい。甑形土器（3）は器高58.7cmの大形品でいわゆる山陰型の甑形土器である。口縁に向って直線状に開き円筒形を呈し，基部であまい段をもってすぼまる。上下には横位の状態で2対の半環

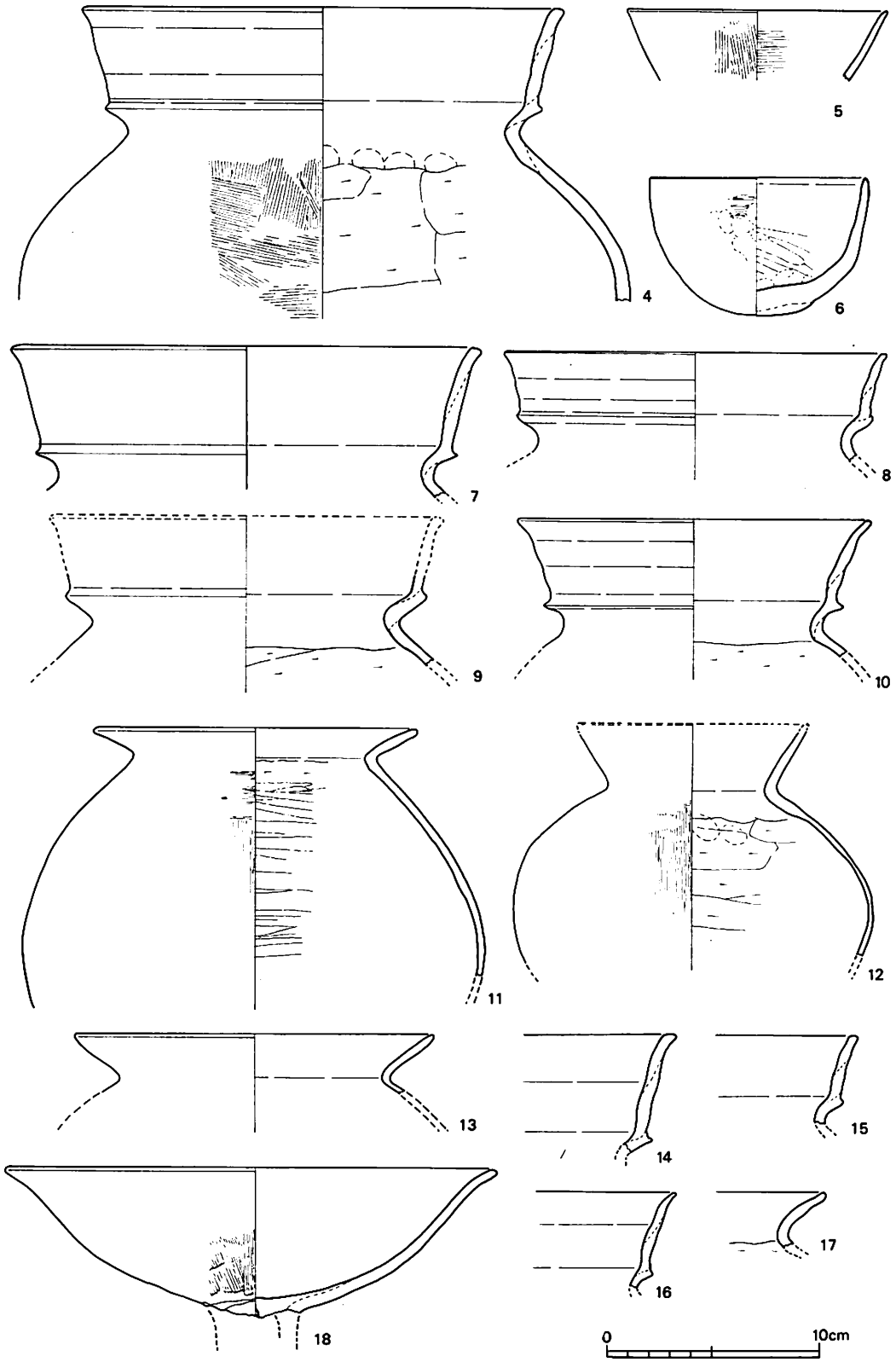


Fig. 80　永宗第1号住居跡出土遺物実測図

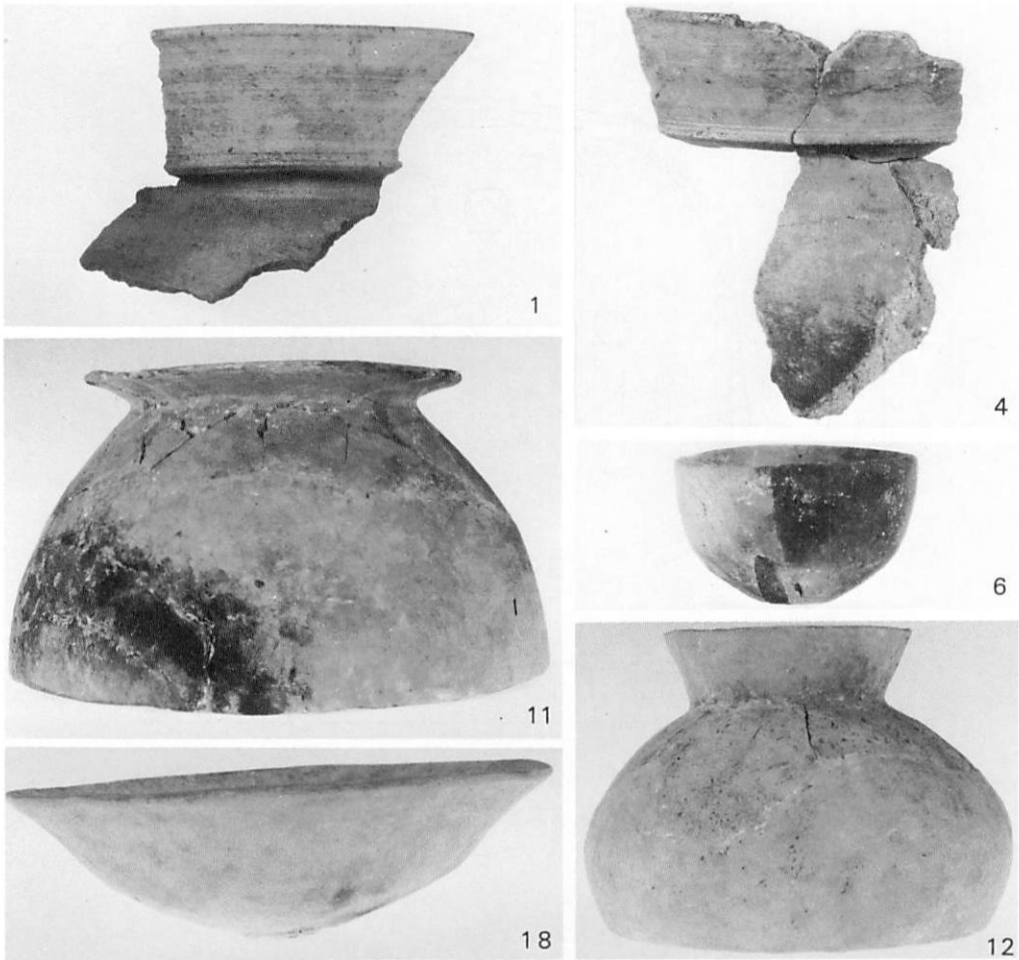


Fig. 81　永宗第１号住居跡出土遺物

状把手が取り付けられている。調整は外面ハケ目，内面ヘラ削りで，口縁と基部ではヨコナデとなっている。高坏(18)は坏部が底面から浅く内彎しながら開き，口縁部でやや外反するもので円板充塡接合のものである。埦(６)は丸底で，底部は厚く口縁に向かってやや開き徐々に厚みを減ずるものである。

砥石　流紋岩系の石材を用いており，長さ18.9cmの角柱状を呈す。四面はいずれも平坦で使用の痕跡がみられ，浅い擦痕が長軸方向に幾条も残っている。

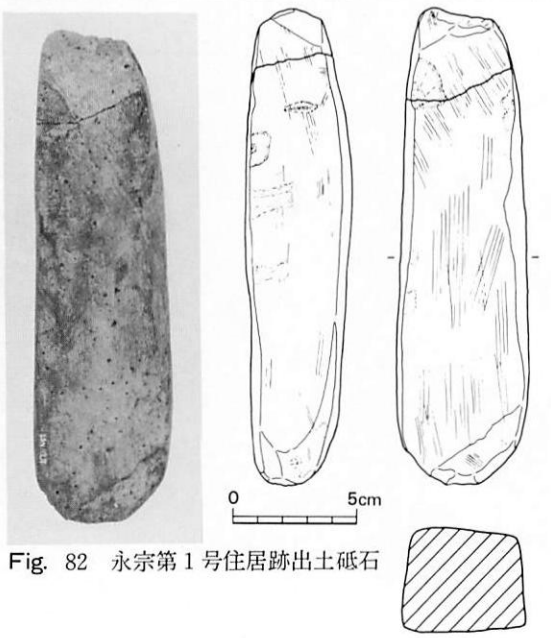


Fig. 82　永宗第１号住居跡出土砥石

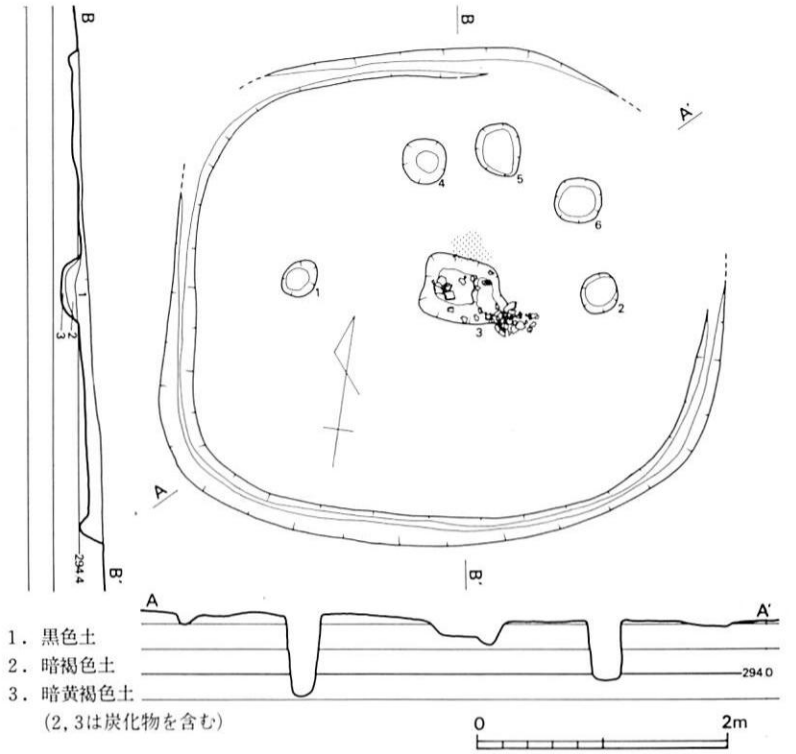


Fig. 83　永宗第2号住居跡実測図

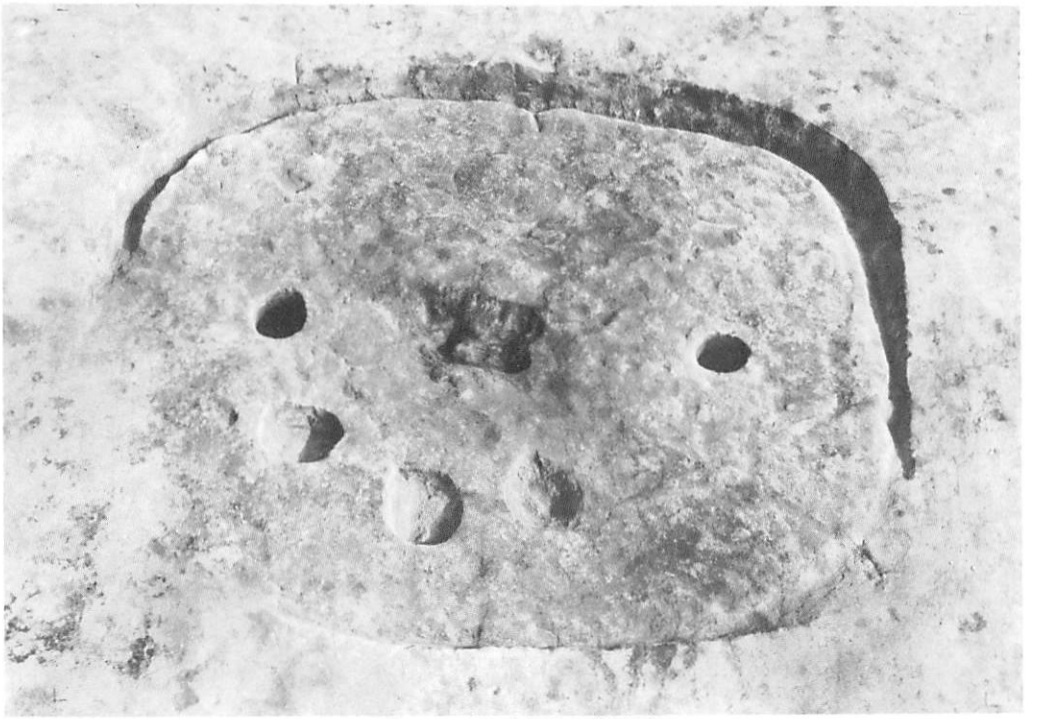
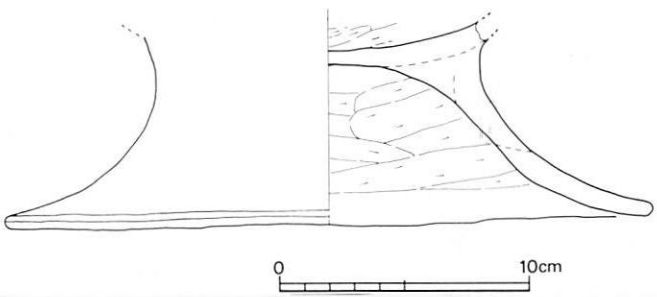


Fig. 84　永宗第2号住居跡

第２号住居跡

調査区の中央部東寄りに位置する。平面形が隅丸方形をなす住居跡で，長軸440cm，短軸 395 cm，面積17.4㎡を測る。主軸方向を2本の主柱穴を結ぶ線と考えるとN83°Eとなる。吉備土上面で検出したが，残りが悪く壁が一部で流れている。遺存状態の良い南壁で15cmの壁高があり北東及び北西のコーナーで壁が消滅する。主柱穴１・２は中央ピット３を挟む位置にあり，１：径30 cm・深さ50cm，２：径30cm・深さ60cmを測る。柱穴間の柱穴中心間の距離は 245 cmで，埋土は暗褐色土一層のみであった。中央には方形のピット３が存在し，西側にテラスをもち，東側で深くなる。長軸60cm・短軸50cm・深さ15cm程度である。埋土は三層に識別されるが，各層いずれも炭化物及び焼土粒を含んでいる。ピット上方北側は，赤褐色に焼けており，炉穴と考えられる。このほかに３個のピットが北側に三つ並んで検出されている。各ピットともに径40cm，深さ10cmを測る。性格不明のピットである。

Fig. 85　永宗第２号住居跡遺物出土状態



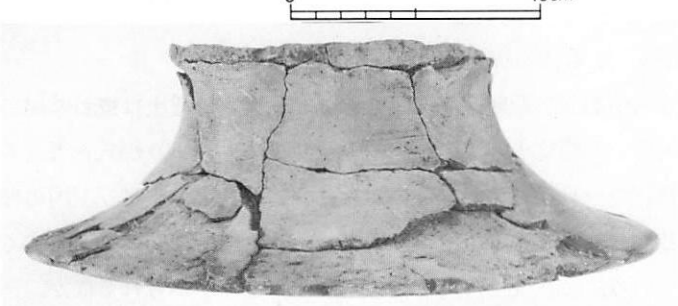


Fig. 86　永宗第２号住居跡出土遺物

遺物は土器片が数個体分出土しているが，中央ピットの上面と南西側に集中し，細片となって出土した。

なお本住居跡は，西山遺跡に於て復元した２本柱住居のモデルとなったものである。これについては付編で述べることにする。

出土遺物

土師器　大形の低脚でラッパ状に開くものである。脚端部の径は26.8cmを測る。調整は外面ヨコナデ，内面上部ヘラ削り，下部ヨコナデとなっている。また上部の土器の底面もヘラ削りがほどこされている。焼成・胎土ともに堅緻である。特異な形態をした土器であり，上部の土器形態は明らかでない。

第3号住居跡

住居跡状遺構の東側約5mに位置する。地山はこのあたりで高まり北西に向かって傾斜する。平面形は隅丸方形で長軸340m，短軸300cm，面積10.2㎡を測り，本遺跡中最小のものである。壁高は傾斜の関係上，南壁で20cmを測り北東壁は消滅する。壁溝は設けられず床面からすぐに壁面が立ち上がる。第2号住居跡と同様に2本柱の住居跡で，中央のピットを挟んで主柱穴1，2が検出された。主軸方向をこの主柱穴間を結ぶ線とするとN 75°Eとなる。1は径20cm，深さ60cm，2も径20cm，深さ60cmで，柱穴中心間の距離は175cmである。主柱穴の埋土は概ね暗褐色土一層であった。床面中央には円形で西側に小さな張り出しをもつピットがあり炉穴と考えられる。径75cm，深さ40cmのすり鉢状で一旦緩く傾斜し途中からその度合が増す。ピット内の埋土は炭化物を含む黒褐色土であるが，部分的に赤褐色の焼土が挟まる。床面には焼土塊が多く分布し，炭化材が多量に遺存している。また焼土・炭化物は東側に集中してみられるほか，一部では壁に沿って数本の炭化材が並んで出土している。

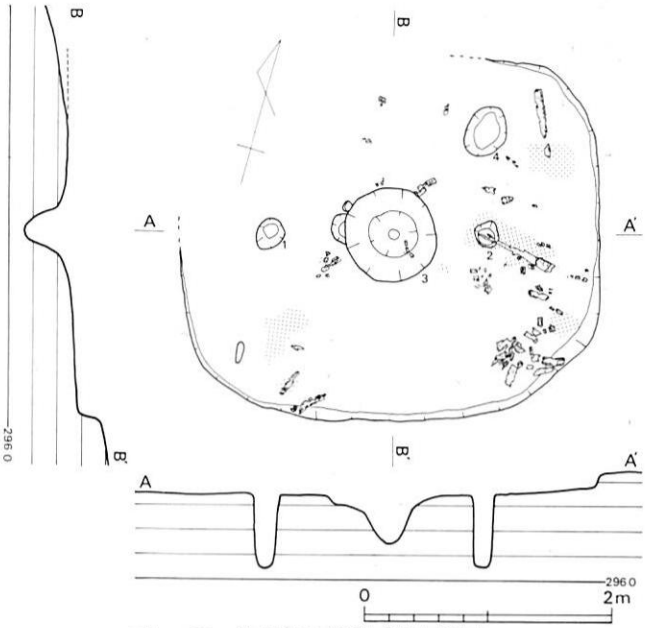


Fig. 87　永宗第3号住居跡実測図

これらの状況から，本住居跡は焼失家屋の可能性が考えられる。遺物がほとんど出土しておらず，ただ一点焼けて赤化しススの付着した礫がみられるだけである。土器類を持ち去った後，故意に火をつけて燃したものか，移住した後に火災を受けたのかどちらかであろう。

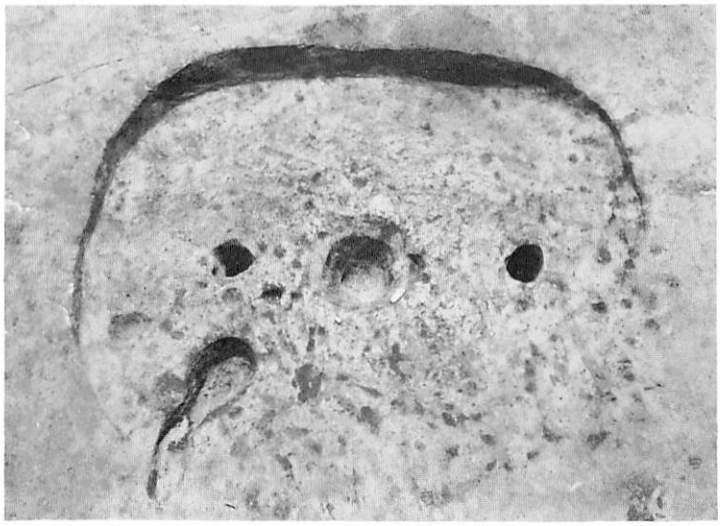


Fig. 88　永宗第3号住居跡

住居跡状遺構

調査区の南西隅の斜面上に位置する。平面形は第２号住居跡・第３号住居跡と若干異なり方形をなし，また内部の構造も大きく異っている。長軸は 440 cm，短軸 430 cm のほぼ正方形となり面積は18.9㎡を測る。傾斜地に位置するため，壁高は東壁で40cmを測るが西壁では消滅している。また壁面は70°の角度をもって立ち上がる。床面には南北に二つの方形の凹みがあり，中央南寄りに幅90cm程度の畦状の高まりができている。この畦の方向を主軸方向とするとＮ60°Ｗとなる。北側の方形プランは長軸 380 cm・短軸 180 cm で南側でやや丸みをおびる。深さは15cmを測り，底面は平坦で方形となる。その底面には大小４つのピットが１つを除いてほぼ一列に並んでいる。これらピットは深さ10cm程度と浅い。一方南側の方形プラシはやや小さく，長軸260cm・短軸110 cmで深さ10cm程度である。南西コーナーは壁が消滅している。中央の畦が東壁につきあたるところには，円形のピット１がある。このピットは底面で段を有し，径60cm・最深部22cmである。

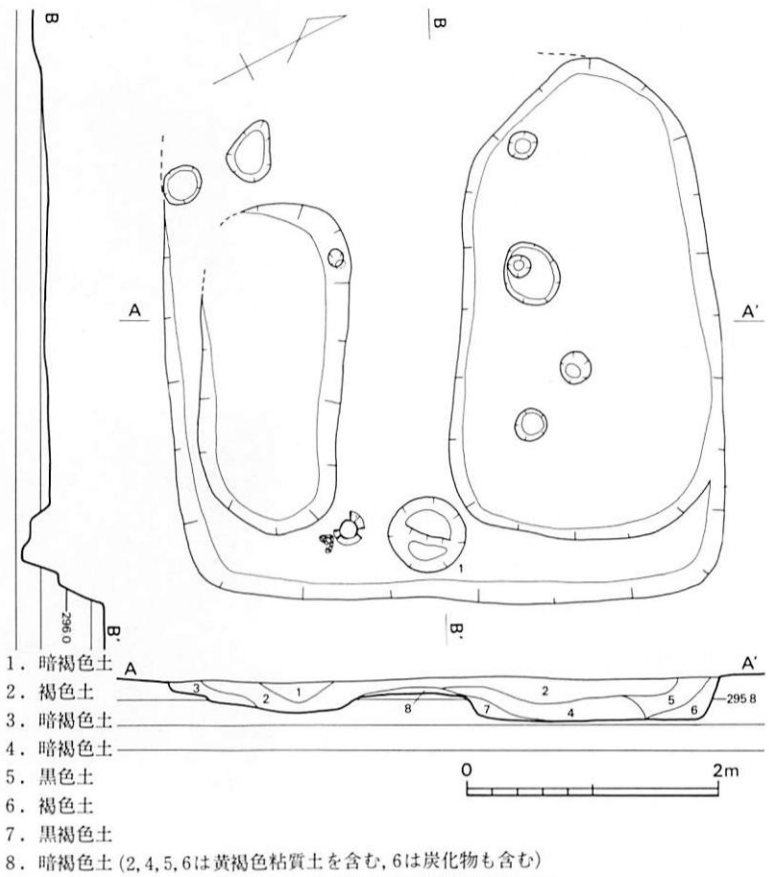


Fig. 89　永宗住居跡状遺構実測図

Fig. 90　永宗住居跡状遺構

埋土には，炭化物も焼土も混入していなかった。この他に南側の方形プランの西側に，浅い2つのピットがみられるが性格不明である。

一般的な住居跡の構造と異なり，いかなる性格を有するものか判断し難いが，いずれも脚部を欠いた高坏のみが円形ピットの南側で3点集中して出土しており，何らかの特別な意味があるものと思われる。

出土遺物

土師器　高坏のみで2形態に区分される。1は坏部が埦状に内彎し，内面には放射状に暗文が施されている。脚との接合部は円板充塡式であり，坏底面中央に刺突孔が残っている。色調は赤褐色を呈する。2・3は坏部の底面をつくり，稜をもち外上方に口縁がのび端部でわずかに外反する。接合は差し込み式によるものである。胎土は共にやや赤味をおびる。

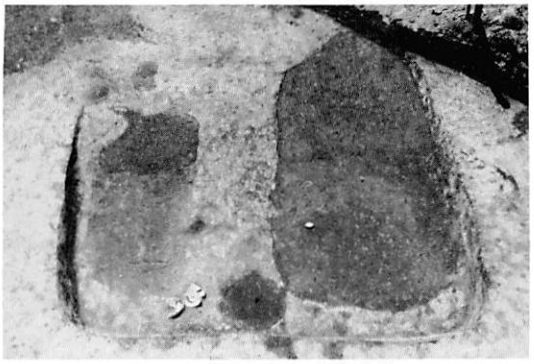


Fig. 91　永宗住居跡状遺構

Fig. 92　永宗住居跡状遺構の遺物出土状態

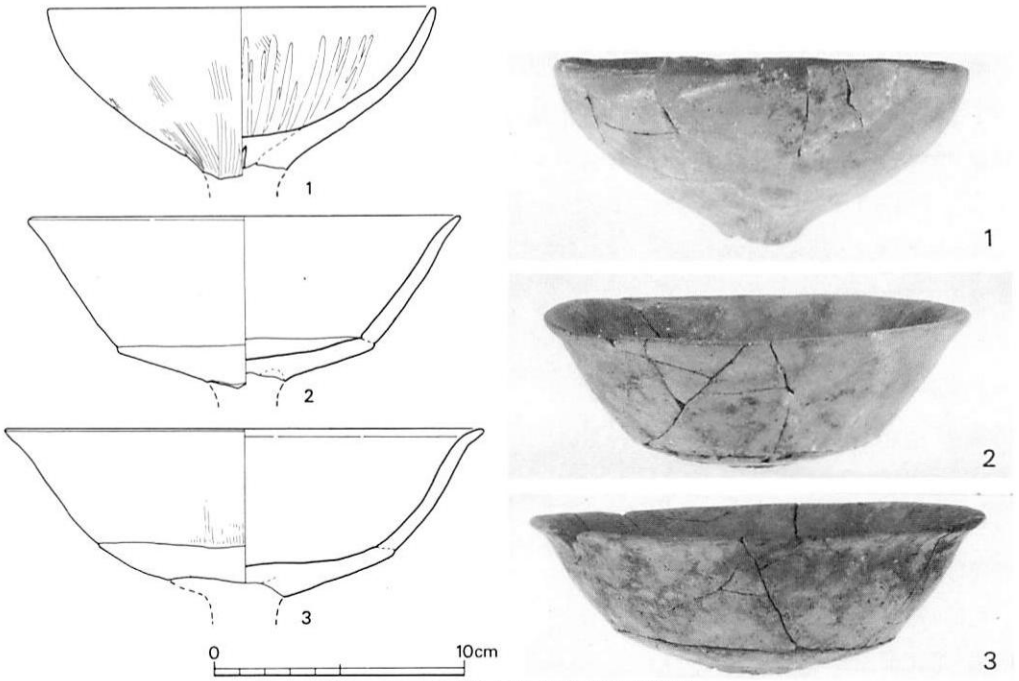


Fig. 93　永宗住居跡状遺構出土遺物

3．建物跡

第1号建物跡

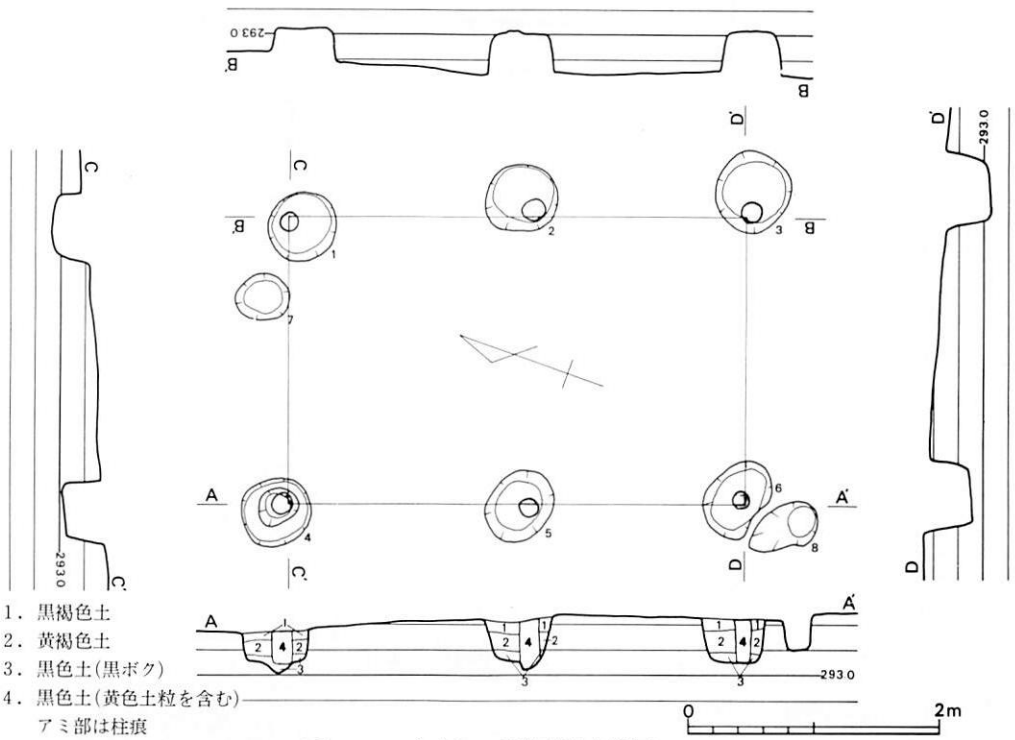


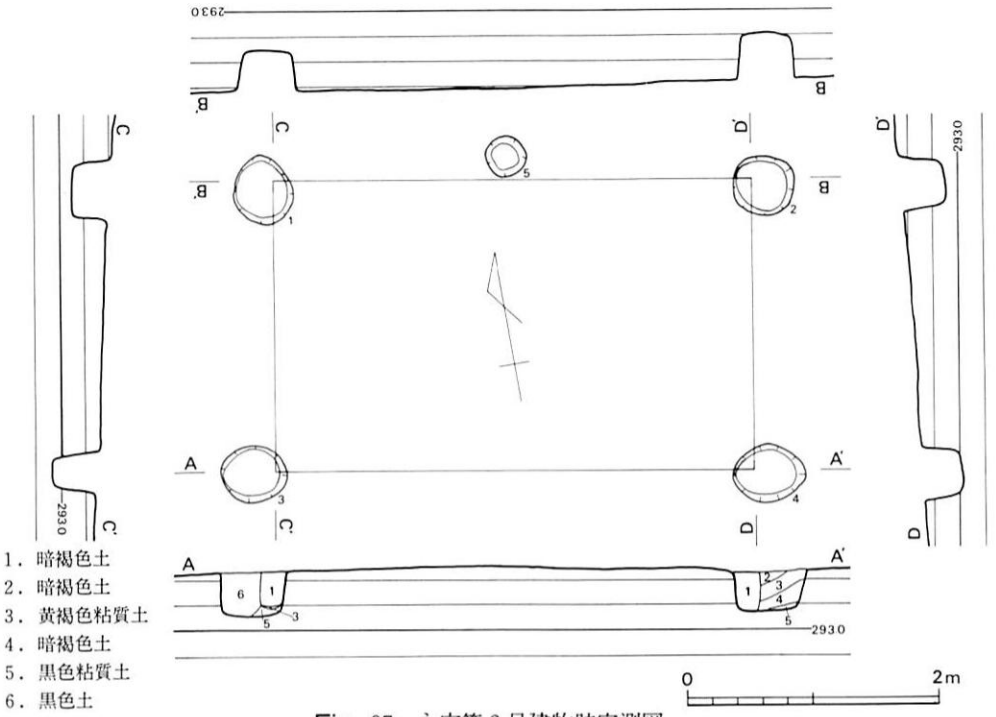
Fig. 94　永宗第1号建物跡実測図

Fig. 95　永宗第1号建物跡土層断面

調査区北東端の第1号住居跡の南側3mに位置する。2間（362cm）×1間（250cm）の掘立柱建物跡である。検出面は，吉備土上面であるが，掘り込み面は上層の漸移層からである。柱穴の掘方はほぼ円形を呈し，1：径55cm・深さ20cm，2：径58cm・深さ30cm，3：径60cm・深さ30cm，4：径55cm・深さ45cm，5：径56cm・深さ30cm，6：径57cm・深さ30cmを測る。埋土は黒色土～暗黄褐色土で，径20cm内外の柱痕を確認した。柱穴中心間距離は桁行180cm，梁行225cmで，桁行方向はN19°Wとなっている。遺物を全く伴出していない。

Fig. 96　永宗第1号建物跡

第2号建物跡



1．暗褐色土
2．暗褐色土
3．黄褐色粘質土
4．暗褐色土
5．黒色粘質土
6．黒色土

Fig. 97　永宗第2号建物跡実測図

第1号住居跡の西側に位置する。1間（380cm）×1間（290cm）の掘立柱建物跡である。桁行方向はN80°Wである。掘方はほぼ円形を呈し，1：径55cm・深さ30cm，2：径48cm・深さ35cm，3：径55cm・深さ37cm，4：径65cm・深さ35cmを測る。埋土は黄褐色土と黒色土で，径20cmの暗褐色土の柱痕を見分けることができた。建物跡南やや外側に，径35cm・深さ10cm程度のピット5が存在する。性格は不明であるが，建物に関する何らかの施設の跡であろう。1間×1間であることから，当初平地住居の可能性が考えられたが，床面は堅く踏みしめられた痕跡がなく周囲と変わらなかった。また遺物は全く出土していない。

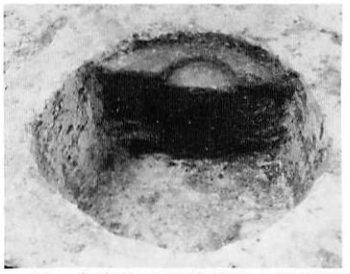


Fig. 98　永宗第2号建物跡土層断面

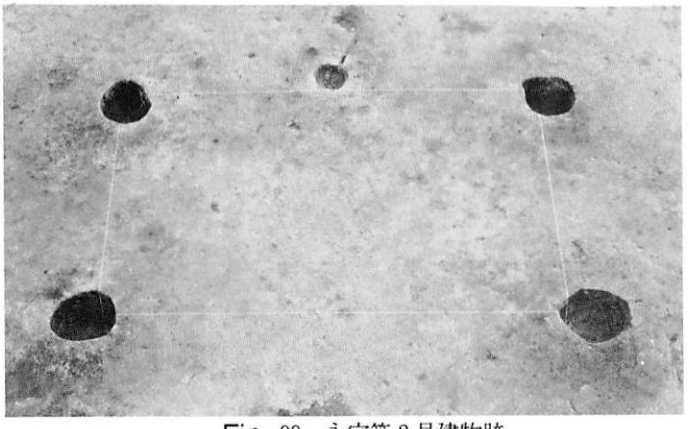


Fig. 99　永宗第2号建物跡

第3号建物跡

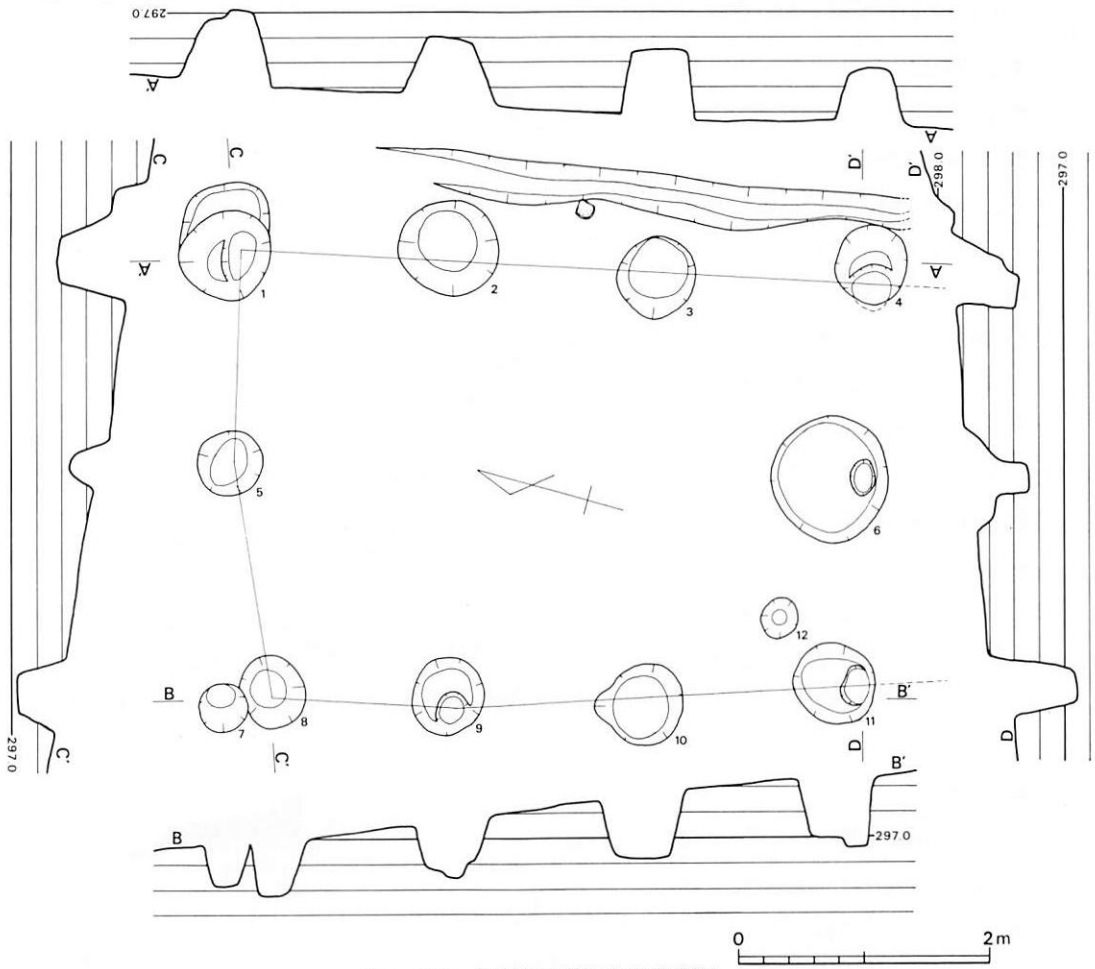


Fig. 100　永宗第3号建物跡実測図

調査区の南西隅の傾斜面に位置する。上方の柱穴と下方の柱穴との比高差は60cmである。2間（350cm）×3間（600cm）以上の規模を持つ。柱穴は，1：径95cm・深さ59cm，2：径75cm・深さ50cm，3：径65cm・深さ55cm，4：径65cm・深さ48cm 5：径50cm・深さ40cm，8：径60cm・深さ45cm，9：径62cm・深さ50cm，10：径65cm・深さ55cm，11：径65cm・深さ68cmを測る。柱間寸法は不揃いであるが，桁行方向はN14°Eである。

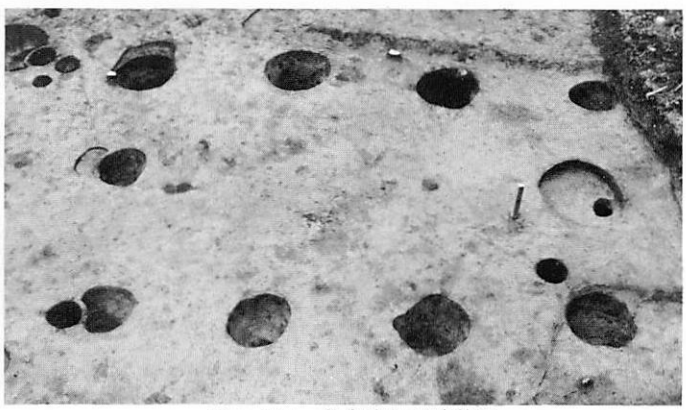


Fig. 101　永宗第3号建物跡

4．その他の遺構・遺物

第1号土坑

第1号建物跡の東側に隣接している。長軸286cm，短軸250cmの方形の土坑で深さ80cmを測る。底面もほぼ方形をなし，長軸225cm，短軸247cmである。主軸方向はN35°Eで，埋土はほぼ黒褐色土であった。土坑墓と考えられ検出時には，炭化物の塊や土師器片1片が出土した。しかし土坑内部からは炭化物が少量出土するのみであった。

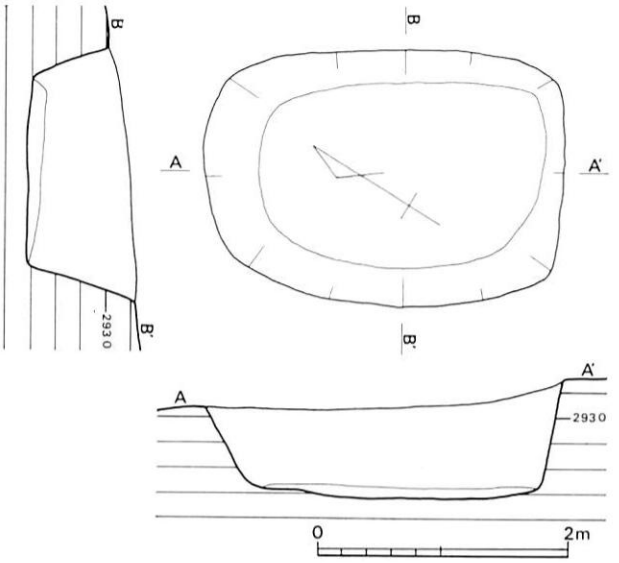


Fig. 102　永宗第1号土坑実測図

第2号土坑（Fig.74）

第1号住居跡の北東3.5mに位置する。直径40cmの円形土坑で深さ43cmを測る。底面もほぼ円形で，径30cmとなっている。土坑内の埋土は黒色土一層で，遺物，炭化物等は全く出土していない。性格不明の土坑である。

溝状遺構

第3号建物跡の東には幅30cm，長さ410cm以上の溝がみられる。深さは10cm程度で，底は平坦となり15cmの幅がある。第3号建物跡に伴う施設とも考えられるが，遺物等は出土しておらず性格不明である。この溝は発掘区外に延びている。

出土遺物

須恵器　坏蓋(1)は溝状遺構の脇から出土したものである。中央に宝珠形のつまみが貼り付けられており，口縁部がL字状に折れて垂下するものである。坏身(2)は試掘調査時のトレンチより出土したものでどの遺構に伴ったものかはっきりしない。底部から口縁に向かってL字状に開き，口縁端部がやや外反する。底面には高台が貼り付けられている。

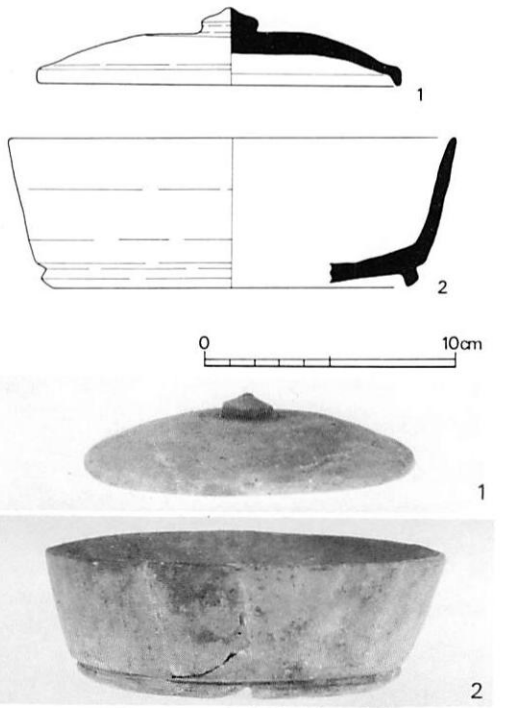


Fig. 103　永宗遺跡出土遺物

5．おわりに

永宗遺跡では古墳時代前期から中期にかけての住居跡3軒，住居跡状遺構1軒，掘立柱建物跡3棟を検出した。

最も古い遺物は第1号住居跡出土の遺物で　甑形土器，壺，甕，高坏，砥石等多くがある。このうち床面直上のものは甑形土器だけであったが，他の遺物のほとんどが住居埋土最下層に属し，また中央部に集中して出土しているものであり，一括遺物としたい。この中で比較的多くみられる複合口縁の甕をもとに，その年代を検討してみたい。甕は口縁立ち上がりの短いもの（8・15），長いもの（1·4·7·10·14·16）の大きく2類に分類できる。後者はさらに直線的に立ち上がるもの（4·7·14·16）と，やや外反気味に立ち上がるもの（1·10）に細分される。これには櫛状工具による波状文もみられる。しかし，いずれの場合も口縁端部をカットし，平坦面を持ち，全体的に直線的で力強い作りを示している。また「く」字状の単純口縁を呈する甕（11·13·17）は，口縁部が大きく外に開く。調整は内面頸部直下からヘラ削りが行われ，口縁部ではヨコナデがない。このような特徴は庄内式新相併行の特徴を示すものであり，以上のことから青木Ⅴ・Ⅵ式期からⅦ式期古[(1)]にかけての時期に比定され，出雲地方の編年では鍵尾Ⅱ式期に後続する小谷式[(2)]に対応する。

第2号住居跡出土の低脚は第1号住居跡の高坏（18）と同様のものと共伴した。他に類例がなく断定はできないが，器肉が厚く大型であることを加味して，第1号住居跡出土土器と同時期か，やや古いものと思われる。

住居跡状遺構出土の2·3は，胎土・焼成ともに良好で，作りは丁寧である。神辺御領遺跡SD 04[(3)]出土のものに類似点が見出され，布留Ⅱ式期の所産であろう。

遺構外出土の須恵器は，その特徴から奈良時代前期に比定される。

出土遺物より，第1・2号住居跡はほぼ同時期に併存していたと思われる。また第3号住居跡からの出土遺物がないため断定はできないが，1辺350㎝前後の隅丸方形，2本柱で中央に炉穴を有するという形態を示し，第2号住居跡との同時存在を考えることができる。

第1号住居跡南西壁の階段状の張り出し部は出入口で，その外側の小ピットは出入口に関連する施設痕であろうが，住居内にはその痕跡を見出し得なかった。位置としては，妻入り，平入り，そのいずれでもなく，柱の対角線方向にあることが注目される。また，二段の階段状を呈しているが，その方向が壁と平行で，北西に開口することになる。このように，明確な張り出し状の出入口が検出されたのは非常に珍しく，上屋構造と同時に，“玄関”のもつ意味を解明する上で興味深い資料を提供したといえる。

本住居跡出土の甑形土器の分布は広島県3か所（本件を含む），島根県・鳥取県で各5か所が知られており，山陰系の地域色濃い土器とされている。これはその形，大きさから実用品というよりは，むしろ「象徴化された土器」であり，住居跡床面上の壁際・柱穴付近・中央ピット

付近から出土するというあり方から，個別住居内での祭祀用儀器と考えられている[4]。本住居でも炉穴と柱穴の間で唯一の床直遺物として完形で検出されており，住居廃絶に伴なう何らかの行為が想定される。これは第2号住居跡の遺物出土状態からも考えられることで，炉付近で粉々になった低脚は故意に破砕された可能性が強い。今後，このような住居内での祭祀形態の系統的な解明が急がれよう。

本遺跡でさらに目をひくものは発掘区南西端に位置する住居状遺構である。あたかも廊下と，その左右にある小部屋の如きである。中央部と東壁下が固く踏みしめられているのに対し，両落ち込みの床は軟弱であった。また，出土遺物が高坏のみで，いずれも脚部を欠失していることも注目される。非常に特異な形態を示す遺構で，祭祀的なものが感じられるが，現在のところ他に類例がなく，その性格について述べるのはひかえたい。

3棟の掘立柱建物を検出した。いずれも出土遺物はないが，第1・2号建物跡は第1号住居跡と同時期と思われる。特に第2号建物跡は第1号住居跡と主軸方向を一にすることから第1号住居跡に伴なうものであろう。性格は住居，納屋，作業場が考えられる。第3号建物跡は第1・2号建物跡に比べ掘方が大きく不揃いで埋土の状況も異なっており，また等高線とも斜行している等様相を異にしている。付近で須恵器(1)が出土していることから，奈良時代に属するものとも考えられる。発掘区西南半部の標高295～296m，296.5～298mに点在するピット群は，現場に於ける観察では人為的なものではないと思われた。

以上，本遺跡では主に古墳時代前期前半の遺構・遺物を明らかにした。それは従来，広島県北部でみられた如く，山陰文化の色濃い影響を示すものである。本遺跡は標高330mの山頂より派生した丘陵の北西端に位置するが，この山頂に向かって広大な緩斜面が広がっており，その数か所で厚く堆積した黒ボク中より，複合口縁をなす甕・壺破片が採集され，古墳時代前期の大集落の存在が想定される。当地域の古墳文化の発生，発達を解明する上で重要な遺跡であり，今後範囲確認等の実態調査が急がれよう。

(註)

(1) 青木遺跡発掘調査団『青木遺跡発掘調査報告書』Ⅰ・Ⅲ　1976，1977
(2) 内田才・東森市良・近藤正「島根県安来平野における土坑墓」『上代文化』第36輯　1966
藤田憲司「山陰「鍵尾式」の再検討とその併行関係」『考古学雑誌』第64巻第4号　1979
(3) 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター『神辺御領遺跡』　1980
(4) 桑原隆博「三次市内出土の所謂「山陰型の甑形土器」について」『芸備』第10集　1980

付　　編

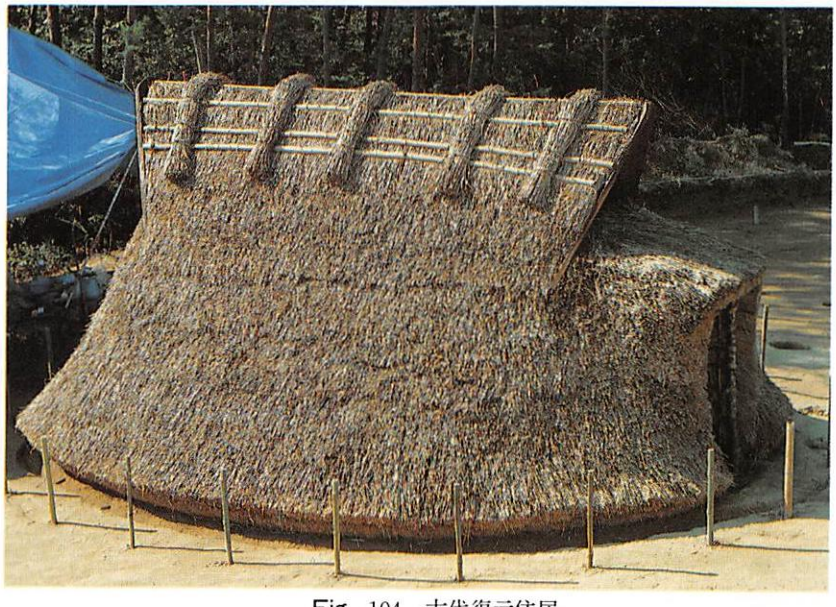
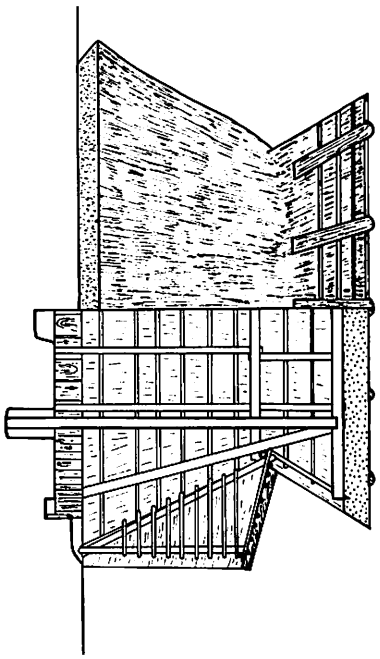
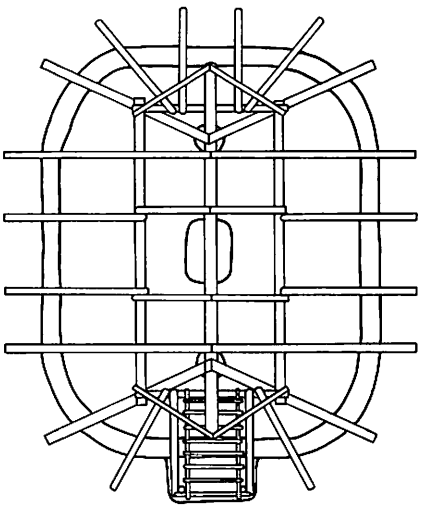


Fig. 104　古代復元住居





復元住居材料

杉丸太	柱	350cm	10cmφ	2本
	棟	400cm	12cmφ	1本
	叉首1	360cm	10cmφ	4本
	叉首2	150cm	5cmφ	4本
	桁	320cm	10cmφ	2本
	梁	160cm	7cmφ	2本
	棰木1	370cm	7cmφ	4本
	棰木2	250cm	7cmφ	4本
	棰木3	230cm	7cmφ	3本
	棰木4	140cm	7cmφ	4本
竹	小舞竹	50本		
	茅のおさえ	50本		
茅	300束（1束約30cmφ）			
稲藁	50束（ 〃 ）			
縄	6巻			

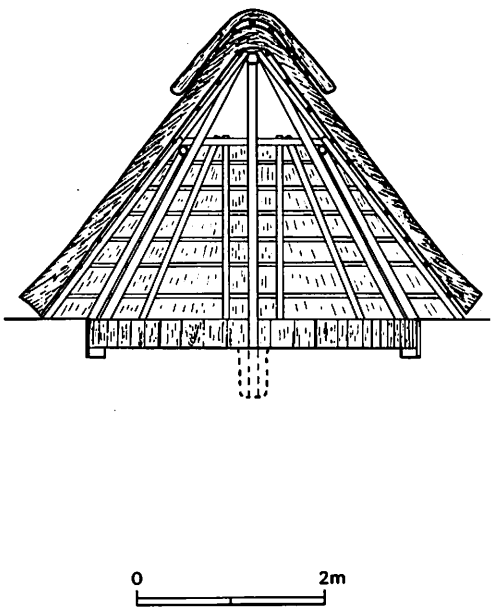


Fig. 105 古代住居復元図

2本柱の古代復元住居

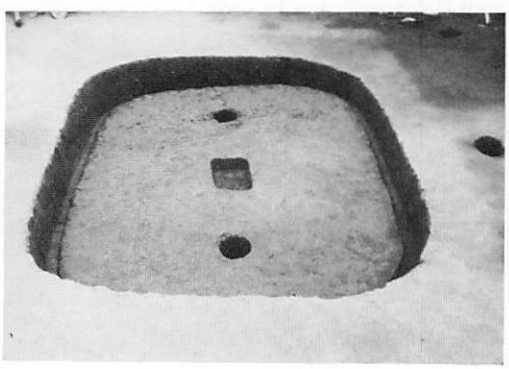
1．はじめに

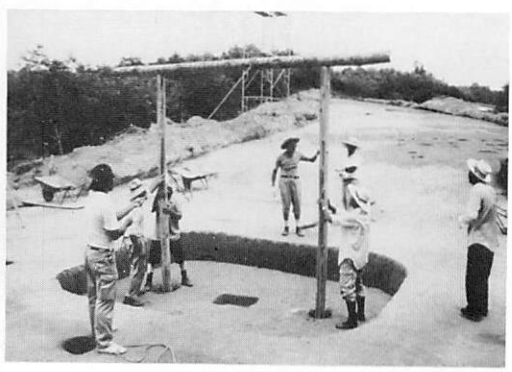
「こんな穴にどうやって人が住んでいたんだろう。」

「いったいどんなものが建っていたんだろう。」

これは遺跡で住居跡を掘っている際に，必ず耳にする言葉である。検出された遺構を前に,「これは昔の家であり，これこれこのようなものが建っていた」と説明したところで，一般の人々にとってイメージは非常に漠然としており，印象は薄いものであろう。これは住居跡だけに限ったことではなく，他のあらゆる遺構についても然り。(財)広島県埋蔵文化財調査センターでは従来，広報普及活動の一環として各現場で地域住民を対象に遺跡見学会を行ってきたが，参加者にいかに強くアピールし，理解してもらうかには常に頭を悩ませるところであり，一つの課題でもあった。そこで，今回の調査では新しい試みとして，永宗遺跡検出の第2号住居跡をもとに古代住居を復元し，見学会の参考資料とした。永宗第2号住居跡は前章で述べた如く，遺存状態が悪く，上部構造を知る手がかりとしては2本の柱穴だけであり，推測に負うところが大きいが，2本柱住居は福岡県久保長崎遺跡報告[1]で図上復元があり，これを参考にした。調査のあい間をみて行ったもので決して満足のいくものではなかったが，見学会参加者のより一層の理解を深めると同時に，調査者自身にとっても今後発掘を行っていく上で示唆に富むものとなった。以下，復元過程を簡単に説明する。

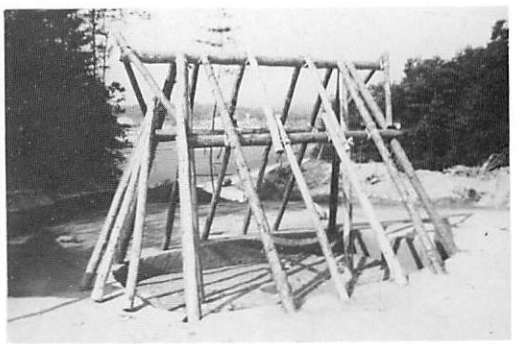
2．復元過程





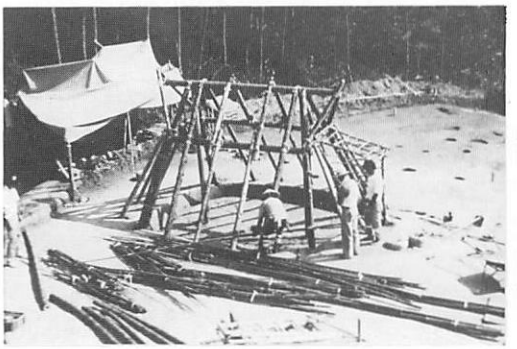
永宗第2号住居跡をもとに420×380cm，深さ30cmの隅丸方形竪穴を掘った。柱穴は径30cm，深さ50cmで，岩盤に達する。幅20cm，深さ10cmの壁溝と炉穴を設ける。3人で1日を要した(1日の実労時間を8時間として換算する。また，作業者は1日ほぼ3人であった)。

棟木にほぞ穴をあけ，主柱を組み「ㅠ」形にしてから柱穴に建て埋める。この状態で既にかなり頑強である。



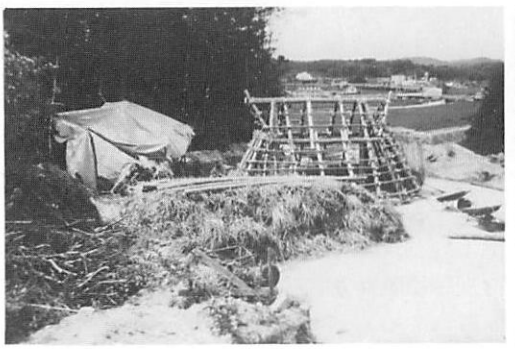
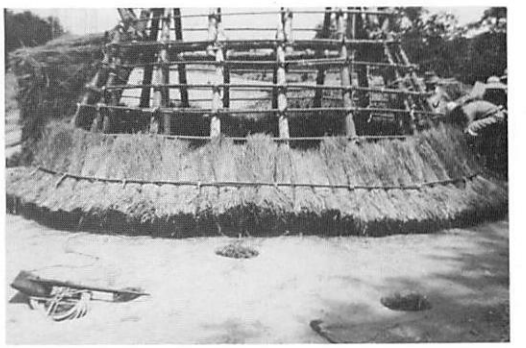
棟木と柱の交点に四隅から又首をわたす。

この又首に切り込みをいれ，桁を架け，さらにその上に梁を架ける。縄でしばる前に仮留の意味で釘を使用したが，縄だけで十分に耐え得ると思われた。桁と梁との交点から棟木の端に又首をわたし，破風を作る。棰木をわたす。



妻入り方向に出入口を設け，間隔30～40cmで小舞竹をめぐらす。棰木との交点は全て縄でしばる。

骨組み完成。3.5日間を要した。

使用した茅（300束）。夏茅で穂がないため，丈が短い。このほかに藁50束を使用したが，それでもまだ不足であった。

束ねた藁（または茅）を裾に廻らせ，上から竹でおさえる（骨組みとではさむ）。

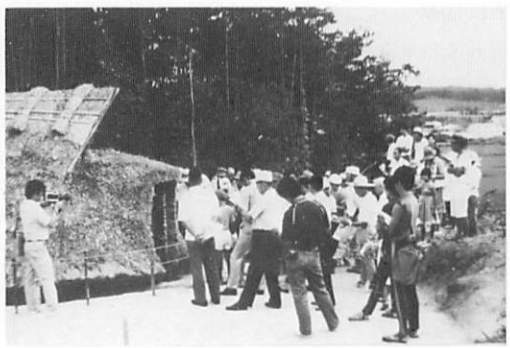
茅を竹でおさえながら，一段ずつ葺きあげていく。一段ごとに葺き上がる高さは20cm前後で，上まで葺きあげるのに，短い夏茅を使用したため十数段かかった。

上に葺きあがるに従い，足場を設けていく（骨組みに結びつける）。棟付近は茅を二つ折りにし，棟木にふり分けるように乗せる。

棟の茅を竹でおさえ，さらにこれを束ねた茅でおさえる。

上から刈り込みながら，足場もはずしていく。

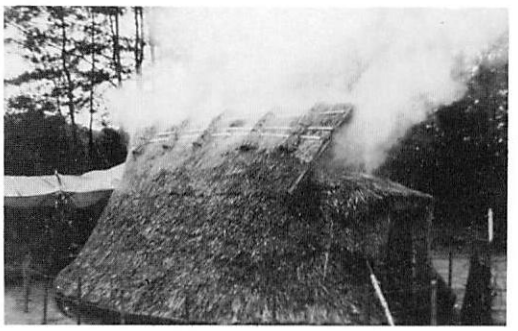
完成（Fig. 104参照）。屋根葺きに11.5日間，全部で15日間を要した。



住居内部。

遺跡見学会風景（参加者約200名）

3．ま と め



このように１日３人，15日間で２本柱入母屋造りの住居を復元した。前にも述べた通り，調査のあい間という限られた条件の下で，設計段階に十分な考察もできず，現場で試行錯誤を繰り返しながら作ったものである。この作業を通して気付いた点をいくつか羅列してみたい。そのほとんどが既に言われていることであるが，実際に建ててみて感じた体験談として述べてみたい。

２本柱について　当初，２本柱で本当に家が建つのか疑問であったが，前述の久保長崎遺跡報告の復元図を参考に建てたものは，構造的に簡単で，その上非常に堅牢であることがわかった。４本柱は柱に架けた梁からさらに棟を上げるもので，棟持ち柱も必要となってくる。その点，２本柱の方が単純かつ頑丈で，むしろ合理的ではないかと思われる。ただ，柱が床中央部にあるため，スペースが狭くなるが，壁側に寄せれば解消されるであろう。

広さについて　同じ竪穴でも上屋のある，なしでは，広さに対する印象がかなり異なってくる。これは棰木の位置と関係があり，壁から離せば離す程広くなるわけで，一概に床面積だけでは広さは表現し得ないこともある。本住居は斜面に復元したため，ひと雨で上方と屋根からの雨水で住居内は水びたしとなってしまったが，山側の屋根の内側に溝を設けることにより解決した。このような棰木を支えるピットや溝は上屋構造・規模を復元する上で重要な手がかりとなるが，浅くても十分に機能するため，遺構確認段階で削平してしまうことが多く，細心の注意を以って検出にあたらねばならないことをあらためて痛感した。

材料について　骨組みは全て杉丸太を使用した。小舞は適当な枝木がなく，竹を使用した。茅は休耕田に自生していた青い夏茅を刈り取り，１週間天日で干したものである。本来は穂の出たものを晩秋に刈るのであるが，丈が短かかったほかは十分使用に耐え得るようである。近年，茅は手に入りにくいといわれるが，意外と身近に繁茂しているものである。

煙について　上の写真は排煙の状況をみるために，多量の煙を出してみたところである。小量であれば破風から速やかに排煙されるが，多量の場合は屋根上半部からも茅を通り抜け排煙されることがわかった。これには茅中の害虫をいぶり出すと同時に，タールにより茅を長持ちさせる効果があると思われる。この程度の煙でも，座っていれば煙たさを感じることはなく，通気性に優れていることがわかった。

住居内は，湿度がやや高かったが，涼しさは格別で休み時間はこの中で過ごした。

見学会には 200 名近い参加者があり，好評を博した。発掘現場における住居の復元は条件が

揃わなければなかなかできることではないが，見学会の一方法として非常に有効であったことは確かである。

（註）

(1) 福岡県教育委員会「久保長崎遺跡」『福間バイパス関係埋蔵文化財調査報告』 1973

昭和57年３月31日
西山・小和田・永宗
国道183号線改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
編集・発行
広島県教育委員会
(財)広島県埋蔵文化財調査センター
印刷
株式会社 中本本店印刷